

京都市内遺跡試掘調査報告

平成27年度

2016年3月

京 都 市 文 化 市 民 局



巻頭図版1 中臣遺跡 遺構面検出状況（北東から・第IV章-4）

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成 27 年度の京都市内遺跡試掘調査報告書である。平成 27 年 1 月から 12 月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものについて本文で報告している。ただし、試掘調査の結果、発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書の刊行を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
試掘調査を実施したすべての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載している（64～70 頁）。なお、各章表題末尾の番号と調査一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 2 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 3 本書報告の調査のうち、基準点測量を実施した調査の方位及び座標は、世界測地系平面直角座標系 VI による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。また、これ以外の場合は、既存公共物などを仮基準点（KBM）として用いている。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺 1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版 1～13 1/8,000 図版 14～20 1/10,000
- 5 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年に準拠する。
- 6 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 7 遺物整理にあたっては、上茶谷美保・上別府亜紀熊代信吾・中村春美・美馬順二・義井良作・吉本健吾の協力を得た。
- 8 調査及び本書作成は、京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課が担当し、（公財）京都市埋蔵文化財研究所の協力を得た。

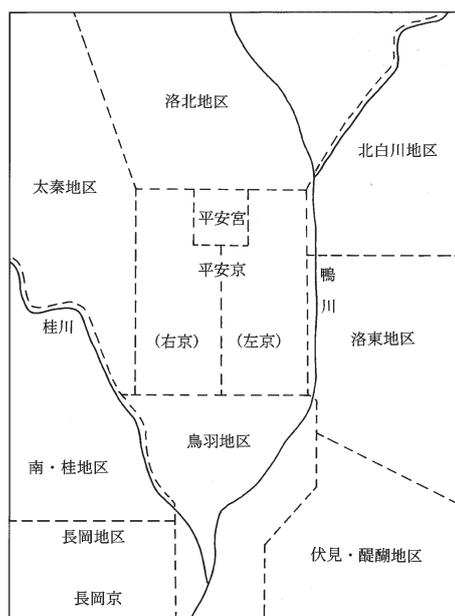


図 1 調査地区割図

本文目次

I	試掘調査の概要	1
II	平安左京	3
1	平安京左京四条四坊二町跡（中京区蛸薬師通東洞院泉正寺町 327 他）	3
III	平安京右京	9
1	平安京右京三条二坊六町跡・西ノ京遺跡（中京区南原町 57-1,58,59,86-186-3,87）	9
2	平安京右京六条三坊二町跡・西院遺跡 （右京区西院南寿町 15-1 他 4 筆，西院西寿町 6-1 他 2 筆）	12
IV	そのほか市内遺跡	15
1	嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡（右京区嵯峨天龍寺今堀町 11-5）	15
2	白河街区跡・岡崎遺跡・東光寺跡（左京区岡崎天王町 27, 15-3, 15-5）	18
3	岡崎遺跡・法勝寺跡（左京区岡崎南御所町 6,7）	23
4	中臣遺跡（山科区栗栖野華ノ木町 11,12）	34
5	上久世遺跡（南区久世上久世町 360）	48
6	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡（伏見区竹田中内畑町 116-1）	52
7	長岡京左京二条三坊八町・九町跡・鶏冠井遺跡（南区久世東土川町 180-5 他 11 筆）	56
8	長岡京左京北辺二坊十四町跡（南区久世殿城町 313-5）	59
V	試掘調査一覧表	63
	報告書抄録	71

図版目次

巻頭図版1 中臣遺跡 全景

図版1 平安宮

図版2 平安京左京北辺～三条 一・二坊

図版3 平安京左京北辺～三条 三・四坊

図版4 平安京左京 四～六条 一・二坊

図版5 平安京左京 四～六条 三・四坊

図版6 平安京左京 七～九条 一・二坊

図版7 平安京左京 七～九条 三・四坊

図版8 平安京右京北辺～三条 三・四坊

図版9 平安京右京北辺～三条 一・二坊

図版10 平安京右京 四～六条 三・四坊

図版11 平安京右京 四～六条 一・二坊

図版12 平安京右京 七～九条 三・四坊

図版13 平安京右京 七～九条 一・二坊

図版14 史跡仁和寺御所跡・草木町遺跡・太秦馬塚町遺跡・一ノ井遺跡・名勝大沢池附名古曾滝跡
史跡大覚寺御所跡・観空寺跡・嵯峨遺跡・史跡名勝嵐山・嵯峨北堀町遺跡

図版15 岩倉中在地遺跡・八幡古墳群・御土居跡・下鴨城跡・上京遺跡・北野遺跡・寺ノ内旧域

図版16 白河街区跡・岡崎遺跡・法勝寺跡・尊勝寺跡・寺町旧域・法観寺旧境内・中臣遺跡
塚本古墳

図版17 伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）・指月城跡

図版18 山科本願寺跡（寺内町遺跡）・山科本願寺南殿跡・左義長町遺跡・醍醐廢寺・伏見城跡・
長岡京跡・大藪遺跡・檜原遺跡・長岡京跡・淀城跡・與杼神社旧境内・淀水垂大下津遺跡・
上久世遺跡・中久世遺跡

図版19 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡

図版20 長岡京跡・戌亥遺跡・宮ノ脇遺跡

挿 図 目 次

例 言

図 1 調査地区割図	ii
------------	----

試掘調査の概要

図 2 年次別・地区別試掘調査実施件数	1
---------------------	---

平安京左京四条四坊二町跡

図 3 調査位置図	3
図 4 調査区位置図	4
図 5 調査区断面図	5
図 6 1 区主要部分平面図	6
図 7 1 区第 2 面完掘状況（東から）	7
図 8 2 区溝 18 完掘状況（西から）	7
図 9 出土遺物実測図	8

平安京右京三条二坊六町跡・西ノ京遺跡

図 10 調査位置図	9
図 11 調査区配置図	9
図 12 遺構断面図・平面図	10
図 13 遺物実測図	11

平安京右京六条三坊二町跡・西院遺跡

図 14 調査位置図	12
図 15 試掘調査 1 区基本層序	12
図 16 調査区配置図	13
図 17 詳細分布調査断面図	14
図 18 詳細分布調査 A-A' 間断面（南から）	14

嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡

図 19 調査位置図	15
図 20 調査区配置図	15
図 21 調査区実測図	16
図 22 土坑 2 実測図	16
図 23 溝断面（南から）	16

白河街区跡・岡崎遺跡・東光寺跡

図 24	調査位置図	18
図 25	調査区配置図	18
図 26	調査区実測図	19
図 27	1区全景（東から）	20
図 28	2区石列と溝2（北から）	20
図 29	出土遺物実測図	21
図 30	周辺調査平面図	22

岡崎遺跡・法勝寺跡

図 31	調査位置図	23
図 32	調査区配置図	23
図 33	調査区完掘状況・北東から	24
図 34	遺構平面図（中世）	25
図 35	遺構平面図（近世）	26
図 36	調査区西壁断面図	27
図 37	A-A' 断面図	27
図 38	溝 42 完掘状況（東から）	27
図 39	出土遺物実測図・拓影	28
図 40	出土遺物実測図・拓影	29

中臣遺跡

図 41	調査位置図	34
図 42	調査区配置図	35
図 43	遺構面検出状況	35
図 44	遺構完掘状況	35
図 45	体験学習実施状況	35
図 46	調査区西壁断面図	38
図 47	遺構面全体図	39
図 48	溝 10 断面図・出土遺物実測図	40
図 49	遺構平面・断面図（1）	41
図 50	遺構出土遺物実測図	42
図 51	遺構平面・断面図（2）	44
図 52	遺構平面・断面図（3）	45
図 53	山科の条里復元図	47

上久世遺跡

図 54	調査位置図	48
------	-------	----

図 55	調査区配置図	48
図 56	1・2・3区断面図	49
図 57	4区断面図	50
図 58	出土遺物実測図	50
図 59	近隣調査成果の模式図と今回の調査地	51
鳥羽離宮跡		
図 60	調査位置図	52
図 61	調査区配置図	52
図 62	調査区北壁断面図	53
図 63	出土遺物実測図	54
図 64	鳥羽離宮跡東辺部における各地点の柱状断面模式図	54
長岡京左京二条三坊八町・九町跡・鶏冠井遺跡		
図 65	調査位置図	56
図 66	調査区配置図	56
図 67	1区断面図, 2区平・断面図	57
図 68	出土遺物実測図 1	58
図 69	出土遺物実測図 2	58
長岡京左京北辺二坊十四町跡		
図 70	調査位置図	59
図 71	調査区断面図	60
図 72	調査区西端断割り状況 (東から)	60
図 73	調査区位置図	61
図 74	出土土器実測図	61
図 75	溝 1 検出状況 (南東から)	62
図 76	周辺調査状況	62

表 目 次

表 1	中臣遺跡 遺構概要表	39
表 2	遺物概要表	70

I 試掘調査の概要

1 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て、805件を数える。その範囲内でおこなわれる土木工事に対しては、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「詳細分布調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導をおこなっている。この指導業務は、当初、文化財保護課がおこない、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきた。しかし、センターが平成18年4月1日付けで文化財保護課と統合され、現在は文化財保護課埋蔵文化財係が担当している。

行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、詳細分布調査と試掘調査、発掘調査の一部については国庫補助事業として実施している。このうち、詳細分布調査と発掘調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、「埋文研」という。）へと委託してきたが、平成26年4月1日から、文化財保護課埋蔵文化財係が担当しており、その成果は、別冊の報告書により報告される。

本報告書は、平成27年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助事業による試掘調査をとりまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保護が可能であれば

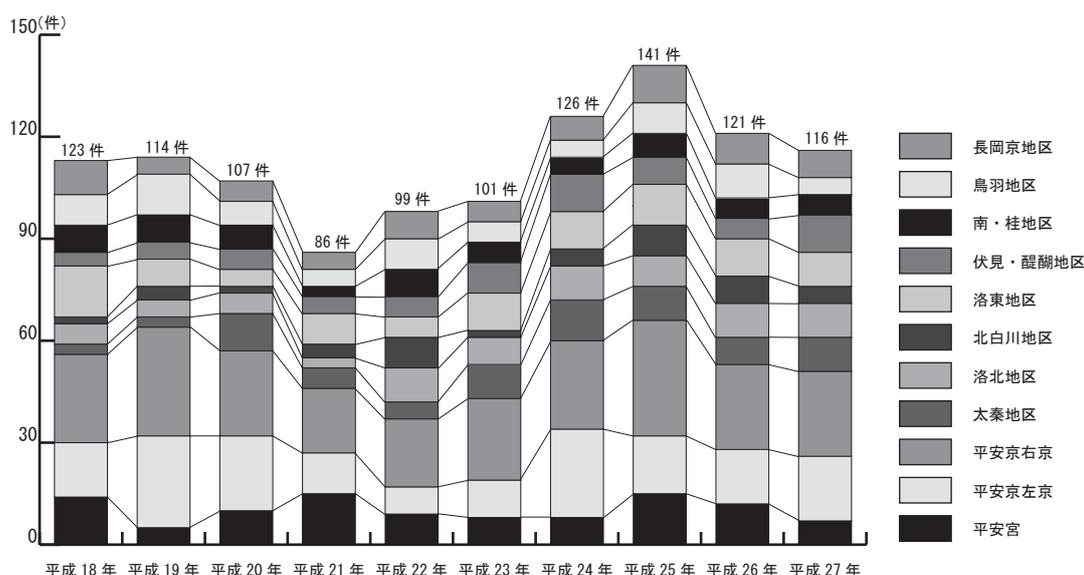


図2 年次別・地区別試掘調査実施件数

開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上、非常に重要な業務であり、現在は9名の技師が常時、従事している。

平成27年1月～12月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第93条）・通知（同法第94条）件数は、総数で1,375件になる。これは前年比で280件（25.6%）の増加である。外国人旅行客の増加の影響もあり全国的に見て資産価値が高いとされる京都市内では、不動産市場が活況であるため届出件数は増加傾向にある。これらの届出・通知に対して、文化財保護課は詳細分布調査571件（前年497件，14.9%増）、試掘調査124件（同117件，6%増）、発掘調査17件（同18件，5.6%減）、慎重工事663件（同465件，42.6%増）の指導をおこなった。

こうした指導に基づき、平成27年に文化財保護課が実施した試掘調査件数は116件である。届出内容は、郊外における宅地造成のほか、市街地では共同住宅、ホテルの建設が目立つ。郊外・市街地を問わず福祉施設建設も増えている。地区別では、左京地区および伏見・醍醐地区が増加していることから、市街地・鉄道沿線付近の開発が活発になっていることがわかる。

2 平成27年の試掘調査概要

文化財保護課及び埋文研では京都市域を12のエリアに区分している（図1）。平成27年の試掘調査の地域別件数は、平安宮地区7件、平安京左京地区19件、平安京右京地区25件、太秦地区10件、洛北地域10件、北白川地区5件、洛東地区10件、伏見・醍醐地区11件、南・桂地区6件、鳥羽地区5件、長岡京地区8件、京北地区0件である。このうち25件（V章・試掘調査一覧表参照）については発掘調査を指示し、うち埋文研が7件（No.1・7・30・40・58・83・99）、株式会社イビソク（代表 野澤直人）が2件（No.44・95）、古代文化調査会（代表 家崎孝治）が4件（No.13・53・81・82）、関西文化財調査会（代表 吉川義彦）が1件（No.62）、京都平安文化財（代表 栗田尚典）が1件（No.19）、京都市文化財保護課が3件（No.15・20・92）の計18件の調査を年内に実施した。

発掘調査をおこなったことで顕著な成果が挙げられた事案としては、平安宮跡で内裏登華殿・弘徽殿の雨落溝などを確認したNo.30、下京の中心地である烏丸綾小路で、平安時代から江戸時代までの連綿とした遺構の変遷を確認したNo.1や伏見城跡内の指月城推定地で、指月城期に遡る可能性がある石垣を検出したNo.19、同じく伏見城内の前田屋敷推定地で大型壺堀地業を確認したNo.20（本年度発掘調査報告参照）などがある。

ほかに工事の掘削深度が試掘調査で確認した遺構面より十分に浅いため、または設計や工法の変更により当面の保存が図られたなどの理由から、発掘調査に至らなかった例が3件（No.24・25・60）ある。また、保存措置が講じられなかったものの報告すべき成果のあった調査9件（No.8・14・41・55・68・92・103・109・111）、前年に試掘調査を実施したが協議が今年度まで及んだものの中で報告すべき成果のあったもの2件（H26 試掘報告No.88・119）について、詳細を報告する。

（赤松 佳奈）

Ⅱ - 1 平安京左京四條四坊二町跡 No. 4 1

1. はじめに

調査地は、東洞院通と高倉通の中程、蛸薬師通の北側に面した敷地である。平安京の条坊では左京四條四坊二町跡に相当する。当該地は、平安時代後期の12世紀前半に民部卿藤原宗通、12世紀後半に大納言藤原重通の邸宅があったとされており¹⁾、敷地南端には四條坊門小路が通ると予想されることから、ホテル建設に先立ち試掘調査を実施することになった。

同町跡では発掘調査が3件行われている(図3)。平成2年の発掘調査(調査1)では、平安時代後期の区画溝や、江戸時代前期に埋没した2条の堀状遺構が検出されている²⁾。平成5年の発掘調査(調査2)では、5面の遺構面が認められ、鎌倉時代の区画溝2条、室町時代の東西12m、南北10m以上の規模を持つ礎敷遺構、桃山時代の路地跡や蔵の地業が検出されている³⁾。平成20年の発掘調査(調査3)では、4面の遺構面が認められ、平安時代の井戸跡、鎌倉時代後期の南北5.8m、東西3.0m、深さ1.4mの地下室、9基の裏掘付穴が3行3列に並ぶ遺構等、約900基の遺構が検出されている⁴⁾。

今回の試掘調査は、同町跡で未検出の条坊関連遺構の解明を主たる目的として、平成27年6月10日、11日に実施した。調査は、計画建物内に南北方向の調査区を3箇所設定して行った。調査面積は約93㎡である。

2. 層序

調査区の基本層序(図5)は、標高約38.2~38.3mでオリーブ褐色砂泥の中世整地層(1区7層, 3区6層:第1面)、37.9mでオリーブ褐色砂泥の平安時代後期の整地層(1区12層, 3区9層:第2面)、37.4~37.8mでオリーブ褐色系の地山となる。ただし、調査地北西部に設定した2区においては、元々の地盤が高いうえに近世以降の削平が著しく、標高約38.0m付近で地山を検出するとともに、地山直上は近世整地層となっていた。

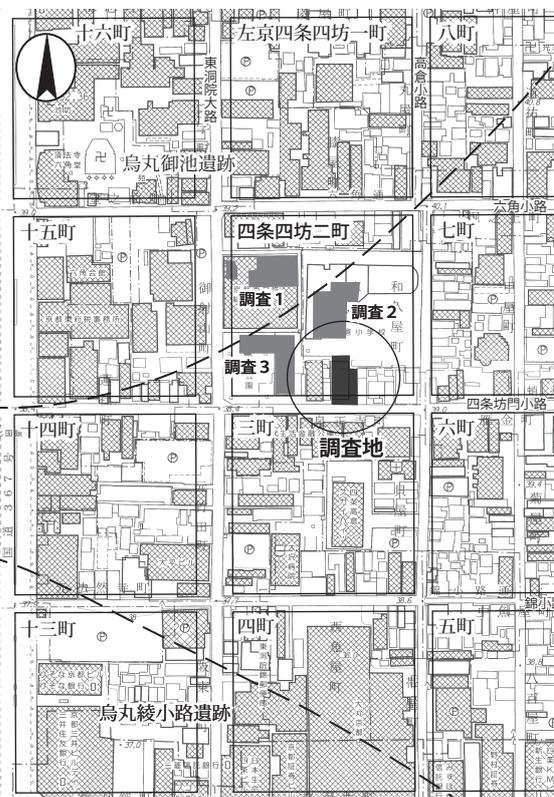


図3 調査位置図(1:5,000)

3. 遺構

調査では、四条坊門小路北側溝の可能性のある東西溝2条の他、50基以上の遺構を検出した。

溝1 (図5・6) 1区及び3区第1面で検出した東西方向の溝で、幅1.5m以上、深さ0.4~0.6mを測る。溝心はX=-110,224.2m付近を通る。埋没時期は、京都V期中段階(12世紀中頃)と考えられ、四条坊門小路北側溝の可能性はある。

溝3 (図5・6) 1区第1面で検出した溝1に並行する東西方向の溝で、幅0.4~0.5m、深さ0.3mである。出土遺物はなく時期は未確定であるが、下層の溝19とほぼ同位置にある。

土坑4・5・7 (図5・6) 1区第1面の西壁際で検出した土坑群である。土坑4は径0.35mの円形を呈し、埋土から瓦小片、釘、高杯脚部が出土している。土坑5は南北長0.65mの楕円形の土坑で、土坑4を切って成立している。埋土中に拳大の礫が多く入る他、土師器皿等が出土した。京都VII期古段階と考えられる。土坑7は南北長0.75mの楕円形の土坑であり、土坑4と土坑5に切られている。

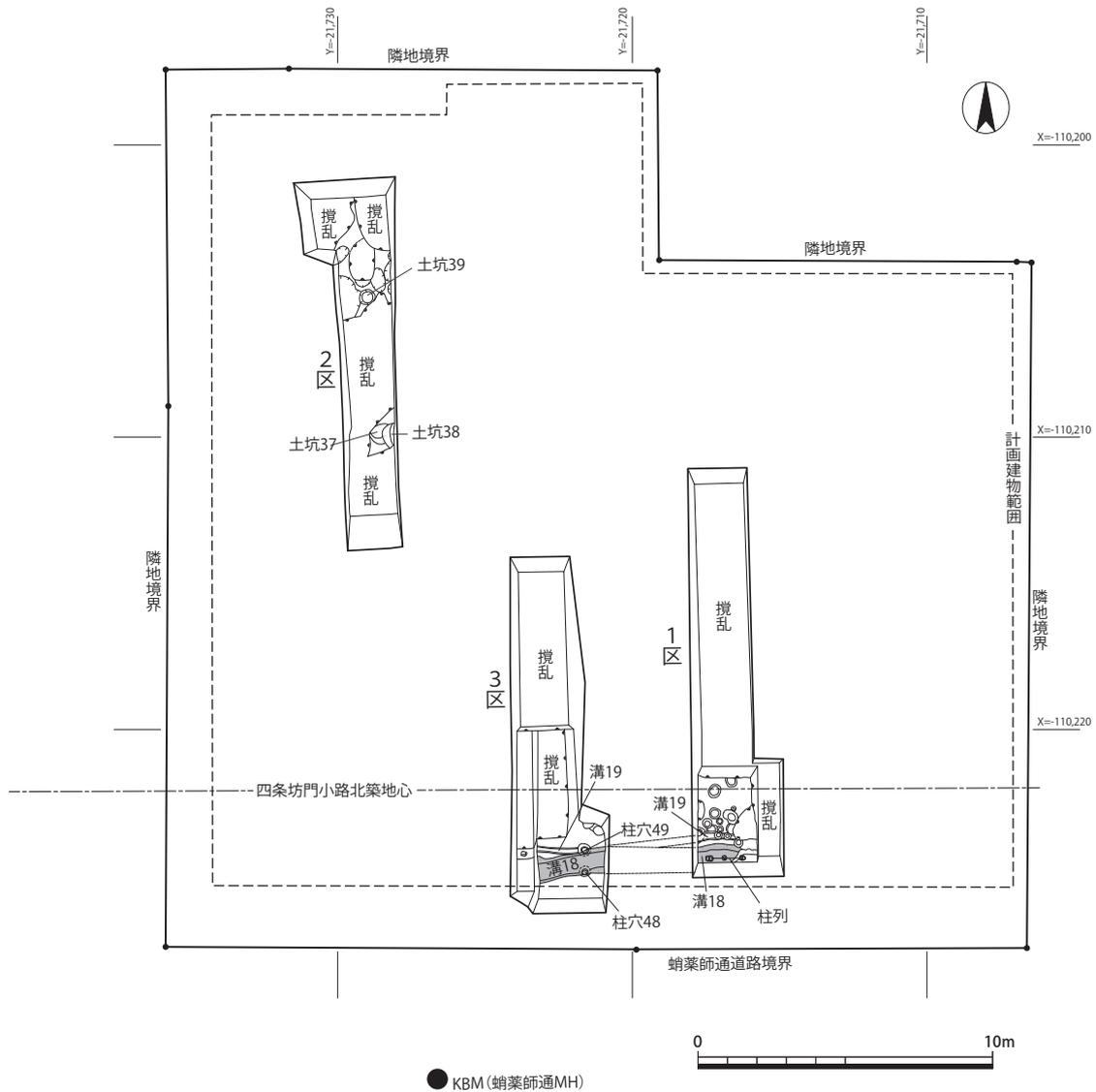
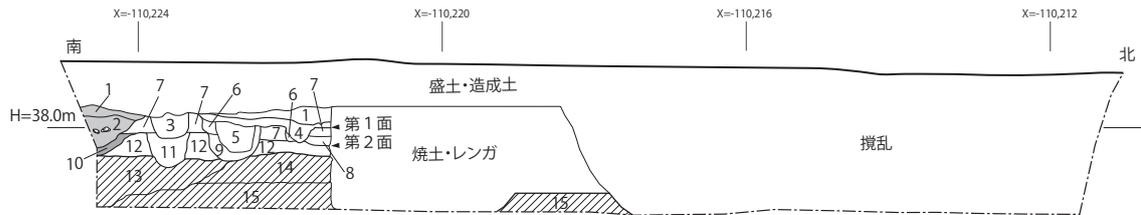


図4 調査区位置図 (1:250)

溝13(図5・6) 1区第1面で検出した幅約0.3mの東西方向の溝で、溝15を切って成立している。溝心は四条坊門小路推定北築地心に近接し、X=-110,221.9m付近を通る。

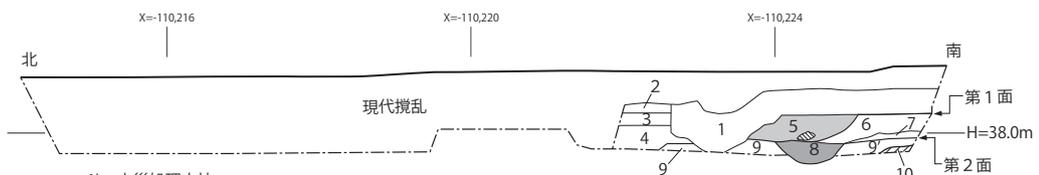
溝14(図6) 1区第1面で検出した南北方向の溝で、幅約0.6m、深さ約0.3mを測る。埋土に多量の礫を含む。溝心はY=-21,716m付近を通る。同町跡の四行八門制での三行と四行の境はY=-21,710m付近であり、約6m離れている。溝埋土からは白磁皿、土師器片等が出土しており、京都VII期頃(13世紀後半～14世紀前半)と考えられる。

1区西壁土層断面図



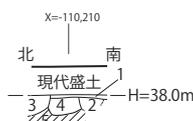
- 1) 2.5Y3/2 黒褐色泥砂(炭化物, 土器片, 径1cm未満の礫少量入る, 締まり悪い) 【溝1埋土】
- 2) 2.5Y3/2 黒褐色泥砂(2.5Y5/6 黄褐色粘土がブロック状に少量入る, 炭化物, 土器の細片, 径1cm未満の礫少量入る)
- 3) 2.5Y3/2 黒褐色泥砂(拳大の礫多量入る, 炭化物・土器の細片微量入る)【溝3埋土】
- 4) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂(2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂ブロック微量入る, やや軟質)【溝13埋土】
- 5) 2.5Y3/2 黒褐色泥砂(拳大の礫多く入る, 炭化物・土器の細片微量入る)【土坑5埋土】
- 6) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥(2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂ブロックに入る, 炭化物・土器片少量入る)【土坑4埋土】
- 7) 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥(炭化物・土器の細片少量入る, しまりやや悪い)【中世前期整地層】
- 8) 5Y4/2 灰オリーブ色泥砂(5Y4/2 暗オリーブ色微砂～シルトが筋状に入る, 拳大の礫, 炭化物, 土器片少量入る)【溝15埋土】
- 9) 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥(2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトがブロック状に入る, 炭化物・土器の細片少量入る)【土坑7埋土】
- 10) 2.5Y3/2 黒褐色泥砂(5Y4/4 暗オリーブ色細砂～シルトがブロック状に入る, 径1cm未満の礫, 炭化物, 土器片入る)【溝18下層】
- 11) 2.5Y3/2 黒褐色泥砂(10YR4/3 にぶい黄褐色粘土がブロック状に入る, 径3cm未満の礫, 炭化物・土器片少量入る)【土坑51埋土】
- 12) 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥(径3cm未満の礫, 炭化物, 土器片少量入る)【平安後期整地層】
- 13) 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂～シルト(径1cm未満の礫多量入る) 【地山】
- 14) 5Y4/2 灰オリーブ色粗砂～シルト(径2cm未満の礫多量入る, しまり悪い)
- 15) 5Y5/2-5/3 灰オリーブ色粘土～シルト(上位にマンガン粒, 炭化物少量入る, 固く締まる)

3区東壁土層断面図



- 1) 火災処理土坑
- 2) 2.5Y3/2 黒褐色礫混じり砂泥(土器小片, 炭化物少量入る)
- 3) 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂(径2cm未満の礫少量入る, 締まり悪い)
- 4) 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂(地山ブロック10%程度入る, 径4cm未満の礫少量入る)【中世前期整地層】
- 5) 2.5Y4/1 黄灰色泥砂ブロック(2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり泥砂ブロック混じる)【溝1埋土】
- 6) 2.5Y3/2 黒褐色礫混じり粗砂～シルト(拳大の礫が多く入る, 締まり悪い)【中世整地層】
- 7) 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥(2.5Y3/3暗オリーブ褐色微砂のブロック含む)【四条坊門小路路面?】
- 8) 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂(径2cm未満の礫少量入る, 締まり悪い)【溝18埋土】
- 9) 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥(2.5Y5/6黄褐色微砂のブロック少量含む, 硬く締まる)【平安後期整地層】
- 9) 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥に礫を多く含む(硬く締まる)【四条坊門小路路面?】
- 10) 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂～シルト【地山】

2区土坑38付近東壁土層断面図



- 1) 10YR6/6 明黄褐色砂泥【近世後期整地土】
- 2) 10YR5/1 褐灰色泥砂【近世攪乱土坑埋土】
- 3) 5Y4/1 灰色泥砂【攪乱埋土】
- 4) 10YR4/1 褐灰色泥砂【土坑38埋土】
- 5) 2.5Y8/4 淡黄色砂泥【地山】



図5 調査区断面図(1:100)

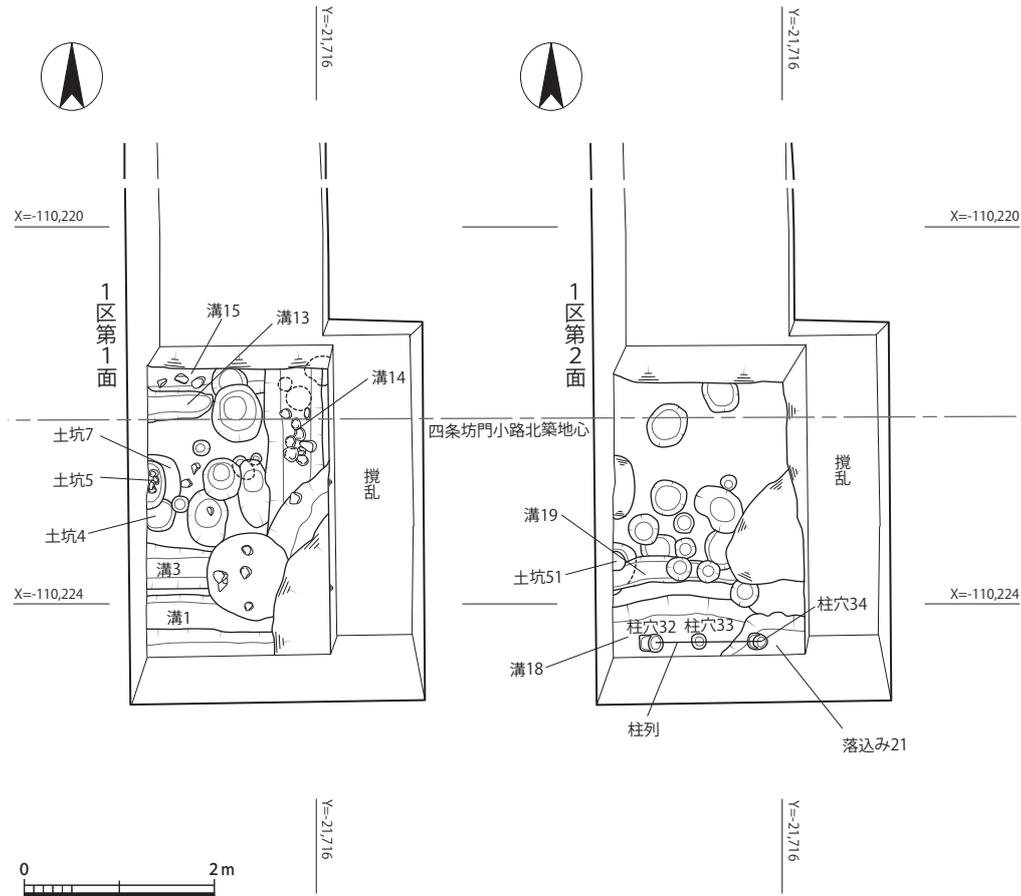


図6 1区主要部分平面図 (1:80)

溝15 (図5・6) 1区第1面で検出した東西方向の溝で、溝13に南側を切られている。出土遺物は須恵器鉢、土師器皿を主体とし、埋没時期は12世紀中頃の京都V期中段階と考える。

溝18 (図4～8) 1区及び3区の第2面で検出した東西方向の溝で、溝心はX=-110,224.6m付近である。幅約1.1m、深さ0.3mを測り、断面は皿形である。京都IV期中段階に埋没したと考える。1区の溝底中央部に、柱当りの径が0.18m前後の柱穴3基 (P32～34) が東西1列に並んでいる。3区では掘方の径0.4m、柱当りの径0.25mの柱穴2基 (柱穴48・49) を溝の南北両端で検出した。橋脚の可能性はある。

溝19 (図4～8) 溝18の北側に並行する東西方向の溝で、幅0.2m、深さは最大で0.1mである。京都IV期中段階の遺物を含む。

落込み21 (図6・7) 溝18を切って成立する遺構で、東西0.85m以上、南北0.4m以上の規模を有する。東側は攪乱により削平され、南側は調査区外に延びる。京都IV期古～中段階の遺物が出土しており、溝18と埋没時期が重なることから、同溝の部分的な掘り直しの可能性がある。

土坑37 (図4) 2区地山面で検出した径0.7m以上、深さ0.5mの円形土坑であり、埋土に大量の土師器片を含む。東側を土坑38によって切られている。京都V期中段階と考える。

土坑38 (図4・5) 2区地山面で検出した南北0.7m以上、深さ0.45mの土坑で、南北両側とも攪乱土坑により削平されている。京都VII期中段階の遺構と考える。

4. 遺物

1区・3区の第1面で成立する遺構から出土する遺物は、京都V期とVII期を中心にIX期頃までである。第2面では京都II期中段階の遺物を含む遺構が複数あるが、大半はIV期に属している。

溝1出土遺物(図9) 1は土師器皿Aで口径9.7cm, 器高1.3cmである。2は同皿Nで口径14.2cm, 器高2.6cmである。3は白磁椀底部, 4は須恵器椀, 5は陶器壺である。6は円丘状の突起の中心部に, 径0.6~0.9cm, 深さ3.0cmの穿孔がある土師質土器である。7は瓦質羽釜であり, 鏝が口縁端部に近い位置にある。古相のものも含むが, 2段ナデで口縁端部の立ち上がる京都V期中段階(12世紀中頃)のものが主体である。

土坑37出土遺物(図9) 9~20は土師器皿Nの小型品で, 口径9.2~10.2cm, 器高1.4~2.0cmに収まる。口縁部は2段ナデで, 端部は内傾し三角形状に収まる。21~23は土師器皿Nの大型品で口径13.7~15.2cm, 器高2.1~2.5cmであり, 口縁部の形状は小型のものと同じである。24は土師器甕であり, 口径21cmを測る。京都V期中段階の一括資料である。

土坑38出土遺物(図9) 土師器皿を主体とする遺物群で, 25は土師器皿Acで口径10.0cm, 器高1.2cmであり, 土坑37からの混入品と考えられる。26は白色系土師器皿Shで口径7.0cm, 器高1.7cm, 30は白色系土師器皿Sである。27~29は橙色系土師器皿Nで, 27は口径8.4cm, 器高1.5cm, 28・29は口径が10.5~11.0cm, 器高1.7~1.9cmである。京都VII期中段階である。

その他遺物(図9) 8は溝14出土の白磁椀で内面底部に櫛描文があり, 31は蓮華文軒丸瓦の瓦当部分である。平安時代後期のものであろうか。

5. まとめ

当該地は, 既存建物の基礎等による攪乱と江戸時代後期の火災処理土坑により, 遺構面の大半が失われていた。比較的保存状態が良いのは蛸薬師通に面した部分であり, 調査成果もこの部分に集中している。四条坊門小路推定築地心から溝1心までの距離は2.2m, 溝18心までの距離は約2.6mである。『延喜式』京程から復元される推定距離約2.1m⁵⁾と0.1~0.5mの誤差があるが, 四条坊



図7 1区第2面完掘状況(東から)



図8 2区溝18完掘状況(西から)

門小路北側溝と考える。下層の溝18は11世紀中頃、上層の溝1は12世紀中頃に埋没しており、溝18南側には路面も確認できた。特に溝18には橋脚状の柱穴や、溝中央部の柱列など興味深い遺構も伴っている。また、平安京左京四条四坊二町跡では初めての条坊関連遺構であり、同町の復元に有効な資料が得られたと考える。 (馬瀬 智光)

註

- 1) 財団法人古代学協会・古代学研究所(編)『平安京提要』(角川書店 1994)の254頁。
- 2) 山本雅和「平安京左京四条四坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994)。
- 3) 山本雅和・鈴木廣司「平安京左京四条四坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996)。
- 4) 東 洋一・山本雅和其他『平安京左京四条四坊二町跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2008 - 12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年)。
- 5) 註1文献の103～105頁。

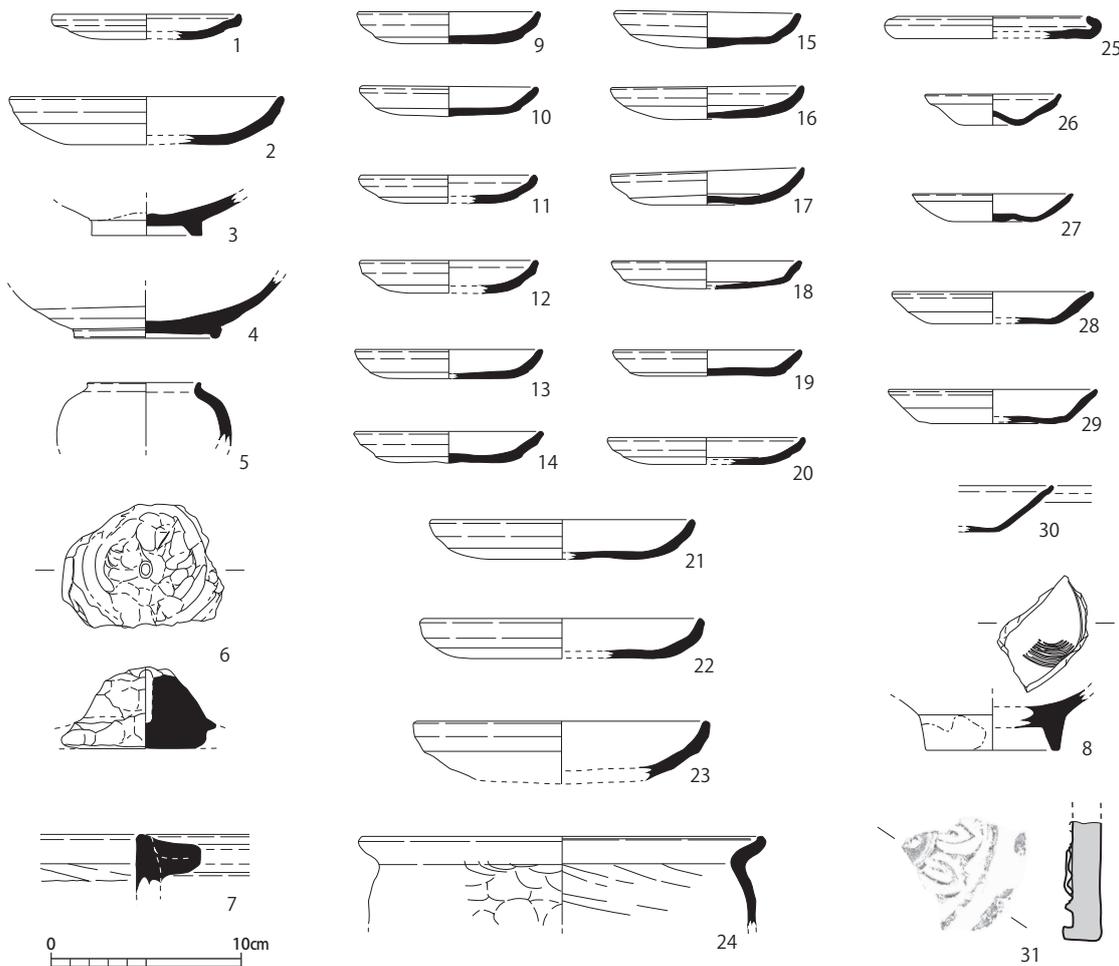


図9 出土遺物実測図(1:4)

Ⅲ-1 平安京右京三条二坊六町跡・西ノ京遺跡 No.55

1 調査経過 (図10・11)

本調査は、体育館建設に伴う試掘調査及び詳細分布調査である。調査地は、中京区西ノ京南原町に位置し、平安京右京三条二坊六町の中央南半部に相当する。四行八門制では西二行・三行、北五・六・七・八門の範囲にあたる。文献上、特に土地利用の記載は残っておらず、その変遷は不明である。周辺では、東へ100m程度隔てた地点において試掘調査が行われており、GL-1.5mの深度で平安時代の遺構面が確認されている。また北西へ100m程度隔てた地点において行われた調査では、西堀川小路の路面のほか、古墳時代の包含層が確認されている。ただし、明確な遺構は検出されていない。

本調査では、平成27年6月2日に試掘調査(15H024)を行い、その後、11月20日から12月1日まで詳細分布調査(15H247)を随時行った。試掘調査では敷地中央に東西方向に4箇所の調査区を設定し、掘削を行った結果、すべての調査区において平安時代の包含層を確認した。ただし、攪乱による遺構面の損傷が著しいため、発掘調査は不要と判断された。その後、建設計画の変更に伴い改めて詳細分布調査を行った。その結果、敷地内の一部において平安時代前期に遡る遺構を検出した。

2 層序と遺構

旧地形(地山上面)は西に高く、東へ向かって緩やかに下がる。地山の直上には礫混じり粘土質シルトを主体とする平安時代前期の包含層が、約0.3mの層厚をもって堆積する。その上に砂礫を主体とする中近世包含層が存在するが、攪乱によって失われた部分が多い。

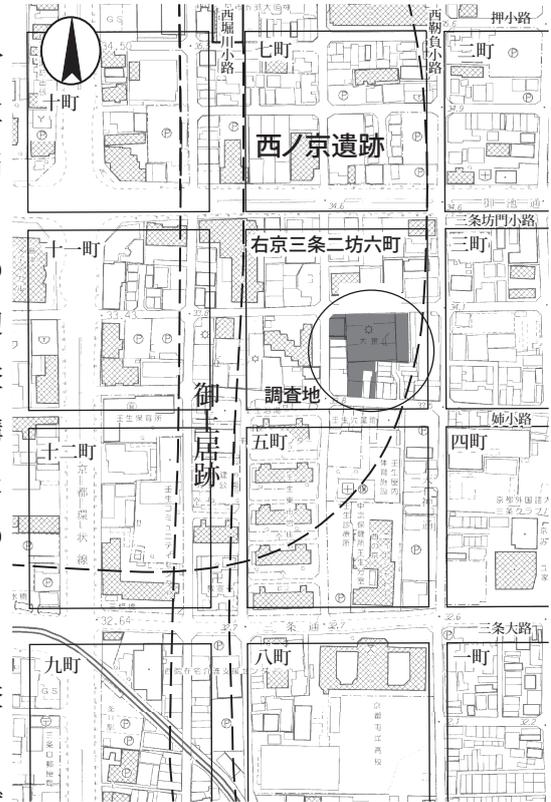
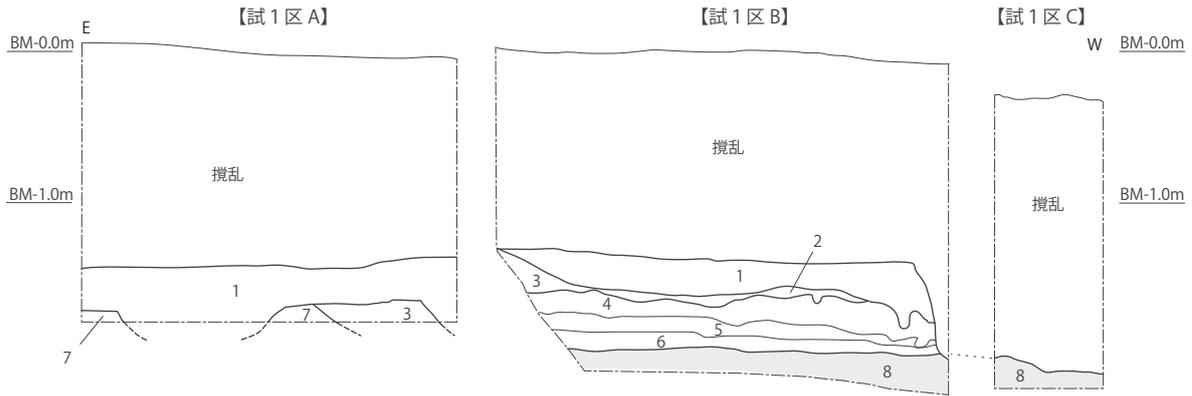


図10 調査位置図 (1 : 5,000)



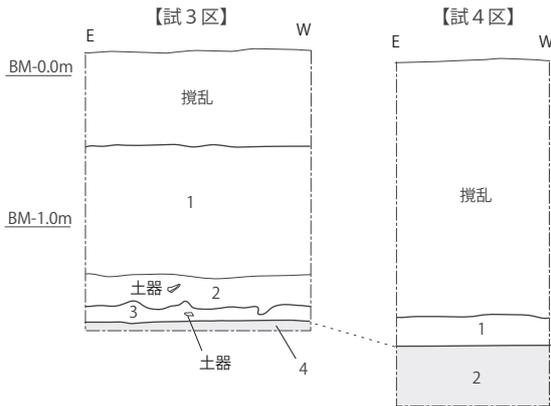
図11 調査区配置図 (1 : 1,000)



【試1区】

- 1) 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 礫混じりシルト 径2cm未満の礫多量含む レンガ・染付片入る しまり悪い (近現代整地土)
- 2) 7.5Y5/3 オリーブ黒色 微砂混じり粘土質シルトに
7.5Y5/3 オリーブ黒色 粗砂混じり粘土質シルトブロック40%程度入る 炭化物・マンガン粒入る
- 3) 5Y4/2 灰オリーブ色 微砂混じり粘土質シルト 径0.5cm未満の礫少量入る 鉄班沈着 マンガン粒入る 土師器片・炭化物多量入る やや軟質 (中世包含層?)
- 4) 10Y2/1 黒色微砂混じり粘土質シルト 径0.5cm未満の礫微量入る 炭化物微量入る 軟質 攪拌痕跡あり

- 5) 5Y3/1 オリーブ黒色 微砂混じり粘土質シルトに
5Y2/1 黒色 粘土質シルトブロック20%程度入る
5Y4/1 灰色 微砂混じりシルトブロック10%程度入る 軟質 上層に比べて攪拌は進んでいない
- 6) 5Y3/1 オリーブ黒色微砂混じりシルトに
5Y2/1 黒色粘土質シルトブロック10%程度入る やや軟質
- 7) 5Y3/2 オリーブ黒色 細砂混じり粘土質シルト 径0.5cm未満の礫少量含む 鉄班沈着 マンガン粒入る 炭化物・土師器片多量入る やや軟質
- 8) 5Y4/1 灰色 礫混じりシルト 径3cm未満の礫多量入る しまり悪い (地山)



【試3区】

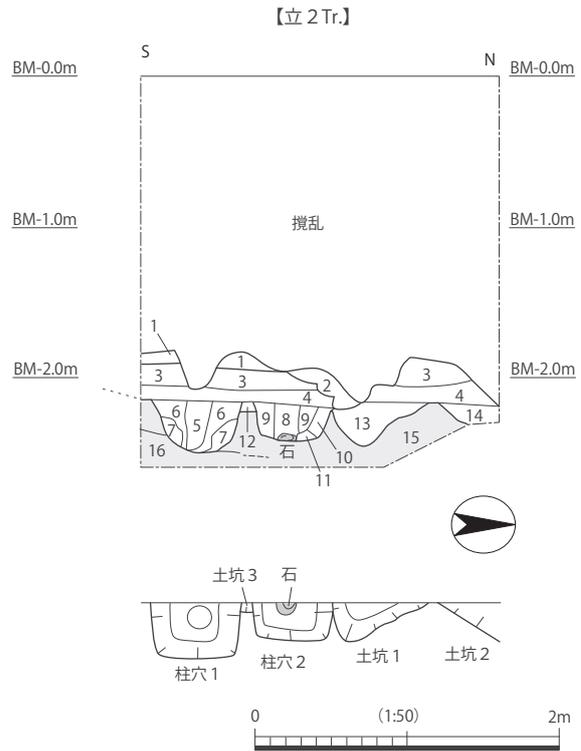
- 1) 10Yr4/2 灰黄褐色粘土質シルトブロックと
10YR4/2-4/6 灰黄褐色～褐色礫混じりシルトの混合層 (中近世流路)
- 2) 10YR3/1 黒褐色微砂混じり粘土質シルトに
10YR2/1 黒色微砂混じり粘土質シルトブロック10%程度入る 径3cm未満の礫微量入る カルシウム塊・炭化物・土器片入る 軟質下位に微砂の流入あり
- 3) 10YR2/1 黒色微砂混じり粘土質シルト 径0.5cm未満の礫微量入る 炭化物入る 軟質 土器片微量入る
- 4) 10YR5/1 褐灰色礫混じりシルト 径2.0cm未満の礫多量入る しまり悪い (地山)

【試4区】

- 1) N3/0 暗灰色粘土
- 2) 10BG6/1 青灰色粘土 (地山)

【立2Tr.】

- 1) 7.5YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘土質シルト ややしり良い
- 2) 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト 径2.0cm未満の礫少量含む 土器片入る しまり悪い (古代包含層)
- 3) 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土質シルト 炭化物・土器片少量入る
- 4) 10YR3/1 黒褐色礫混じり粘土質シルト 炭化物・土器片多量入る
- 5) 2.5Y3/1 黒褐色粗砂混じり粘土に 2.5Y6/1 黄灰色 微砂混じり粘土ブロック30%程度入る 炭化物・土器片入る (柱穴1柱当)
- 6) 10YR4/1 褐灰色砂混じりシルト 炭化物・土器片入る (柱穴1掘方)
- 7) 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト (柱穴1掘方)



- 8) 2.5Y3/2 黒褐色粘土ブロックと 2.5Y6/1 黄灰色粘土ブロックの混合層 (柱穴2柱当)
- 9) 10YR4/1 褐灰色細砂混じりシルトに
10YR5/1 褐灰色粘土ブロック20%程度入る (柱穴2掘方)
- 10) 2.5YR5/1 黄灰色粘土質シルト (柱穴2掘方)
- 11) 2.5Y6/1 黄灰色微砂混じり粘土 (柱穴2掘方)
- 12) 10YR3/3 暗褐色シルト 土器片入る (土坑5)
- 13) 10YR4/1 褐灰色細砂混じりシルトに
10YR5/1 褐灰色粘土ブロック20%程度入る 土器片入る (土坑3)
- 14) 10YR4/1 褐灰色細砂混じりシルトに
10YR5/1 褐灰色粘土ブロック20%程度入る 土器片入る (土坑4)
- 15) 10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト (整地土)
- 16) 2.5Y6/1 黄灰色砂礫 (地山)

図12 遺構断面図・平面図 (1:50)

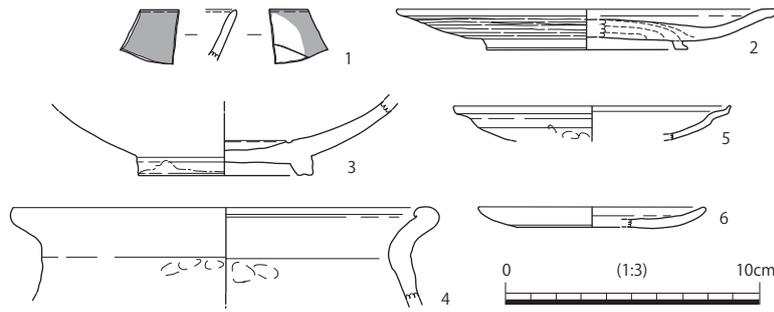


図13 遺物実測図（1:3）

平安時代前期の遺構は、調査地東辺部に設定した調査区（立2 Tr）において検出した。柱穴が2基、土坑が3基あり、一部に切りあいが認められる。柱穴1は、一辺が0.6 mを測る方形を呈する。断面形状は楕形で最大深度は0.35 m、中央には径0.16 m前後を測る柱当が残存する。柱穴2も同じく方形を呈する遺構で、一辺は0.5 mを測る。断面形状は隅丸方形に近く、最大深度は0.25 mである。残存する柱当は径0.15 m程度、その下には根石と思われる円礫が配されていた。

3 遺物

遺物は、遺構埋土及び遺構面を覆う包含層より出土した（図13）。1は須恵器杯身の口縁部である。小片であるが、内外面ともに墨痕が認められる。転用硯として使用されたものか。立2 Trの土坑3より出土した。2は白色土器の皿である。高台は脆弱で、一部外方へ開く。器壁外面はミガキ、内面はナデを施す。内面の一部には煤の付着が認められる。断面には粘土の単位が縞状に残る。試3区の包含層より出土した。3は、灰釉陶器碗の底部である。内外面ともに施釉、高台は一部露胎する。底部内面には線刻を施す。4は土師器甕の口縁部である。短く外反する口縁部と内方へ小さく折り曲げた口縁端部をもつ。外面には煤が付着する。3・4は立2 Trの包含層より出土した。5・6は土師器皿である。5はて字状口縁をもつ。立Tr2の土坑2より出土した。

4 まとめ

今回の調査では、平安時代前期に遡る遺構群を検出した。これまでこの町域では試掘調査や発掘調査が行われておらず、平安時代の様相は不明であったが、今回の調査により、少なくとも9～10世紀には方形の柱穴を備える建物が複数存在していたことが明らかとなった。また柱穴の近接により建て替えがあったと考えられることから、居住地として一定期間存続したことが推測される。さらに転用硯とみられる遺物の出土は、居住者が識字層であった可能性を示している。

（黒須 亜希子）

Ⅲ-2 平安京右京六条三坊二町跡・西院遺跡 No.8

1. はじめに

本件は、右京区西院寿町地内における宗教施設建設計画に伴う試掘調査である。調査地は、弥生～古墳時代の集落跡である西院遺跡および平安京右京六条三坊二町跡に該当し、敷地の南に六条坊門小路が通ると推定される場所である。四行八門制では、東二～四行、北四～八門にあたる。文献上の記載は確認できない。

近隣では、調査地東隣の試掘調査で、平安時代前期の東西溝が確認されており、六条坊門小路北側溝が確認されている（図14 - 調査1）¹⁾。また、敷地の東端で試掘調査が行われており、東西方向の溝状遺構や柱穴、ピットなどを検出している（図16 - 調査2）²⁾。したがって、今回の調査では六条坊門小路関連遺構を探ることを目的とした。

調査は平成27年3月9日に実施し、面積は15㎡である。調査の結果、中近世の遺物包含層

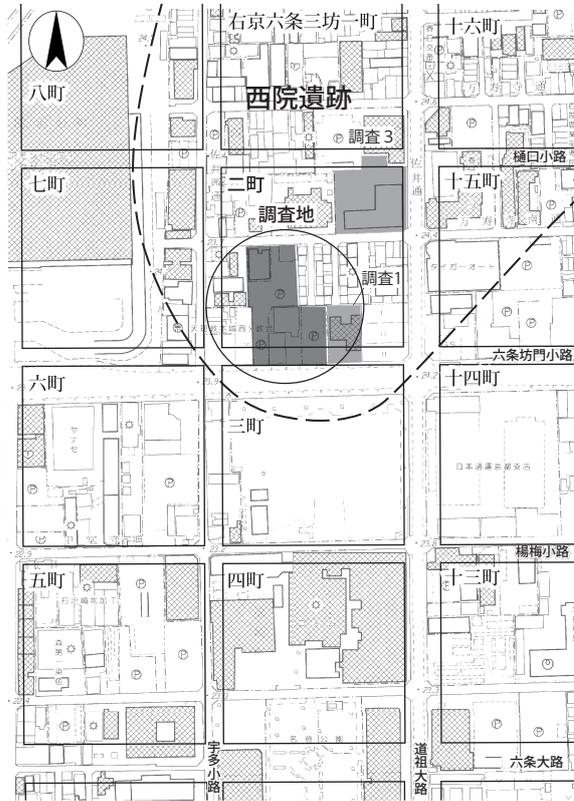


図14 調査位置図（1：5,000）

とピットを確認するに留まったが、補足調査として着工時の詳細分布調査を実施した。その結果、町を東西に二分する位置で、並行する南北溝2条を確認したため、合わせて詳細分布調査の成果を報告する。

2. 層序と遺構

試掘調査時には、敷地南半中央部に既存建物が残されており、調査区は建物と配管を避けた部分に限定せざるを得なかった。基本層序は、1区で、地表下-0.82mまで現代盛土、-1.02mまで灰黄褐色泥砂の耕土、-1.23mまで床土、-1.47mまで黄褐色～明黄褐色砂泥層、以下、にぶい黄色砂礫の地山となる（図15）。敷地西側の1区で確認した砂礫層は、河川化した道祖大路による氾濫の影響を受けている可能性がある。

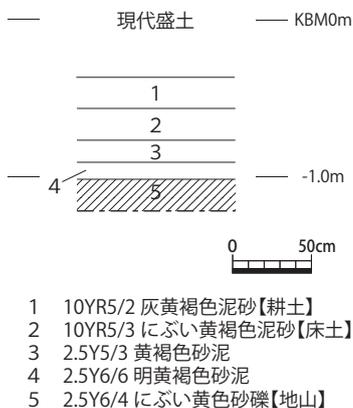


図15 試掘調査1区 基本層序（1：50）

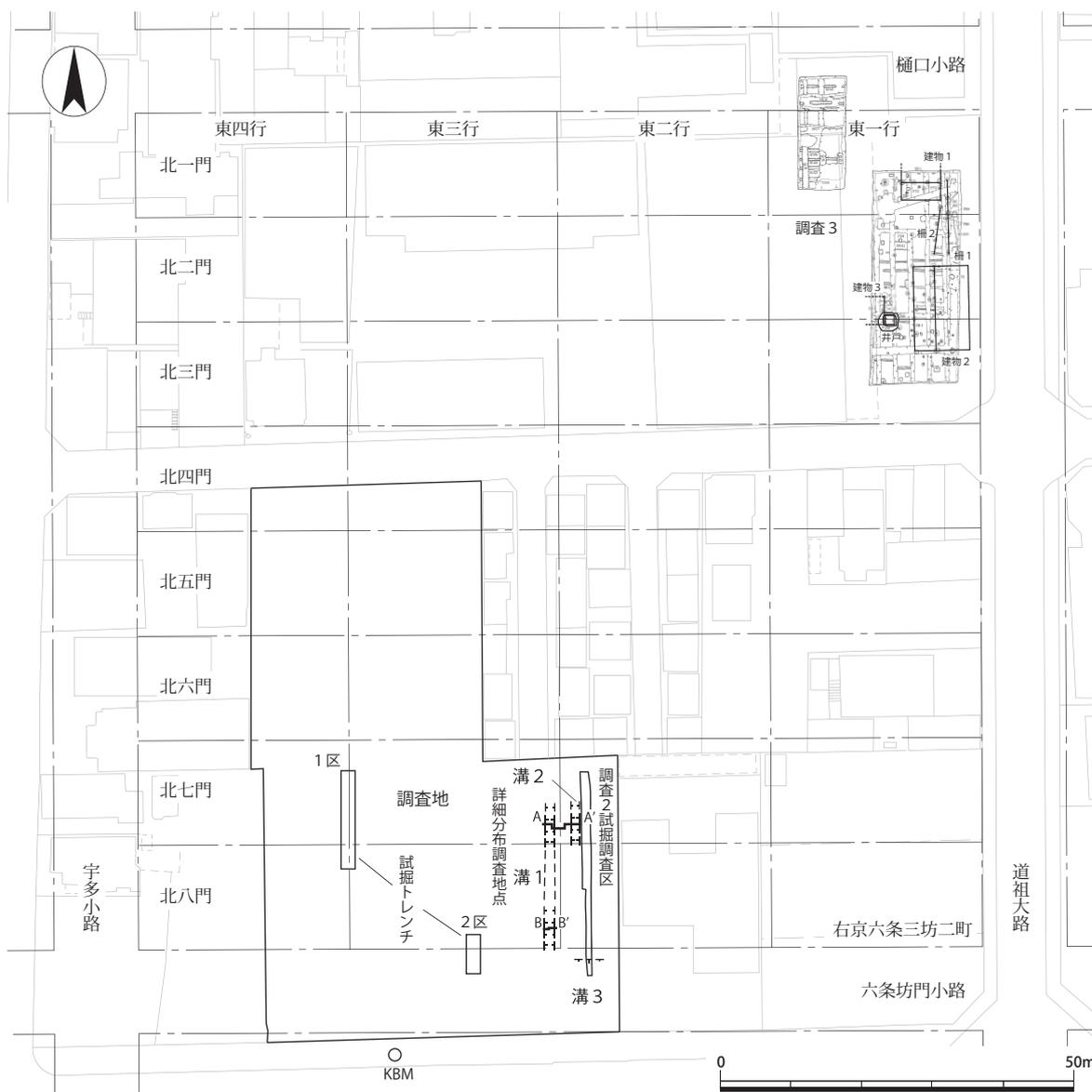


図16 調査区配置図 (1:1,000)

一方、詳細分布調査での基本層序は、地表下-0.4～0.5mまで現代盛土、-0.6mまで耕土、-0.65～0.8mまで灰黄褐色シルトの包含層、以下、暗褐色～褐色シルトの地山となる(図17)。

検出した遺構は、地山直上で成立する南北方向の溝2条(図18)である。東側の溝(溝1)は幅1.3m、深さ0.36m、西側の溝(溝2)は幅1.26m・深さ0.4mであった。溝2は北側と南側の2箇所を確認している。遺物は、いずれも溝埋土から土師器及び須恵器甕の細片を少量確認したのみで、詳細な時期は判別できない。溝の検出位置は、四行八門制の区画を当てはめると、東二行と三行を二分する位置にあたる。

なお、試掘調査及び詳細分布調査の両方で、六条坊門小路北側溝の検出を試みたが、明確に北側溝に関連する遺構は検出できなかった。また、調査1で確認されている溝3は、六条坊門小路北側溝の推定位置にあたるが、流路を示すような有機物層やシルト層が認められず、遺物も少量であり、北側溝であるかは不明である。

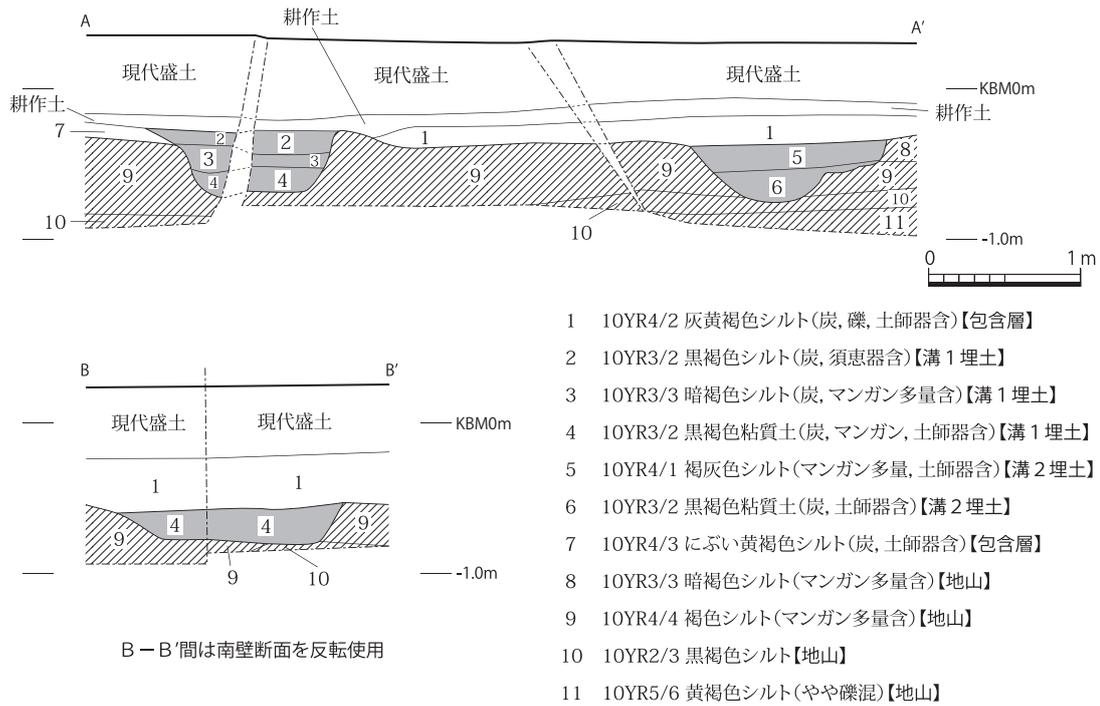


図17 詳細分布調査断面図 (1:50)

3. まとめ

今回の調査では、右京六条三坊二町の東二・三行境で、並行する南北溝2条を確認した。溝の心々間は約3.5mで、『延喜式』「左右京職 町内小径」³⁾記載の「小径(小径)」の側溝と考えられる。西隣の七町では、町を東西に二分する113mの小径と側溝が確認されており⁴⁾、二町でも同様の小径が施工されていたと考えることができる。また、二町内で実施された発掘調査(図16-調査3)では、一行一門から三門の占地在想定できる平安時代前期の建物などが確認されており⁵⁾、比較的規模の大きな宅地班給がなされたと考えられる。



図18 詳細分布調査 A-A'間断面(南から)

(熊谷 舞子)

註

- 1) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度, 京都市文化観光局, 1987年。
- 2) 『京都市内遺跡試掘調査報告』平成11年度, 京都市文化市民局, 2000年。
- 3) 「凡町内開小径者。大路邊町二。廣一丈五尺。市人町三。廣一丈。自餘町一。廣一丈五尺」
- 4) 堀内明博『平安京跡研究調査報告 第20輯 平安京右京六条三坊』(財)古代学協会, 2004年。
- 5) 百瀬正恒『平安京右京六条三坊二町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-7』, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 2004年。

IV-1 嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡 No.68

1. はじめに

本件は、右京区嵯峨天龍寺今堀町11-5における宅地造成に伴う試掘調査で、飛鳥～平安時代にかけての集落跡である嵯峨北堀町遺跡及び中世の寺院跡である嵯峨遺跡に該当する。中世には天龍寺の広大な塔頭群の一画を為して活発な土地利用が行われていた。中世の嵯峨を描いた複数の絵画資料から調査地付近の変遷を見ると、14世紀中頃の「大井郷界畔絵図」では「(天龍)寺領」とされ、その近辺に「椎野小路」という小径が天龍寺から伸びる造路の延長線上に描かれている。15世紀前半の「応永鈞明絵図」では、「椎野寺」との記載が認められる。したがって、今回の調査では、上述した時期の遺構・遺物群の確認を主目的とした。

調査は平成27年4月1日に実施、面積は13㎡である。調査の結果、奈良時代の土坑、中世整地層、溝等を確認した。また、本件については工事施工時の詳細分布調査を実施し、遺構の広がりを確認したため、合わせて報告する。



図19 調査位置図(1:5,000)

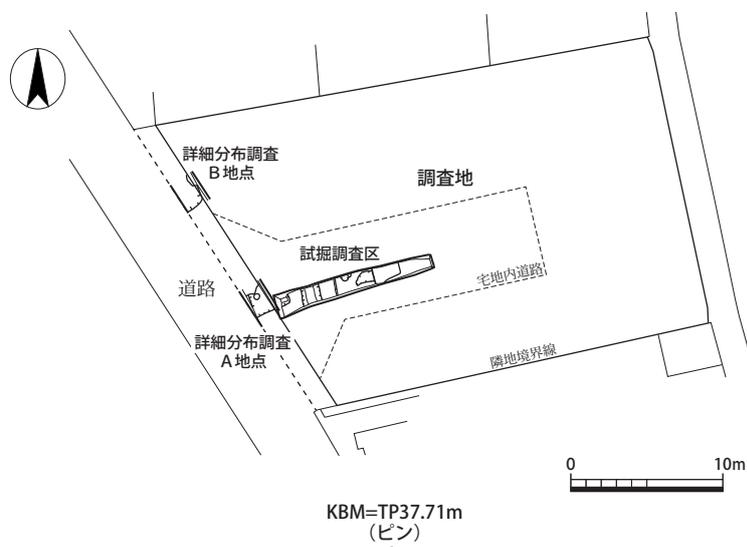
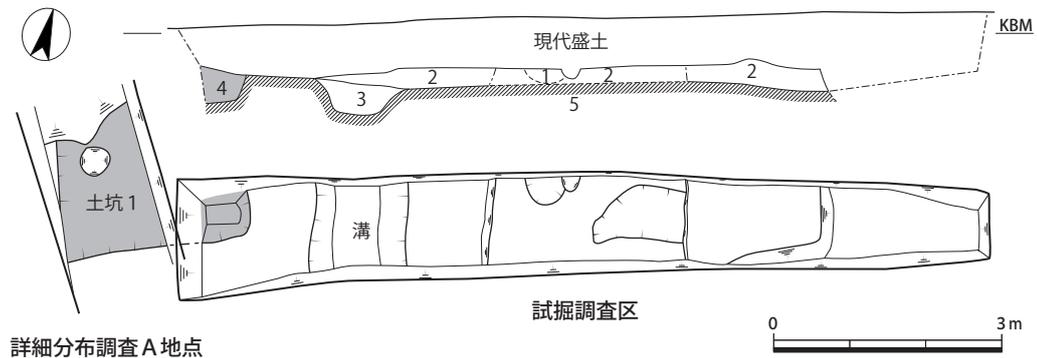


図20 調査区配置図(1:500)



詳細分布調査A地点

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂【ピット】
- 2 10YR4/4 褐色砂泥(炭化物少量含)~10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫(砂泥混)【中世整地層】
- 3 7.5YR4/3 褐色泥砂【溝】
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂【土坑1】
- 5 10YR6/6 明黄褐色シルト【地山】

図21 調査区実測図(1:100)

2. 遺構(図21)

調査区は宅地内道路部分に設定した。層序は現代盛土以下、GL-0.6mにて褐色砂泥~にぶい黄褐色砂泥の室町時代整地層、-0.9mにて明黄褐色シルトの地山となる。ただし、地山は東に向かって下がり、西端には整地層は存在せず、東西で0.2mの比高を持つ。また、調査区の東半以东は既存建物の解体による削平を受け、遺構面は残存しないことがわかった。

遺構は溝、土坑、ピットを確認したが、遺物は細片のみの出土で図示できるものは無い。

溝(図21) 試掘調査区西半で検出した南北溝で、地山上面で成立する。断面形状は逆台形で幅1.2m、深さ0.5mを測る。遺物の出土が認められなかったため明確な時期は不明であるが、断面形状等から中世に属する可能性が高い。

土坑1(図21) 試掘調査区及び詳細分布調査で東西幅が明らかとなった土坑である。東西2.5m。南北2.0m以上、深さ0.5mを測る。奈良時代の須恵器杯、杯蓋、土師器杯等が出土している。

土坑2(図22) 詳細分布調査B地点で南肩と

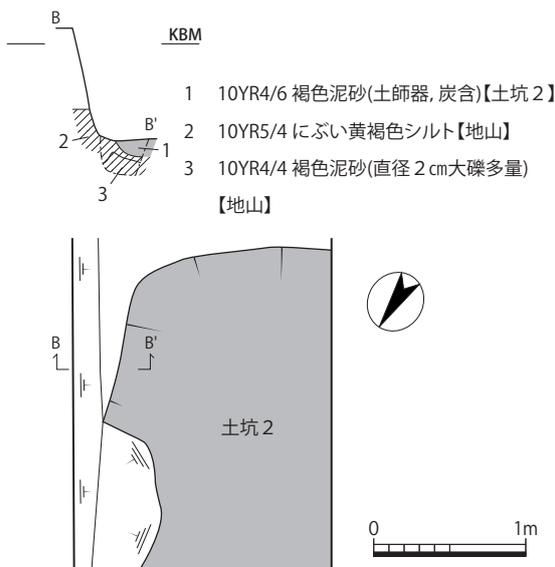


図22 土坑2実測図(1:50)



図23 溝断面(南から)

東肩を検出した土坑である。南北2.2m以上，東西1.5m以上，深さ0.1m以上を測る。遺物は出土せず，時期は不明である。

3. まとめ

調査の結果，既存建物により遺構面の大半は失われているものの部分的に奈良時代から室町時代の遺構を確認した。奈良時代の遺構は，調査地の南側に展開する飛鳥～平安時代の集落跡とされる嵯峨北堀町遺跡がさらに北側まで広がることを示す。また，嵯峨地域は天長五年（828）に成立し，10世紀中頃までに加筆された「山城国葛野郡班田図」が残されており，調査地周辺はこれまでの考証から「櫛原里」に比定されている¹⁾。櫛原里とされる図には北半に家の表記が複数認められ，集落が存在していたことがわかる。表記は嵯峨北堀町遺跡の範囲とほぼ一致するものであり，班田図に描かれた集落に比定できる。嵯峨一帯では平安時代を遡る集落跡は当該遺跡の他には嵯峨折戸町遺跡が認められる程度であり，班田図に描かれている里の実態を調査成果から裏付けた重要な成果といえよう。

（西森 正晃）

註

- 1) 宮本救「山城国葛野郡班田図について」『續日本紀研究』第6巻第3号，續日本紀研究会，1959
金田章裕『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂，1985

IV-2 白河街区跡・岡崎遺跡・東光寺跡 平成26年度No.88

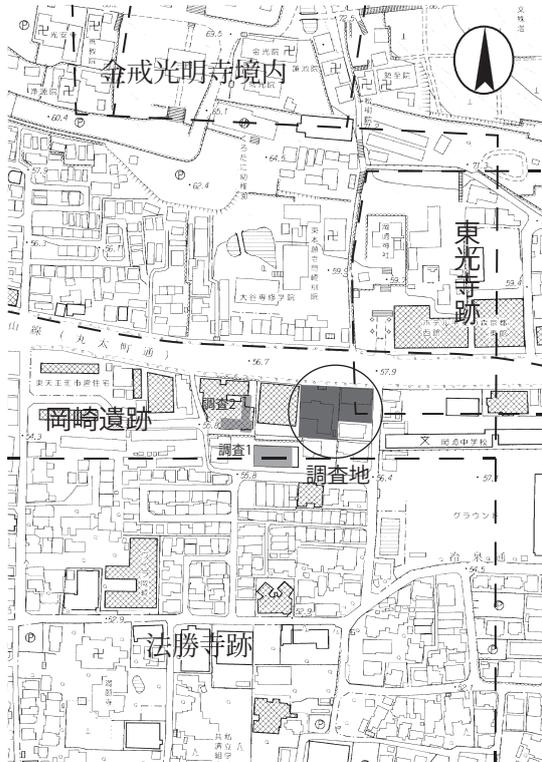


図24 調査位置図 (1 : 5,000)

1. はじめに

本件は貸店舗建設に伴う試掘調査で、白河街区跡・岡崎遺跡・東光寺跡に該当する。周辺の調査では、調査地の南西で平安時代後期の区画溝や鎌倉～室町時代の方形池が確認され、中世には寺院の存在が推定されている^{1)・2)}。今回も同様の遺構群が展開することが予想された。

調査の結果、弥生時代の土坑や平安時代後期の溝、鎌倉時代の土坑、石組溝など多数の遺構・遺物を確認した。協議の結果、基礎形状の変更を行い、遺構面は十分な保護層を設けて地中保存されることとなった。

調査は平成26年10月31日に実施、調査面積は72㎡である。なお、本来であれば昨年度に報告すべきであったが、協議が翌年まで繰り返したため、今年度に報告する。

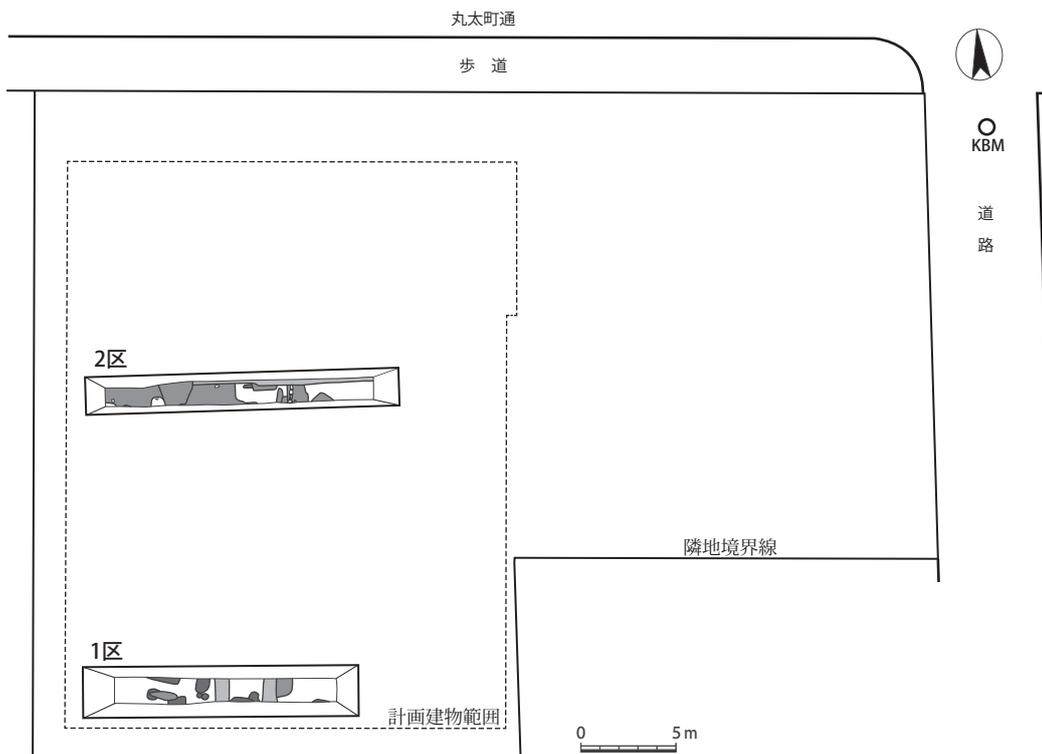
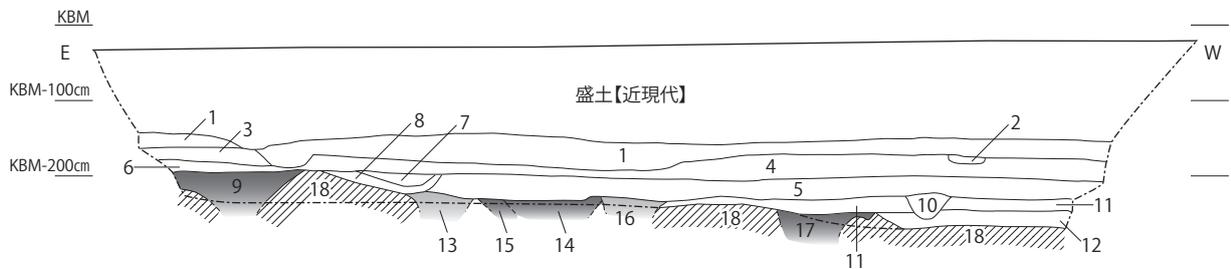
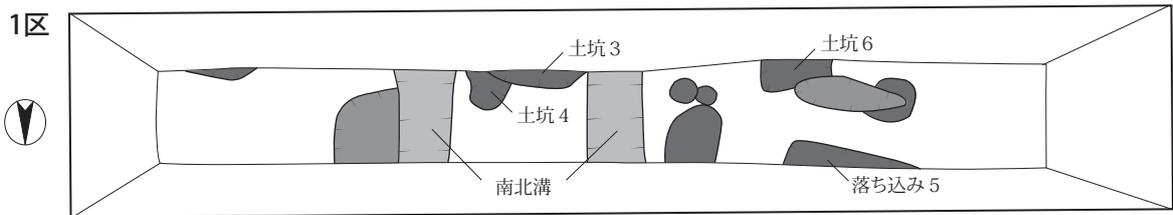


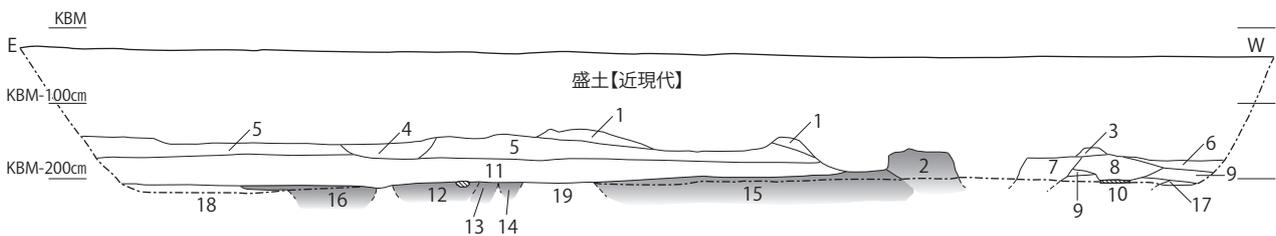
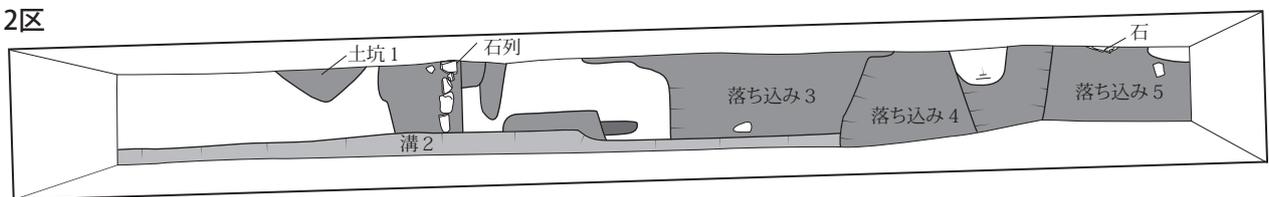
図25 調査区配置図 (1 : 400)



- | | |
|--|-------------------------------|
| 1 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂【近世耕作土】 | 11 10YR8/4 浅黄橙色粗砂～砂質土【中世整地層】 |
| 2 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂(礫多量に含む) | 12 2.5Y8/4 浅黄色粗砂礫混じり【落ち込み?】 |
| 3 10YR8/6 黄橙色粗砂 | 13 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫【南北溝】 |
| 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂
(黄褐色シルトブロック状に含む)【近世整地層】 | 14 2.5Y3/2 黒褐色砂泥【土坑3】 |
| 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂【中世整地層】 | 15 2.5Y6/2 灰黄色極細砂(固くしまる)【南北溝】 |
| 6 5YR4/4 にぶい黄褐色砂泥 | 16 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫 |
| 7 10YR3/1 黒褐色砂泥 | 17 10YR3/1 黒褐色砂泥【土坑6】 |
| 8 2.5Y7/4 浅黄色粗砂(灰色シルトブロック混じり) | 18 2.5Y8/2 灰白色粗砂【白河砂・地山】 |
| 9 2.5Y3/2 黒褐色泥砂(黒褐色砂泥ブロック混じり) | |
| 10 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂 | |



2区



- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 2.5Y7/4 浅黄色泥砂礫混じり | 11 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 |
| 2 2.5Y5/3 黄褐色粗砂【落ち込み4(中世整地層)】 | 12 10YR5/2 灰黄褐色泥砂【石列掘方か】 |
| 3 10YR4/4 褐色粗砂 | 13 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 |
| 4 10YR6/6 明黄褐色粗砂礫混じり | 14 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 |
| 5 10YR4/2 灰黄褐色泥砂【近世耕作土】 | 15 10YR4/2 灰黄褐色泥砂【落ち込み3】 |
| 6 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂礫混じり | 16 10YR3/1 黒褐色砂泥【土坑1】 |
| 7 10YR4/2 灰黄褐色泥砂(黄褐色シルトブロック混じり) | 17 10YR7/2 にぶい黄褐色粗砂 |
| 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂礫混じり | 18 2.5Y8/2 灰白色粗砂礫混じり【弥生時代包含層】 |
| 9 10YR3/3 暗褐色泥砂 | 19 2.5Y8/2 灰白色粗砂 |
| 10 10YR3/2 暗褐色泥砂
(炭化物少量, 土師器皿多量に含む)【落ち込み5】 | |



図26 調査区実測図(1:100)

2. 遺 構 (図26)

調査区の基本層序は両区ともにGL-1.1～1.3mまで近現代盛土，近世耕作土と続き，1区の高いところで-1.6mで灰白色粗砂の白河砂の地山，2区は-1.4mで中世遺構面，-1.8mで灰白色粗砂礫混じり層に達する。また，両区ともに地山は西に向かって下がり，1区西半の地山レベルは-2.5mを測る。段差は平安時代末期から鎌倉時代にかけて整地され平坦面が形成されている。1区では地山上面で，2区では整地層上面で検出を行い，1区が弥生～鎌倉時代，2区が平安時代末期から鎌倉時代の遺構を確認している。

1区(図27) 地山上面で検出を行い，弥生時代の土坑(土坑3・5・6)や南北溝を確認した。

南北溝 1区中央で検出した並行する2条の南北溝である。幅は0.25～0.3m，深さ0.1m以上ある。溝は地山が一段下がった場所に成立しており，段差上面の排水を受けるための溝，又は区画溝の可能性もある。2区では下層の掘削を行っていないため延長は未確認であるが，段差を埋めたと考えられる落ち込みの存在から溝が伸びる可能性は高い。埋土からは，平安時代末期の土師器皿が出土している。

2区 整地層上面で検出を行い，平安時代末期～鎌倉時代の落ち込みのほか，時期不明の石列，溝等を確認している。

落ち込み5 西端で検出した落ち込みであるが，落ち込み3とともに西に向かって下る段差を埋めた整地土の可能性が高い。西肩のみ確認し，南北1m以上，東西2m以上ある。埋土には，炭化物のほか平安時代末期～鎌倉時代の土師器皿が多量に含まれている。

石列(図28) 石列は東側に面を持ち，4石分確認した。北端は東西方向の溝2に切られている。石列は雨落溝や亀腹基壇の裾石，もしくは溝の護岸等の可能性が考えられる。遺物の出土はなく，時期は不明である。

溝2 北壁沿いに検出した東西溝である。幅0.3m以上あり，西端は落ち込み4に切られている。検出のみに留めたため，遺物の出土が無く時期は不明である。



図27 1区全景(東から)



図28 2区石列と溝2(北から)

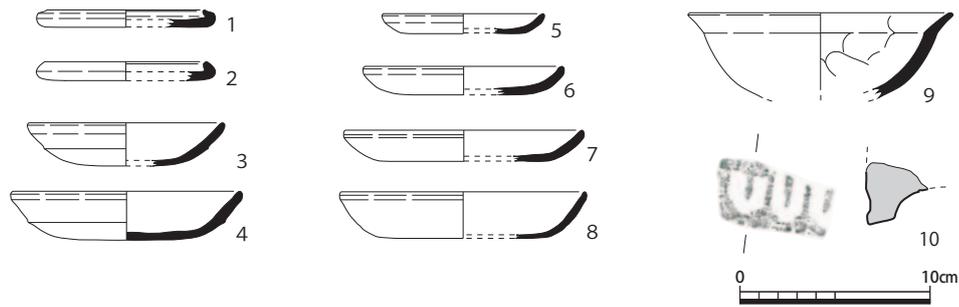


図29 出土遺物実測図（1：4）

3. 遺物

遺物は両区から弥生土器及び平安時代末期から鎌倉時代にかけての土師器皿が出土している。ここでは、ややまとまって出土した2区落ち込み5の遺物群を中心に報告する。

出土遺物（図29） 1～8・10は2区落ち込み5から出土している。1～8は土師器皿である。1・2はコースター形の皿Acで、口径は8cm台である。3～8は皿Nである。3・4はやや深手で口縁部のナデの痕跡が明瞭に残る。5～8は口径8～10cm台の5・6と12cm台の7・8がある。いずれも京V期新～VI期新段階に属する物で、12世紀中頃～13世紀初頭に属する。10は、2区18層出土の弥生土器鉢である。口縁部は外反し、体部やや丸味を持つ。調整は摩耗して不明である。弥生時代後期後葉に属する。

10は剣頭文軒平瓦である。瓦頭部成形は折り曲げ技法。12世紀後半に属する。山城産。

4. まとめ

今回の調査では、弥生時代の包含層及び土坑、平安時代末期から鎌倉時代にかけての土坑、落ち込み、溝等を確認した。ここでは、今回の調査成果と周辺調査状況を踏まえ、調査地周辺の変遷を見てみたい。

1区の成果から調査地内には当初、自然地形に沿う西に向かって下る段差が存在していた。平安時代末期の段階では、南北溝が成立していることから、段差自体が区画を示すものとして活かされていたことがわかる。しかし、鎌倉時代に入ると段差を埋めて平坦面が造り出される。調査1・2（図30）においても、平安時代後期に存在した区画溝が鎌倉時代以降に埋められて整地され、放生池と考えられる方形の池状遺構が成立する。

以上の成果から、平安時代後期に溝や柵列などで区画割されていたものが、鎌倉時代以降、池の構築や広範囲におよぶ造成工事が行われ、土地利用の在り方に大きな変化が生じてたと考えられる。池は放生池と想定され、周辺での瓦の出土量から寺院が存在したことは間違いない。調査地付近には平安時代中期創建の東光寺や、後醍醐天皇御願寺である元応寺が想定されており、これらの寺院に伴う遺構の可能性が高いといえる。今後、周辺の調査で寺院の全貌が明らかになることを期待したい。

（西森 正晃）

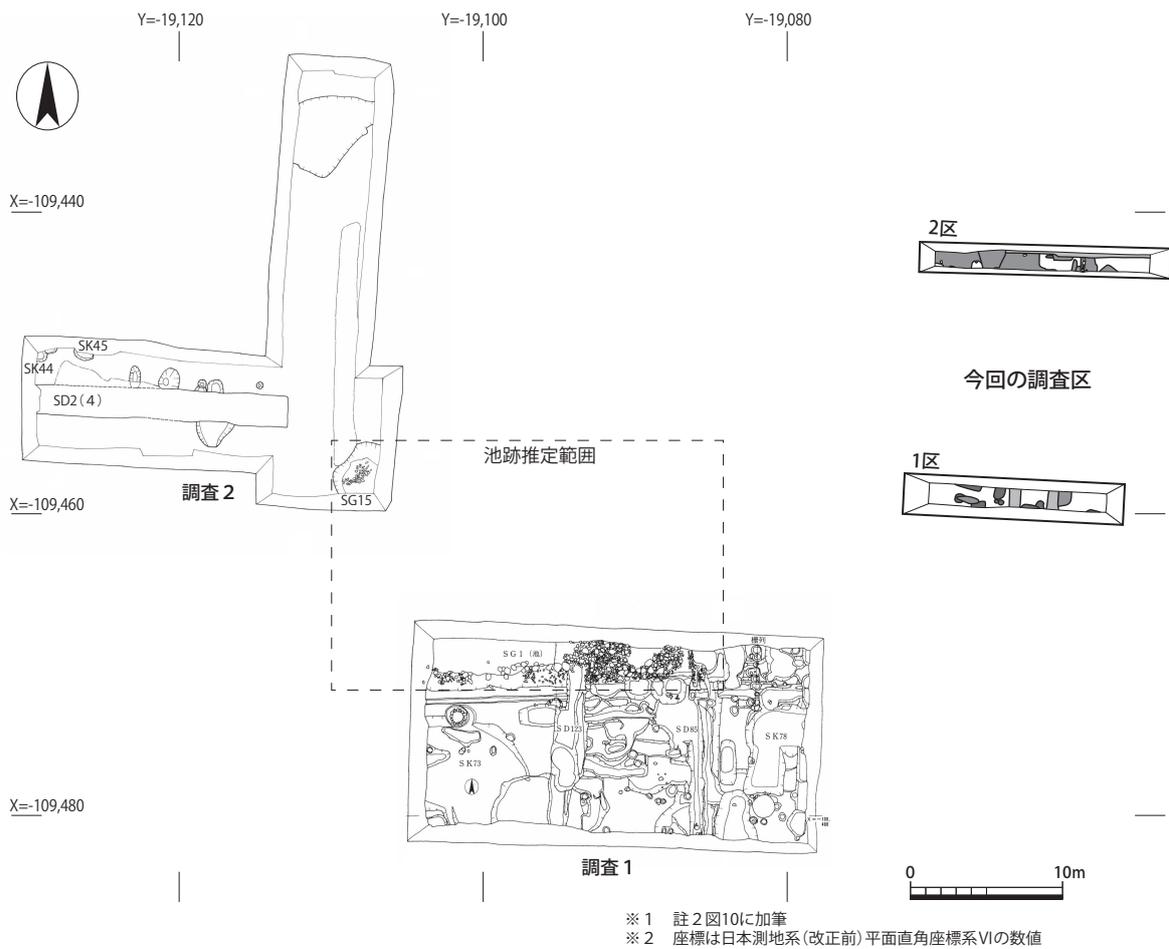


図30 周辺調査平面図（1：500）

註

- 1) 堀内明博「白河街区・岡崎遺跡2」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 1993
- 2) 吉村正親『白河街区・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-14, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 2003

IV -3 岡崎遺跡・法勝寺跡 No. 14

1 はじめに

本件は左京区岡崎南御所町地内における共同住宅工事計画に伴う試掘調査である。調査地は、岡崎遺跡及び法勝寺跡にあたる。法勝寺は承保二年（1075）、白河天皇の御願寺として造営を開始¹⁾、承暦元年（1077）に金堂・講堂などが建立²⁾、応徳二年（1085）になると常行堂の落慶供養が行われ³⁾、およその寺観が整えられた。同寺院の発掘調査はこれまでに43次を数え、金堂跡、八角九重塔跡、金堂東回廊跡、阿弥陀堂跡、園池跡などを確認し、伽藍の実態が明らかになりつつある。寺域については白河街区との関連で諸説あるが、岡崎道（車道）を西限として東西2町以上、北限は冷泉小路末かそれ以北、南限は押小路末北辺以南とし、南北幅を2町以上とする⁴⁾。

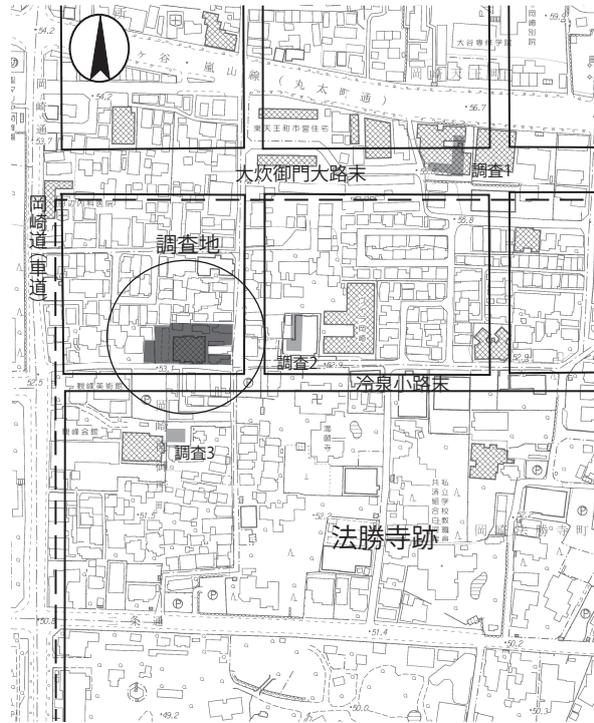


図 31 調査位置図（1：5,000）

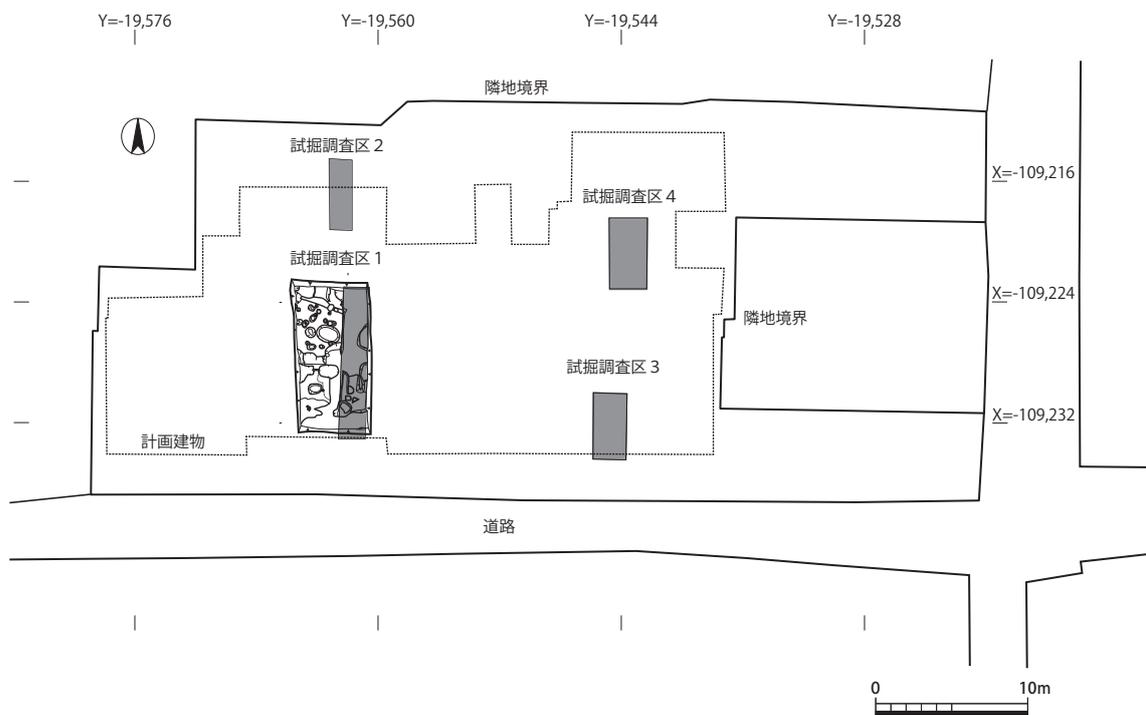


図 32 調査区配置図（1：500）

この復元に従うと、調査地が法勝寺北限付近に位置することが分かる。しかし、調査2（本調査地の東側）で東西溝を検出したが、中世の村境と推測し寺域北限の確認に至っていない⁵⁾。このようなことから、調査目的を法勝寺北限の関連遺構の把握とともに、中世の土地利用状況の確認とした。

調査は、2014年10月21日に実施し、敷地南西側で東西方向の溝及び土坑を確認した。東西溝が法勝寺北限の溝である可能性があることから、2015年1月19日～24日にかけて補足調査を実施した。調査面積は合計で93㎡となる。

2 層序と遺構

(1) 基本層序(図36) GL-0.2mまで現代盛土、-0.6～0.8mまで近世盛土が堆積し、これを除去すると中央から北側では明黄褐色粗砂～微砂の地山(白河砂)となる。一方、中央から南側は厚さ0.4～1mの遺構埋土が堆積し、その直下が灰白色微砂の地山(白河砂)となる。遺構面は地山直上と認識し、土坑7基、柱穴3基、溝2条、ピット10基を検出した。

(2) 中世(図34・37)

土坑30(図37) 調査区中央部で検出した土坑である。土坑は溝43に切られ、検出面で1.3m×1.1m、深さ0.5mとなる。埋土は1～3層に分層でき、1層は拳大の礫が混じる灰褐色泥砂土で、2・3層は褐灰色泥砂土である。1層から土師器・瓦器・瓦類が、2・3層から土師器・瓦類が出土した。出土土器類は京都X期古～新に属する。溝43が開削される直前に埋没したと考えられる。

溝42(図38) 調査区北端で検出した東西方向の溝である。東側は攪乱で削平されている。溝の北肩が調査区外となるが、検出面で幅1.1m、深さ0.9mを測る。底面はほぼ平坦で、東西端の比高は0.3mとなる。北肩口にテラス状の平坦面が形成される。埋土は25・26層が暗灰黄色砂泥で、26層には拳大～人頭大ほどの石が混じる。27・28層が黄褐色土である。25層からは瓦類が、26・27層からは土師器皿・須恵器・瓦器羽釜などが出土した。出土土器類は、京都VIII期中～新に属する。

溝43 調査区南半で検出した東西方向の溝である。土坑30を掘り込んで成立する。南肩は調査区外へ展開し、検出面で幅5m、深さは0.24～1mとなる。埋土は、下層からにぶい黄褐色砂泥土、



図33 調査区完掘状況・北東から

暗灰黄色泥砂土、黄褐色砂泥土、暗灰黄色砂泥土となり、これらの上層にはブロック状の黄褐色土を含む浅い黄色泥砂土、黄灰色泥砂土、にぶい黄褐色砂泥土などが堆積する。西壁11・14層(図36)はラミナが認められ、一時流水していたことが判明する。さらに、西壁17・18層のような粘土ブロックが混在し、溝底が一段凹ん

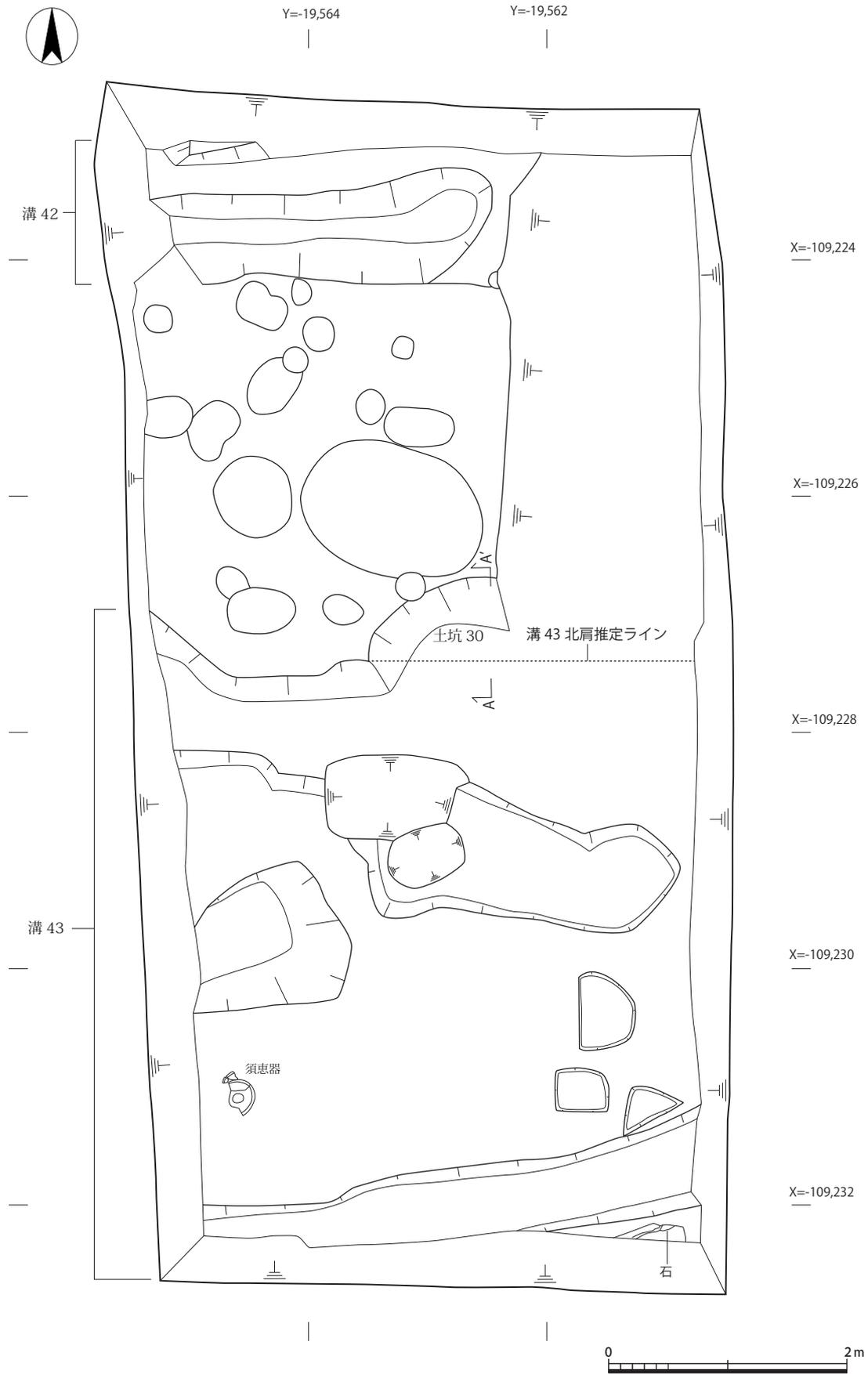


図 34 遺構平面図 (中世) (1 : 50)

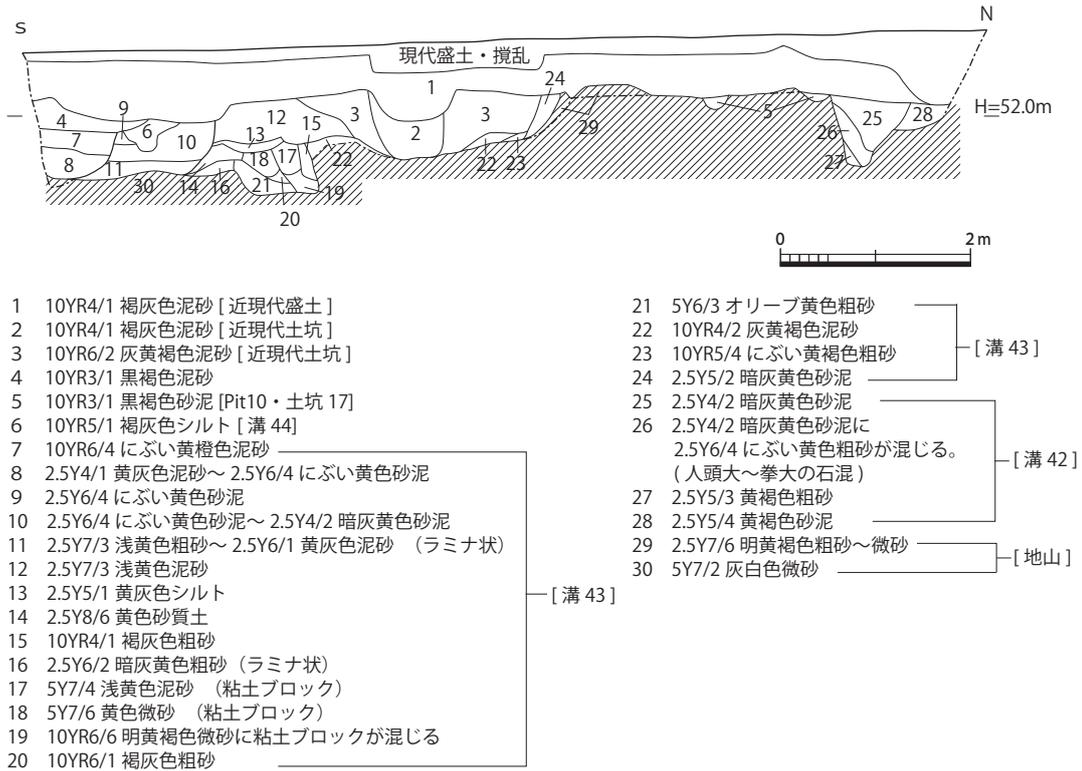


図 36 調査区西壁断面図 (1:80)

でいることから、流水速度の早い時期があったと考えられる。13層はシルトが水平堆積しており流水が落ち着いていたことが分かる。また、埋土の断面観察の結果、溝は少

なくとも3回の掘り直しが認められ、幅を変えながらも溝としての機能を維持し続けている。最終的(近世)に溝44の幅0.6mの溝となる。出土土器も京都X期新～XI期中と幅がある。このことから、長期間溝として機能していたと推定する。

(3) 近世 (図 35)

柱穴 柱穴は調査区北半に分布し、3基(7・8・18)検出した。平面形は円形ないしは楕円形を呈し、径0.34～0.44mを測る。柱穴18は径0.1mの柱当たりを確認することができ、深さは0.35mである。柱穴8は深さが0.53mで柱の抜き取り痕跡を確認することができる。8と18はおおよそ東西方向に並び、柱間は1.68mである。本調査区範囲内

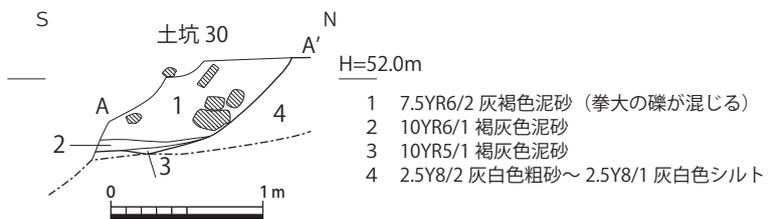


図 37 A - A' 断面図 (1:50)



図 38 溝 42 完掘状況 (東から)

での展開は認められず、柵列の可能性が考えられる。柱穴8から土師器・焼締陶器・平瓦が出土した。柱穴18から土師器、染付が出土した。

土坑

土坑16 調査区中央部西側で検出した土坑である。平面形は円形を呈し0.70×0.68m、深さ0.11mとなる。埋土は黒褐色泥砂である。

土坑17 調査区北西部で検出した土坑で、調査区外へ展開する。平面形は楕円形で、長軸は0.4m以上、短軸は0.34m、深さ0.11mとなる。埋土は黒褐色泥土である。埋土から土師器・陶磁器・染付・瓦類が出土した。

土坑19 調査区中央部で検出した土坑である。平面形は楕円形で1.58×1.14m、深さ0.18mとなる。埋土には黒褐色泥砂土に地山ブロックが混じる。埋土から染付などが出土した。

土坑22 調査区中央部西側で検出した土坑である。ピット23を掘り込んで成立する。平面形は円形で、0.58×0.40m、深さ0.60mとなる。埋土は黄灰色泥砂に淡い黄色砂泥土が混じる。埋土から近世に属する染付などが出土した。

ピット ピットは調査区北半に分布し、10基検出した(2・5・6・9・10・11・20・21・23・40)。平面形は円形ないしは楕円形を呈し、径0.2～0.3mとなる。ピット12は0.3m×0.2mで、埋土から土師器・染付・金属製品が出土した。

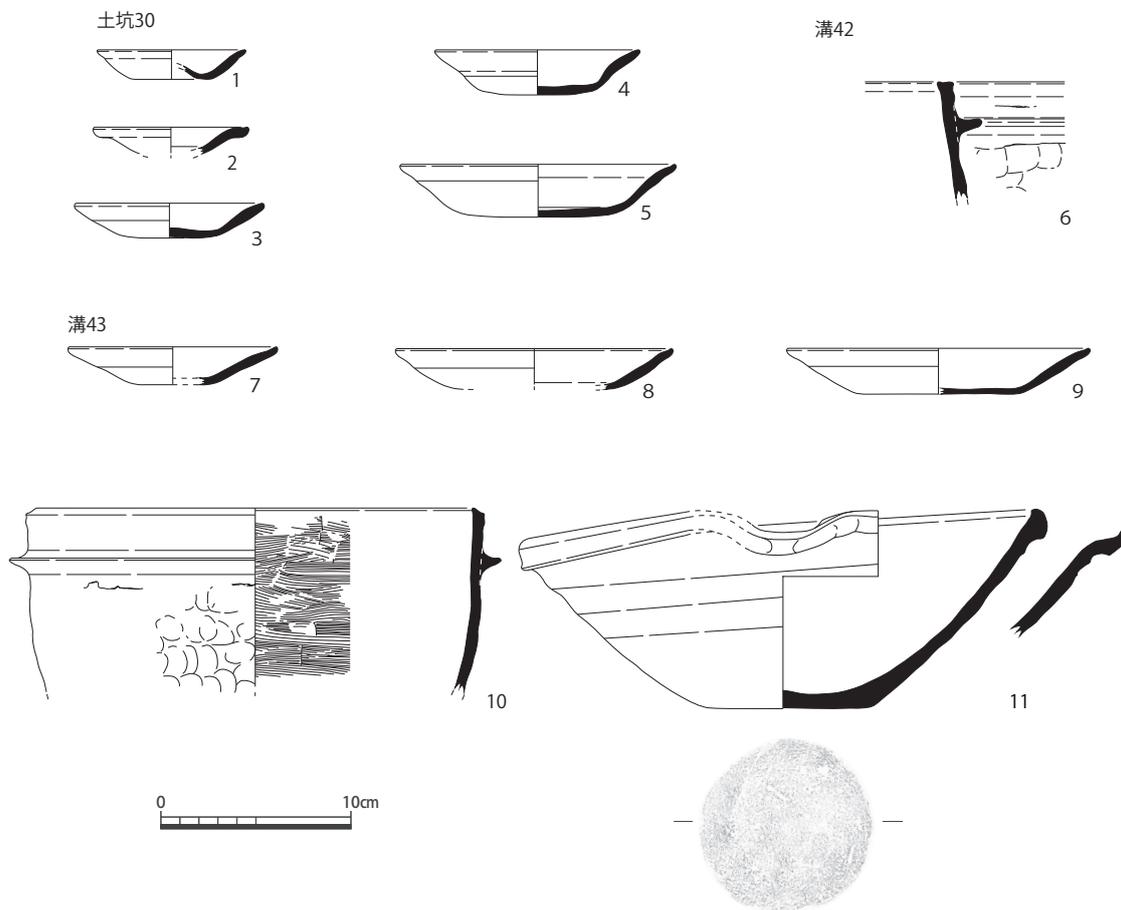


図39 出土遺物実測図・拓影(1:4)

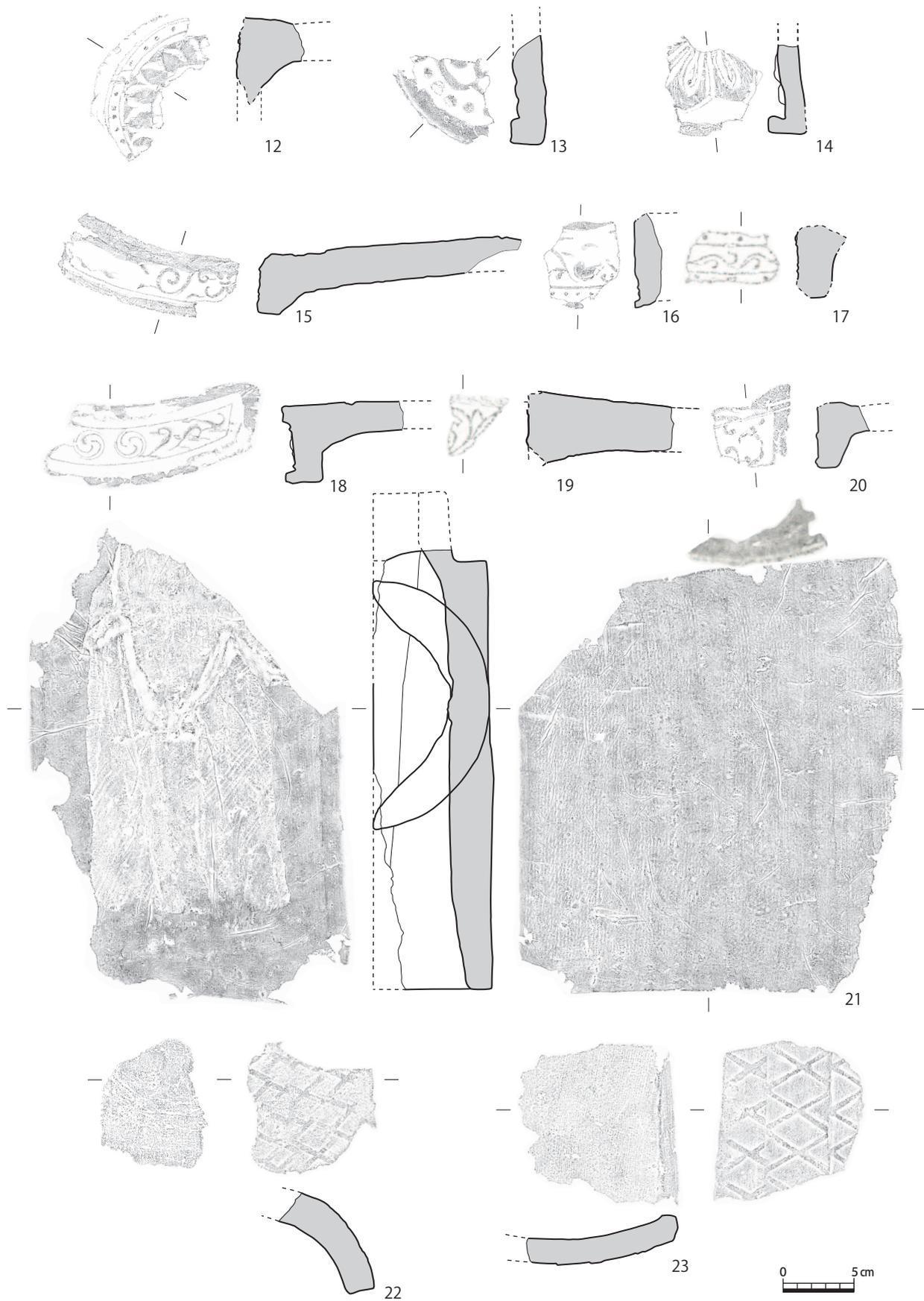


图 40 出土遺物実測図・拓影（1：4）

3 遺物 (図 39・40)

土器 (図 39)

土坑 30 (1～5) 土坑 30 から出土した土器類は、土師器・須恵器・瓦器などである。このうち、図化出来たのは土師器のみである。土師皿の種別は、皿 N (4)・皿 S (2・3・5)・皿 S h (1) である。当該地から出土する土師器は、同時代の平安京内で消費されているものとやや様相が異なり生産地の違いが認められる。したがって、直ちに平安京内における編年案に従うことが出来ない。そこでやや時期幅をもって報告する。1～3は口径が 7.6～10cm で、京都 X 期古～中に属する。4は口径が 11.8cm, 器高 2.4cm で、京都 X 期中～新に属する。5は口径が 14.3cm で、京 X 期新に属する。土坑 30 は溝 43 よって一部削平を受けていることから、やや時期の新しい 4・5 は溝 43 からの混入と推測できる。したがって、16 世紀初頭に埋没したと考えられる。

溝 42 (6) 溝 42 から出土した土器類は、土師器皿・瓦器羽釜などである。このうち、図化出来たのは、瓦器羽釜のみである。鏝が短く水平に突出する。体部は押さえ、口縁部付近はナデを施す。14 世紀後半～15 世紀に属する⁶⁾。出土遺物の点数が少ないことから、埋没直前まで管理されていた溝の可能性が高く、15 世紀初頭に埋め戻されたと考えられる。

溝 43 (7～11) 溝 43 から出土した土器類は、土師器皿・須恵器鉢・瓦器羽釜などである。土師器は皿 S (7～9) である。7は口径が 11.8cm, 口縁部に煤の吸着が認められる。8は口径が 14.4cm, 9は口径が 15.8cm で口縁部から内面にかけてナデを施す。京都 X 期古から中に属する。須恵器鉢 (11) は口径が 27cm で器高が 8.5cm を測る、東播系の鉢である。14 世紀末～15 世紀初頭に属する⁷⁾。瓦器羽釜 (10) は口径が 23cm あり、鏝は短く水平に突出する。体部はオサエ、口縁部はナデを施し、内面には刷け目が認められる。15 世紀後半～16 世紀前半頃に属する⁸⁾。

溝 43 の出土遺物は、後述する平安時代後期 (12 世紀から 13 世紀) の瓦類が多くを占める。その中であって、15 世紀初頭から 16 世紀後半頃までの土器類が出土した。溝 43 は土坑 30 を掘込んで成立しており、少なくとも 16 世紀初頭以降に成立したことが分かる。溝 43 は数回の掘り直しが認められ、土師器皿が溝の底部から出土している。したがって、16 世紀初頭に開削され近世にかけて徐々に埋没したと考えられる。このようなことから須恵器鉢は、15 世紀後半頃まで使用され破棄されたと推測する。また、この時期に土地の再開発が活発化してきたことが分かる。

瓦類 (図 40)

瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦に分類できる。軒瓦は土坑 30, 溝 42・43 から、丸瓦・平瓦はほぼ調査区全域で出土する。これまでの六勝寺跡の発掘調査成果を見ると、寺院所用瓦は寺域の境に破棄されている事例が多く認められる。したがって、瓦類の多くは法勝寺所用瓦の可能性が高く、築地や北方にあった堂宇に葺かれていたものと推測できる。軒瓦 12～17, 19・20 は 12 世紀前期から中期にかけて、18 は 13 世紀に生産されたと推測できる。丸瓦や平瓦も 13 世紀以降に生産された可能性が高い。以上ことから、法勝寺伽藍整備段階から栄西の再建期頃までのものが、一括で

破棄されている可能性が高い。

12 は、溝 43 から出土した単弁蓮華文軒丸瓦である。残存状況が悪く全体の文様構成は不明である。花卉は小ぶりの紡錘形で、間弁は三角形を呈す。花卉と間弁が接する。圏線は 2 重で、小ぶりの珠文が密に巡る。瓦当成型は瓦当貼り付け。瓦当裏面はナデ、丸瓦凸面もナデを施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は硬質で色調は灰色を呈す。

13 は溝 43 から出土。残存状況が悪く全体の文様構成は不明であるが、単弁 4 葉蓮華文軒丸瓦と推測する。花卉は紡錘形で間弁を配す。外区には珠文が巡る。瓦当裏面はナデ後オサエ、側縁はナデを施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成はやや軟質で、色調は灰色を呈す。

14 は溝 43 から出土。残存状況が悪く全体の文様構成は不明であるが、単弁蓮華文軒丸瓦と推測する。花卉は先端が尖り、子葉の周囲に圏線が巡る。側縁はナデ、瓦当裏面はナデを施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は硬質で、色調は黒色を呈す。播磨国産。

15 は溝 43 から出土した唐草文軒平瓦である。中心飾りは背向 C 字に紐状のもので接合する。唐草は左右へ 3 回反転し、大きく巻き込む。上部の圏線および周縁は押しつぶされている。瓦当成型は半折り曲げで、曲線顎である。顎部凸面から裏面にかけて横ナデ。平瓦凹面細かい布目を残し、瓦当付近は工具痕が残る。凸面は格子叩き後、縦ナデを施す。側縁はナデ。胎土は多量の砂粒を含み、焼成は硬質で、色調は褐色を呈す。

16 は溝 42 下層から出土。残存状況が悪く全体の文様構成は不明であるが、唐草文軒平瓦である。中心飾りは、背向 C 字で上下に山形の唐草を配し、左右に唐草が展開する。外区の珠文は密に巡る。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は硬質で、色調は灰色を呈す。丹波国産か。

17 は溝 43 下層から出土。残存状況が悪く全体の文様構成は不明であるが、唐草文軒平瓦である。唐草は連続し子葉は巻き込む。外区には珠文が巡る。瓦当成型は瓦当貼り付けで、顎裏面は横ナデ、瓦当部凸面はナデを施す。胎土は砂粒を含み、焼成は硬質で、色調は灰色を呈す。

18 は土坑 30 から出土した唐草文軒平瓦である。瓦当成型は瓦当貼付けで、段顎である。文様構成は、中央に左巻きの巴文を 2 個配し、左右に向かって唐草が 3 回反転する。瓦当凸面と顎部裏面は横ナデ、平瓦凹面は細かい布目を残し、平瓦凸面は縦ナデを施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は硬質で色調は黒色を呈す。唐草部分に範傷が認められる。

19 は溝 43 から出土した唐草文軒平瓦である。瓦当成型は瓦当貼付けで、曲線顎である。残存状況が悪く全体の文様構成は不明であるが、Y 字を呈す唐草に蕾を配す。凹面は細かい布目を残し、側縁付近に面取りを施す。凸面は縦ナデ、胎土は極少量の砂粒を含み、焼成は硬質で色調は灰色を呈す。山城国産。

20 は溝 42 上層から出土した唐草文軒平瓦である。瓦当成型は半折り曲げで曲線顎である。残存状況が悪く全体の文様構成は不明であるが、大きく巻き込む唐草を配す。顎部裏面は横ナデ、平瓦凸面は縄叩きを施す。胎土は砂粒を含み、焼成は硬質で、色調は灰色を呈す。山城国産。

21 は溝 43 から出土した丸瓦である。凸面は縄叩き後ナデ、凹面は布目と吊るし紐痕を残し、

狭端面から約 6.5cm 横ナデ，側縁付近は面取り，狭端面はナデを施す。玉縁部凸面はナデを施す。胎土は多量に砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。

22 は溝 43 下層から出土した丸瓦である。凸面は格子叩き，凹面は布目を残す。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質である。

23 は溝 43 下層から出土した平瓦である。凸面は格子叩き，凹面は布目を残し，側縁付近は面取り，側縁はケズリを施す。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰白色を呈す。

4 まとめ

本調査では、周辺調査事例と同様に中世から近世にかけての遺構を確認した。

調査区北側の溝 42 は、調査 2（図 31）で検出した東西溝 11（ $X = -109,222$ m）とほぼ同一直線状にあることから一連の溝と推定することができ、東西 73.3 m 以上となる。溝は砂層を掘り込んで成立しており、肩口が脆弱であったと推測される。26 層に混在していた石は、溝肩口の形状を保つための護岸の役割を果たしていた可能性がある。埋土からは、平安時代後期の軒瓦とともに 14 世紀後半から 15 世紀頃の瓦器羽釜が出土した。したがって、15 世紀中頃以降に埋没したと考えられる。また、調査 1（図 31）で確認した SD 4 を白河地割に関連する溝（大炊御門大路末）と仮定⁹すると、溝 42 とは南北約 119 m の間隔となり、おおよそ 1 町を測る。したがって、溝 42 の成立は、白河地割りが施工された時期（法勝寺造営当初）まで遡る可能性がある。但し、大炊御門大路末が調査 1 地点まで施工されていなかったとの指摘もあり¹⁰、白河地割の復元は今後の課題である。

調査区南側の溝 43 は、南肩口を確認することができなかったが、検出面で幅が 5 m 以上あり、幅の広い溝である。調査 2 でもほぼ同様の位置（ $X = -109,228$ m）で東西方向の溝を検出しており、一連の溝と推測する。ただし、調査 2 では溝が江戸時代前期に属すると報告している。

さて、当該地は室町時代に東山十郷の 1 つとして岡崎郷と呼ばれ、「くろたに道」（現在の岡崎道）の東方から天王町・黒谷辺りまでの地域に村が形成されたとする。南側の発掘調査（図 31 調査 3）では、村と道の境界施設に堀と土塁が築かれていたことを明らかにしている。また、堀は中世末期の混乱期に開削され、江戸時代初頭に埋没したとする¹¹。溝 43 は幅が大きく堀状を呈しているが、深度が浅いことから、堀とは断定し難い。ただし、埋土から平安時代後期の瓦とともに 15 世紀から 16 世紀後半の土器類が出土しており、調査 3 と同様に中世に開削され近世にかけて徐々に埋没していったものと考えられる。したがって、調査 3 と同様に敷地境として意識されていたと推測する。また、18 世紀後半頃の岡崎村の様相を描いている「天明六年京都洛中洛外絵図」¹²を見ると、当該地付近に東西方向の道が認められる。さらに、元禄十六年（1703）に上京の行衛町から移転してきた満願寺との位置関係を見ると、当該地の南隣接道路がほぼこれを踏襲していることが分かる。江戸時代になると村境が堀である必要がなくなり、溝 44 のように小規模の溝を開削し道路側溝もしくは境界溝としていたと考えられる。以上のように、当該地付近は平安時代後期から敷地境界地付近であったことが判明した。したがって、溝 43 は土地境として溝 42 の埋没後に開削され

たと推測する。法勝寺は16世紀中頃から末頃まで存続しており、溝42・43が寺境もしくは村境としてどのように認識されていたのかは、資料の増加を待ち再度検討する必要がある。

また、絵図には道路に沿って町屋が描かれており、調査区北半で検出した遺構群はこれらに関連するものと推測する。江戸時代中頃には絵図に描かれている岡崎郷が成立したと考えられる。

(鈴木 久史)

註

- 1) 『水左記』承保2年7月11日条
- 2) 『扶桑略記』承暦元年12月18日条
- 3) 『水左記』応徳2年8月29日条
- 4) 福山敏男「六勝寺の位置」『日本建築史研究』墨水書店,1968年
清水擴「六勝寺の伽藍とその性格」『建築史学』第5号,1985年
上村和直「白河と院政」『平安京提要』角川書店,1994年など
- 5) 辻裕司『法勝寺跡』「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-9」(財)京都市埋蔵文化財研究所,2007年
- 6) 奥井智子「畿内における土製煮沸具の様相」『中近世土器の基礎研究』21日本中世土器研究会,2007年
- 7) 新田和央「京都の東播系須恵器」『中世近世土器の基礎研究』26日本中世土器研究会,2015年
- 8) 註6)に同じ。
- 9) 吉村正親『白河街区跡・岡崎遺跡』「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2001-14」(財)京都市埋蔵文化財研究所,2003年
- 10) 近藤奈央ほか『白河街区跡・岡崎遺跡』「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4」(財)京都市埋蔵文化財研究所,2005年
- 11) 網伸也「VI法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成19年度』京都市文化市民局,2008年
- 12) 『慶長 昭和 京都地図集成 1611(慶長16)年～1940(昭和15)年』柏書房,1994年

IV -4 中臣遺跡 No. 92

1. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は、山科区栗栖野華ノ木町内に位置しており、新十条通と川田道の交差点より北西の地点にあたる(図41)。平成27年5月、この区画に高齢者福祉施設の建設が計画されたことに伴い、埋蔵文化財調査にかかる届出が提出された。これを受けて京都市文化財保護課(以下、保護課)が試掘調査を実施したところ、地山上面において、土坑、柱穴、ピット、溝等の遺構を多数確認した。このうち、敷地の西半部において検出した大溝は、幅2.5mを測る大型遺構であることから、古墳もしくは墳丘墓の周溝である可能性が示された。

この成果を受けて保護課と事業者は協議を行い、建物が計画された敷地の西半部を中心として発掘調査を実施した。調査対象面積は187㎡、調査期間は7月21日～8月7日の14日間である。

(2) 調査の経過

調査区は、計画建物の形状にあわせて北西-南東方向を主軸とする長方形とした。その規模は11m×17mを測る。調査前の現況はアスファルトが敷設された駐車場である。

現地調査は、以下の手法で行った。はじめに表土、盛土、近現代の耕作土をバックホウを後進させながら掘削し、続く人力掘削では、層序ごとに掘削を進めた。掘削作業にはショベルやジョレン、ツルハシ等

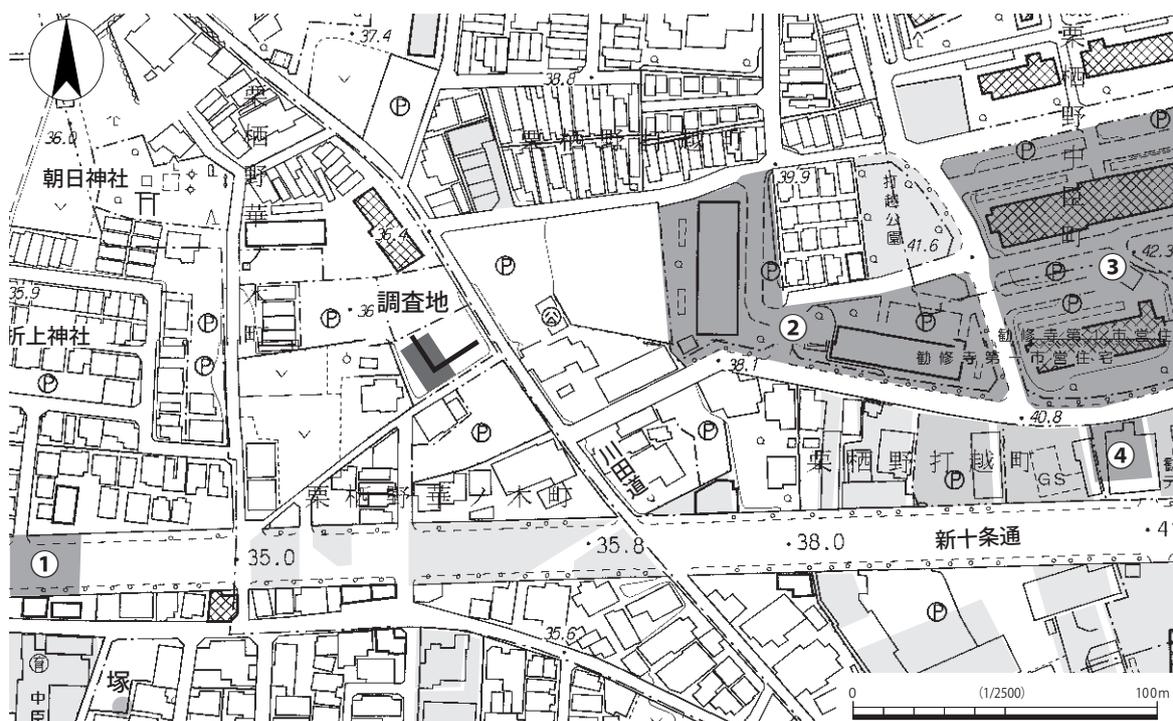


図41 調査位置図(1:2,500)

を用い、排出土は場内に仮置きした。

また、層相の変化ごとに遺構面の検出に努め、遺構を検出した際には、個別に掘削を行った。遺物の出土に際しては、ヘラや小型ショベル等を用いて、慎重に取り上げ作業を行った。

検出した遺構面では、全景写真の撮影や検出遺構の個別写真撮影、平面図の作成、標高値の計測、遺構実測等、一連の記録作業を行った。これらの工程をすべて終了した段階で埋め戻しを行い、現地における調査工程を終了した。

このほか調査期間中に、京都市考古資料館が主催する市内在住の小学生を対象とした発掘調査体験「京都の地下を掘ってみよう！」が、当地において開催された（図45）。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

中臣遺跡は、山科区東野・栗栖野・西野山・勧修寺地区にまたがる周知の遺跡である。旧安祥寺川と山科川の合流地点北方の独立丘陵（栗栖野丘陵または栗栖野台地）を取り巻く一帯が遺跡範囲に相当する。現在の勧修寺市営住宅付近（栗栖野中臣町）が丘陵の最頂部であり、今回の調査地はその西側斜面にあたる。

「中臣」の地名の由来には諸説あるが、古代豪族である中臣氏に関連付ける説が有力である。遺跡内に立地する中臣神社（西野山中臣町）は、中臣（藤原）氏の祖神である天児屋根命を祭神とし、その隣接地には、藤原高藤の妻・宮道列子^{みやじたまこ}の墓と伝えられる古墳が存在する。藤原高藤の子孫はこの地に根付き、後に勧修寺藤原氏と称されたが、勧修寺はもともと列子の父である宮道弥益の自宅を寺として改めたものであるため、この地域が藤原氏の所領であったわけではない。したがって、中臣の地名のおこ

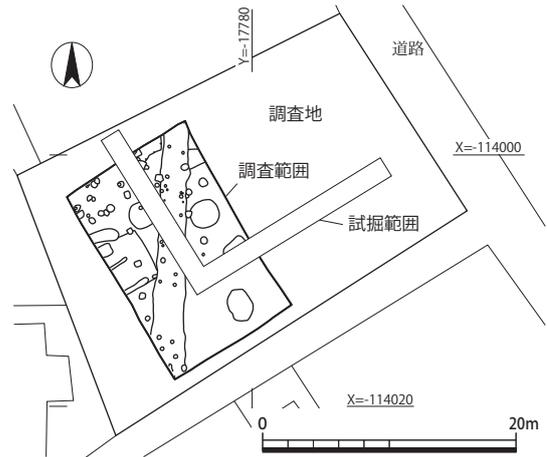


図42 調査区配置図（1：600）



図43 遺構面検出状況（北東から）



図44 遺構完掘状況（北東から）



図45 体験学習実施状況

りが藤原高藤の動向に基づくものとは考えにくい。また、『日本書紀』にみえる中臣鎌足の別邸「山階陶原館」が当地に存在したことに起因するとする説もあるが、近年では、かつて「陶田里」と称された厨子奥地区が候補地として有力視されており、いまだ解決には至っていない。

平安時代末期から鎌倉時代初頭の当地の様相は、勸修寺の寺領を示した絵図である「山城国山科郷古図（彰考館所蔵）」（以下、条里古図と記述）が有益な史料となる。この図には、栗栖野丘陵の輪郭が書き込まれており、主要な街道の位置がわかるほか、大凡ながら当時施行されていた条里地割のラインと個々の里名を読みとることができる。栗栖野丘陵周辺は「栗栖里」と記されており、栗栖の地名がこの頃まで遡ることが明らかである。隣接する里名には「竹原里」「大藪里」「^{ま(そ)ぎ}粉本里」など植生に由来するものが多いことから、「栗栖里」もクリをはじめとする落葉樹が繁茂する地域であった可能性が高い。逆に言うと耕作には不向きな土地であり、丘陵地特有の水利の悪さにより、耕地化が阻まれていたと解釈される。

なお調査地に東接する道（後の川田道）はこの段階ですでに記入されており、勸修寺から現東山区今熊野へ抜ける主要な街道として、機能していたようである。

近世になると開発手段が発達し、この地にも開墾の手が加えられるようになる。享保十五年（1730）、それまで西野山村・東野村に属し、栗栖野新開場と呼ばれてきた当地を徳川家光の娘が購入して大山崎の観音寺に寄進した。その後、久世郡寺田村、紀伊郡富森村、下鳥羽村（伏見区）の人々が移住して開墾に着手し、寛政六年（1794）には西野山村・東野村から分離、天保五年（1834）には栗栖野新田として記載されるに至る。以後、大山崎の観音寺領のまま存続した。明治5年に栗栖野村として成立したときの戸数は14戸、主な物産は茶等である。

（2）周辺の調査

当地における中世以前の景観復原は、発掘調査成果によるところが大きい。中臣遺跡は、縄文時代から中世まで続く複合遺跡であるが、特に弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期から飛鳥時代を主とする遺構群の報告が顕著である。

調査地の南を通る新十条通において行われた第70 - 4次調査（図41①）では、弥生時代後期の竪穴住居が5棟検出されている。このうち4棟は焼失住居で、焼土や炭化材が床一面に残存しており、当該時期の建物や集落構造を知る上で重要な成果として報告されている。

また、調査地より東へ100m程度隔てた丘陵頂部において行われた第73次調査（図41②）・第74次調査（図41③）・第75次調査（図41④）では、古墳時代～飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物・土壙墓の検出が顕著である。馬具や鉄鏃・刀子等の鉄器が副葬された土壙墓は、共同体の長やそれ以上の人物の墓であると目されている。このほか、平安時代後期の土器埋納ピットや鎌倉時代の掘立柱建物、室町時代の火葬墓と濠等の遺構も確認されている。

以上のことから今回の調査では、複数期における遺構の検出が期待された。

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査地は、北東に高く、南西に向かって下がる傾斜面を階段状に造成した一角にある。現地表面の標高は T.P.36.5 ～ 36.6 m を測る。地表面より、-0.5 m まで現代盛土及び整地土、その下に 0.1 m 程度の層厚をもつ黒褐色シルト（近世包含層）があり、この直下が主要遺構面となる。遺構面の基盤層は、にぶい黄褐色砂質シルトを主体とする地山土であり、部分的に植物茎根の繁茂による黒色化が認められる。今回の調査では、この遺構面において南北方向に主軸をもつ大溝（平安時代）のほか、土坑（近世）、ピット（近世・時期不明）を検出した。

(2) 遺構と遺物

遺構面（地山上面）では、平安時代から近世までの遺構を同一面において検出した（図 47）。

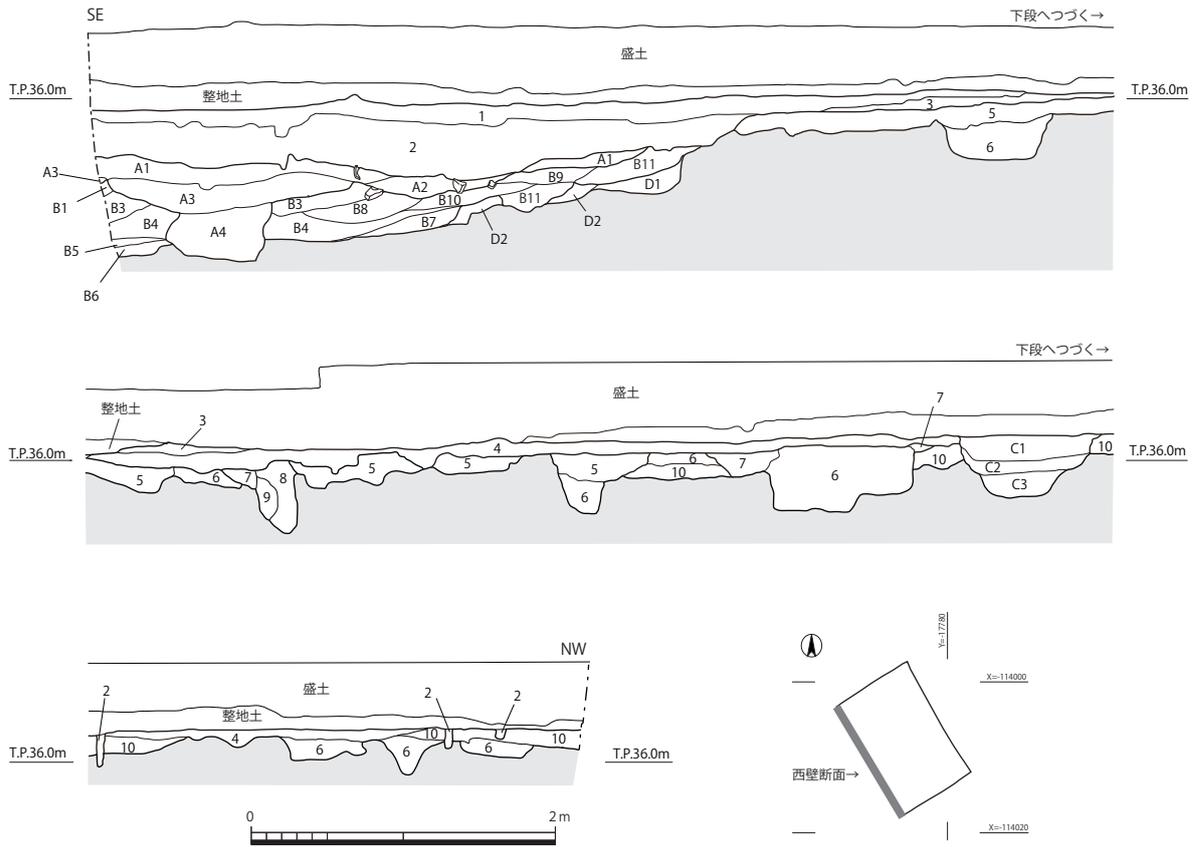
溝 10（図 48） 調査区中央を南北方向に縦断する溝である。検出した規模は南北長 20.0 m、最大幅は 2.6 m を測る。主軸は、方位北に対してわずかに東へ振る。直線を描いて調査区外へのびるため、全体規模は明らかではない。断面形状は逆台形で、上方ではより外方へ開く。底面はほぼ平坦であるが、調査区北端付近では旧地形の傾斜に伴い、東から西へ向かって傾斜する様相が認められる。溝の最大深度は 0.8 m、北から南へ向かい、約 3 % の勾配をもって緩やかに傾斜する。ただし、底面や側面に、流水痕跡を示すような潜り込みや攪乱は認められない。

埋土は大きく 3 層に分層できる。上層は黒色シルトを主体とする近世層で、染付を含む陶磁器や馬の骨・歯を含む。締まりは悪く、表層 0.15 ～ 0.25 m に堆積する。中層は黒褐色粘土質シルトを主体とする締まりの良い土層で、径 1cm 未満の礫を少量含む。土質はほぼ均質で、大きな擾乱はない。溝が静かに埋没する過程を経た様子を窺うことができる。層内からは平安時代～鎌倉時代初頭の土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・銭貨が出土した。下層は灰黄褐色～暗褐色を呈するシルト層で、やや締りが良い。地山である黄褐色シルトブロックを一定量含む。このブロック土は、風化の度合いから、掘削後間もない時期に流れ込んだものと考えられる。下層からは、平安時代後期までの土師器・須恵器・瓦が出土した。

なお溝 10 には、埋土下層の上面から掘り込まれたピットが複数存在する。直径は 5 ～ 15cm、最大深度は 10 ～ 25cm とばらつきがあり、その配置にも規則性を認めにくい。土留め杭や橋等の施設材の痕跡であると考えられるが、木材等の残存は確認できていない。溝埋土との切り合い関係から、溝が開削され、底に泥土（下層）が堆積する段階で設けられた遺構であること、また溝が放棄され、埋没する過程ですでにその機能を終えていたことがわかる。

以上のことから、溝 10 が開削されたのは平安時代後期まで遡ること、その後、埋没する過程で杭等の施設材が打ち込まれる等、積極的な利用もみられたが、平安時代末～鎌倉時代には完全に放棄されたこと、近世には窪地となり表層に土砂が溜まる状態となったことが推測される。

溝 10 から出土した遺物は、図 48 下段に示した。1 は土師器皿である。深さのある器形で、口



- 1) 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 径3.0cm未満の礫多量入る ややしり悪い
- 2) 2.5Y3/2 黒褐色シルトに
2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルトブロック5%程度入る
径0.5cm未満の礫微量入る しり悪い (近世包含層)
- 3) 10YR2/1 黒色シルト 径0.5cm未満の礫微量入る ややしり良い
やや軟質 (近世包含層)
- 4) 10YR2/2 黒褐色シルトに
10YR3/2 黒褐色シルトブロック10%程度入る
径0.5cm未満の礫微量入る しり悪い (近世包含層)
- 5) 10YR3/2 黒褐色シルトに
10YR3/4 暗褐色シルトブロック20%程度入る
径0.5cm未満の礫微量入る しり悪い
- 6) 10YR3/2 黒褐色シルトに
10YR3/4 暗褐色シルトブロック40%程度入る
径0.5cm未満の礫微量入る しり悪い
- 7) 10YR2/3 黒褐色シルトに
10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック5%程度入る しり悪い
- 8) 10YR3/4 暗褐色シルト 径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い
- 9) 10YR4/4 褐色シルトに
10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック1%程度入る ややしり悪い
- 10) 10YR3/3 暗褐色シルトに
10YR3/1 黒褐色粘土ブロック5%程度入る
径0.5cm未満の礫微量入る ややしり悪い
- A1) 10YR2/2 黒褐色シルトブロックと
10YR3/2 黒褐色シルトブロックの混合層
径0.5cm未満の礫少量入る ややしり悪い やや軟質
- A2) 10YR2/3 黒褐色シルト 径2.0cm未満の礫少量入る しり悪い
やや軟質
- A3) 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルトブロックと
2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトブロックの混合層
径2.0cm未満の礫多量入る しり悪い
- A4) 10YR3/3 暗褐色礫まじりシルト 径2.0cm未満の礫多量入る
しり悪い
- B1) 10YR2/2 黒褐色シルト 径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い
- B2) 10YR3/2 黒褐色シルト 径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い
- B3) 10YR3/1 黒褐色シルトに 10YR4/6 褐色シルトブロック1%程度入る
径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い やや軟質
- B4) 10YR2/1 黒色シルトに 10YR4/6 褐色シルトブロック1%程度入る
径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い やや軟質
- B5) 10YR2/1 黒色シルトに 10YR4/6 褐色シルトブロック5%程度入る
径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い やや軟質
- B6) 10YR3/1 黒褐色シルトに 10YR4/6 褐色シルトブロック5%程度入る
径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い やや軟質
- B7) 10YR3/1 黒褐色シルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック
20%程度入る 径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い やや軟質
- B8) 10YR3/2 黒褐色シルト 径1.0cm未満の礫微量入る しり悪い
- B9) 10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR3/1-3/2 黒褐色粘土質シルトブロック
10%程度入る 径1.0cm未満の礫微量入る しり悪い
- B10) 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 径1.0cm未満の礫微量入る
しり悪い
- B11) 10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR3/2 黒褐色シルトブロック10%程
度入る 径1.0cm未満の礫少量入る しり悪い
- C1) 2.5Y3/2 黒褐色微砂まじりシルトブロックと
2.5Y3/1 黒褐色微砂まじりシルトブロックと
2.5Y5/4 黄褐色シルトブロックの混合層 径0.5cm未満の礫微量入る
やしり悪い 炭化物・細かい土器片微量入る
- C2) 2.5Y5/4 黄褐色シルトに
2.5Y3/1 黒褐色シルトブロック20%程度入る
径3.0cm未満の礫微量入る しり良い
- C3) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂まじりシルトに
10YR3/1 黒褐色シルトブロック10%程度入る
径0.5cm未満の礫少量入る しり悪い
- D1) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに
10YR4/4 褐色粘土質シルトブロック5%程度入る
径1.0cm未満の礫微量入る しり悪い やや軟質
- D2) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに
10YR3/1-3/2 黒褐色シルトブロック5%程度入る やや軟質

図46 調査区西壁断面図(1:50)

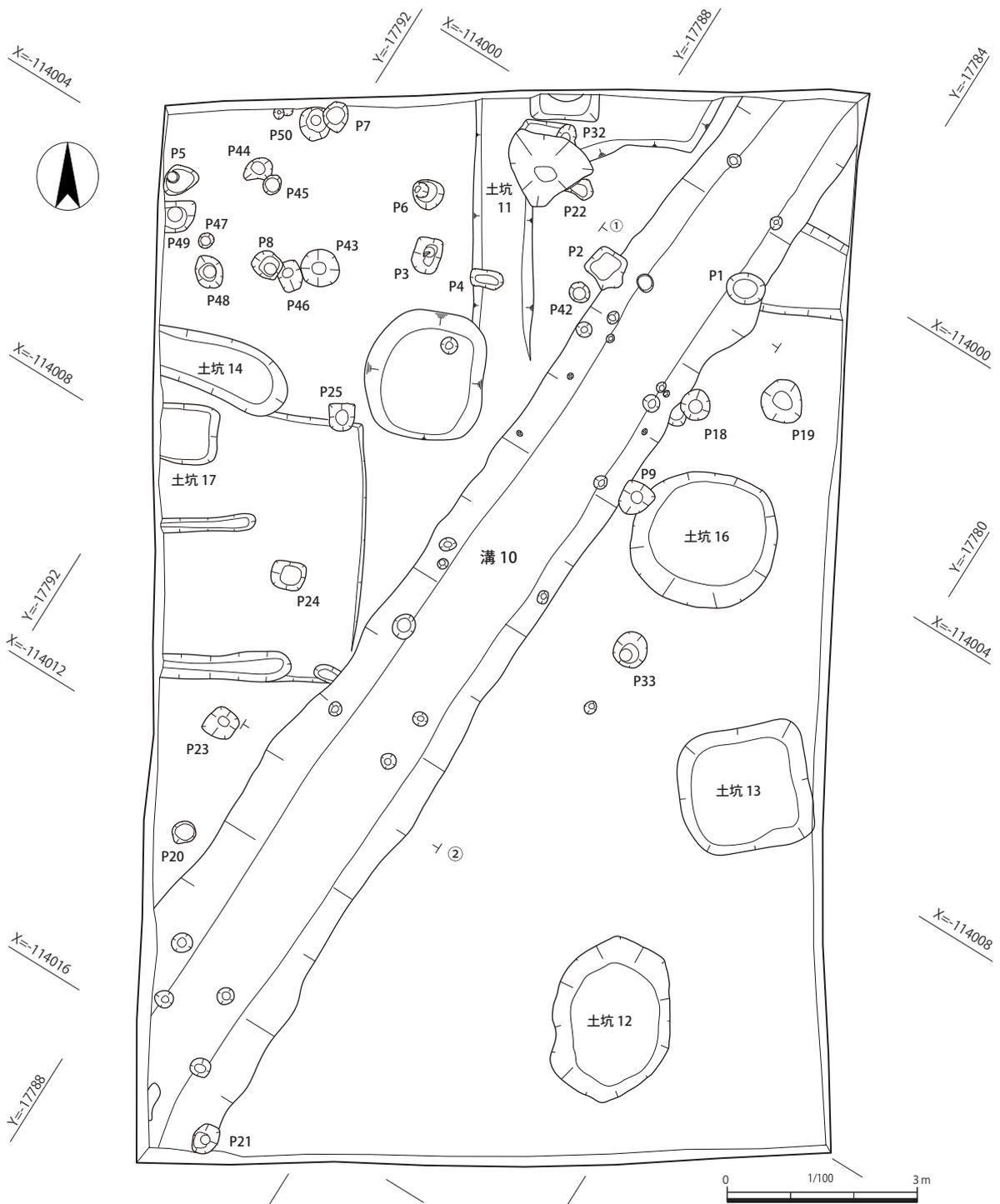


図 47 遺構面全体図 (1 : 100)

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代	溝 10
近世以後	土坑 12~17, ピット 2・7・18・21・33・43・46・47・49
不 明	土坑 11

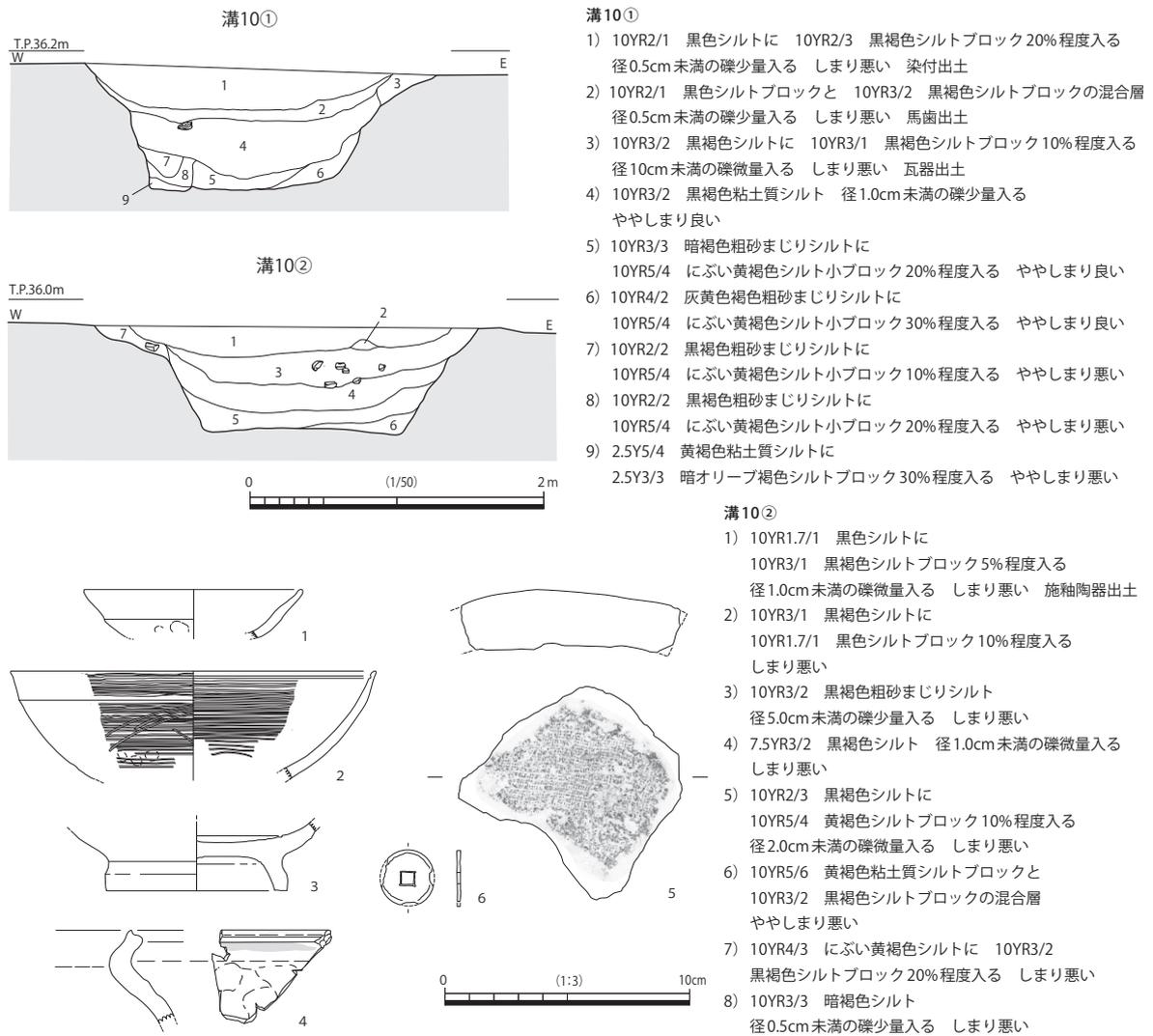


図 48 溝 10 断面図・出土遺物実測図

縁部外面に1段ナデを施す。12世紀の製品である。下層より出土した。2は楠葉型の瓦器碗である。内外面ともに暗文を施す。口縁部内面には楠葉型を特徴付ける沈線を1条めぐらせる。12世紀の製品である。中層より出土した。3は、灰釉系陶器（山茶碗）の底部である。高さのある高台と厚みのある器壁をもつ。底部内面には圏線が1条認められる。内外面ともに調整はナデ、釉薬は塗布されていない。10世紀後半の製品である。4は、土師器甕の口縁部である。丸みのある器形に短く外反する口縁をもつ。口縁端面には緩い線刻が1条認められる。口縁部外面には煤が付着する。8世紀後半～9世紀初頭の製品である。2～4は、中層より出土した。5は、平瓦の一部である。須恵質で、色調は灰色、焼成はやや甘い。外面の調整は不明であるが、内面には布目が残る。下層より出土した。6は銅銭である。一部を欠損するものの、直径2.1cmに復原できる。文字等は認められず、外郭の盛り上がりも弱いことから、私鑄銭の可能性が高い。埋土上層より出土した。

土坑 11(図 49) 調査区北辺において検出した土坑である。平面形状は不定形、規模は南北長1.1m、東西幅は1.3mを測る。断面形状は中央が大きく窪む逆三角形に似るが、壁面には凹凸が目立つ。最大深度は0.5mである。埋土は締まりが悪いものの、人為的に埋め戻された痕跡はない。遺構の

機能及び性格は不明である。遺物の出土は確認できておらず、成立時期も不明である。

土坑 12(図 49) 調査区南東部において検出した土坑である。平面形状は歪んだ楕円形で、最大長 2.6 m、最大幅は 1.9 m を測る。断面形状は皿形を呈するが、底面に凹凸が認められる。最大深度は 0.45 m である。埋土は近世層である黒褐色微砂混じりシルトに地山土に由来する黄褐色粘土質シルトブロックを僅かに含む。遺構の機能及び性格は不明であるが、出土遺物から民家の裏手に設けられた廃棄処理土坑の可能性が考えられる。遺構内からは、土師器皿・炮烙、瀬戸焼の壺・碗、丹波焼の甕、肥前陶器(刷毛目唐津)の碗、施釉陶器蓋、染付盃、伏見人形等が出土した(図 50 - 7 ~ 9)。概

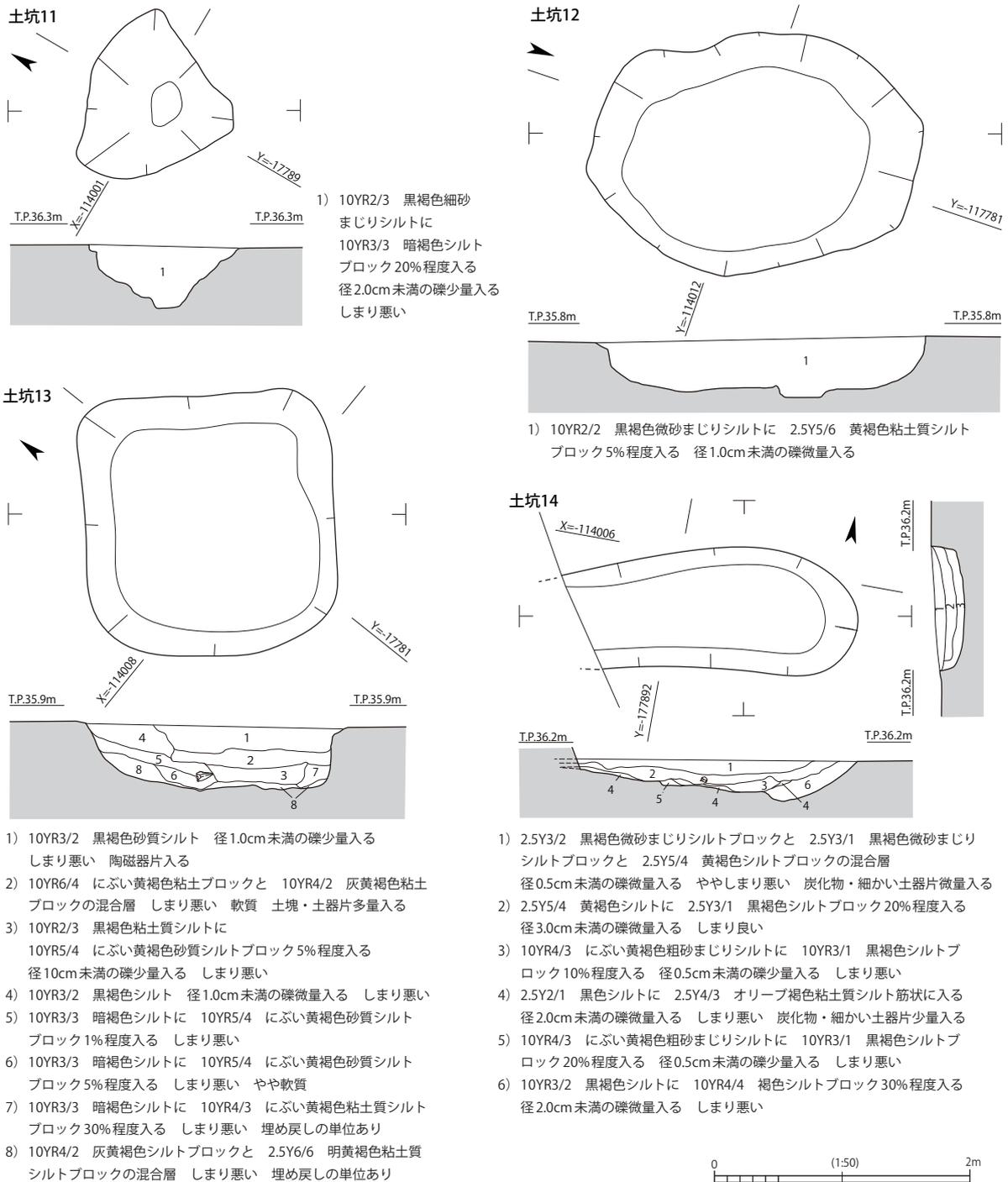


図 49 遺構平面・断面図(1)

ね近世後期の製品である。

7は、鳥形の伏見人形（土製品）である。頭部と尾、脚の一部を欠損する。体部中央には型押し粘土の継ぎ目が縦方向に残る。羽の表現は細かく精緻であるが、脚の表現は線刻にとどまる。図8も同じく伏見人形で、踊り子の袖部分であると考えられる。9は、肥前焼の急須の蓋である。上面には灰釉を塗布、下面は露胎する。摘部は粘土塊を捻って作る。18世紀以降の製品である。

土坑 13 (図 49) 調査区東辺において検出した土坑である。平面形状は一辺 2.0 m 内外の隅丸方形を呈する。最大深度は 0.5 m、底面は細かい凹凸があるものの、ほぼ平坦である。断面観察からは、一度掘り直しが行われたことがわかる。それに準じて埋土は黒褐色シルト層を主体とする新層と、暗褐色シルトを主体とする旧層に大別できる。ただし、出土遺物の年代に反映されるような時期差はない。遺構内からは、土師質土器火鉢、施釉陶器皿、肥前系施釉陶器蓋、瀬戸焼湯呑・皿、京焼系陶器筆立、染付碗、備前焼挿鉢、常滑焼甕、伏見人形、平瓦、鉄釘、銭貨「寛永通宝」、煙管、砥石等が出土した (図 50-10 ~ 24)。出土遺物の年代から、近世後期以後の遺構であることがわかる。土坑 12 と同じく、民家の廃棄処理土坑であると考えられる。

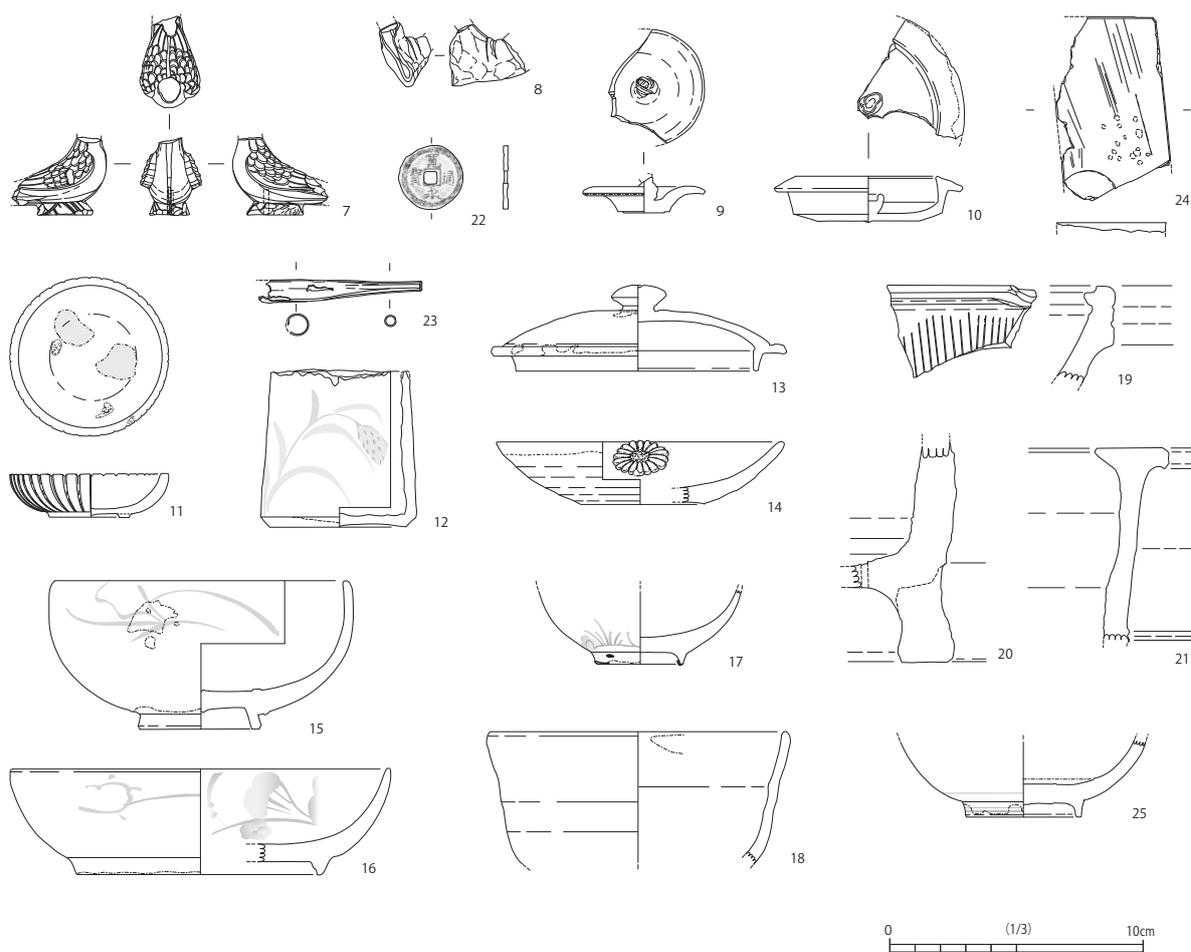


図 50 遺構出土遺物実測図

10は、信楽焼の蓋である。下面は無釉、上面は厚く施釉するため一部に釉溜が認められる。11は、施釉陶器の菊花皿である。内面には2箇所灰釉が残るもの他は剥落し、土師質の胎土が露出する。内面及び口縁端部に離れ砂が付着する。12は京焼系陶器の筆立である。鈍い橙色を呈する素地の外面に稲穂を描き、浅黄色の釉薬を塗布する。底面のみ露胎、施釉部分の一部には貫入が認められる。口縁端部は使用による欠損が目立つ。13は、瀬戸・美濃焼の蓋である。下面は露胎、上面にのみ灰釉を塗布するが、一部虫食い状の釉剥が認められる。14は、京焼系陶器の灯明皿で、体部内面に菊花の浮文が付される。見込み部に三叉トチンの痕跡が残る。内面及び外面口縁部に灰黄色の釉薬を塗布する。15は、京焼系陶器の碗である。橙色の素地外面に草木を描く。高台を含む底部外面は無釉、他には灰白色の釉を塗布する。絵付の一部に釉剥がある。見込み部には三叉トチンの痕跡が残る。16は染付の鉢で、内外面に絵付を施す。畳付のみ露胎、内面には僅かに釉泡が残る。17は染付碗の底部で、畳付に離れ砂が付着する。18は、濃色の灰釉を施した施釉陶器の碗である。全体的に貫入が認められる。内面口縁部の一部に指で拭ったような釉剥がある。肥前系か。19は、備前焼播鉢の片口付近である。播目は7条1セット、近接して密に刻む。20は、土師質土器の鉢である。底部側縁に脚部を伴う。内面及び底面はナデ、外面には指頭圧痕を残す。外面の一部に煤が付着する。21は、常滑焼の大甕である。器面に釉泡が多く認められる。22は、寛永通宝である。裏面は無文、表面の文体より新寛永（1668年以降に鑄造）であることがわかる。23は、銅製煙管の吸口である。木芯は失われ、薄い筒状部のみが残存する。24は、砥石の一部で研磨面のみが剥離したものである。研磨痕跡のほか、刀物キズが残る。粘板岩製である。

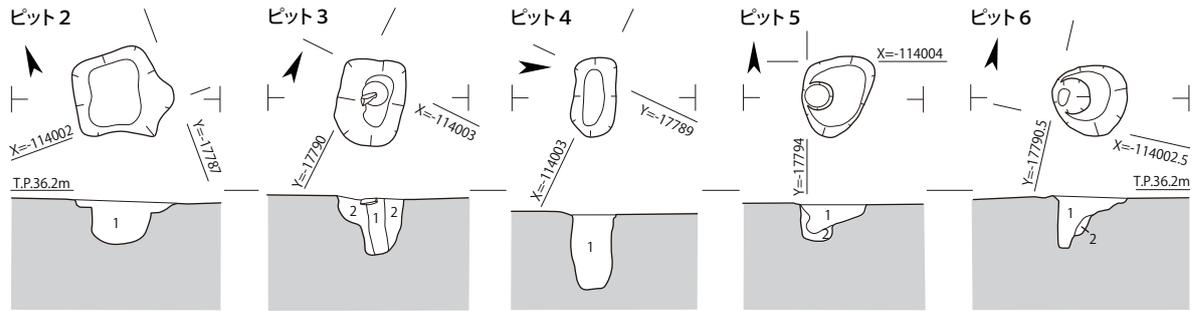
土坑 14 (図 49) 調査区北西部において検出した土坑である。平面形状は楕円形に似るが、西端が調査区外へ続くため、全体形状は不明である。検出規模は東西長 2.2 m、最大幅は 1.0 m を測る。断面形状は不定形、底面には凹凸があり、東端の一部が深く、西端部は浅い。最大深度は 0.3 m である。埋土中位には、焼土層が介在する。遺物の出土は確認できていないが、埋土の状況から近世以後の遺構である可能性が高い。耕作等に伴う焼土坑か。

土坑 16 (図 52) 調査区東辺において検出した土坑である。直径 2.2 ～ 2.3 m を測る円形土坑で、埋土の一部に漆喰を含む。中央に円形の掘り込みがあり、井戸の形状に似る。ただし、底面は湧水層に達していないため、肥溜状の施設であると判断した。埋土から常滑焼大甕の破片と平瓦、染付碗が出土した (図 50-25)。近世後期以後の民家に伴う遺構である。

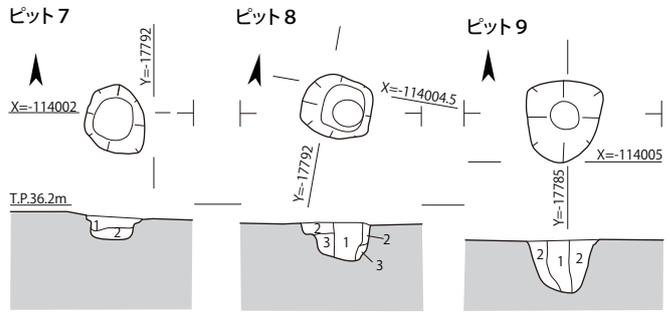
25は染付碗である。見込み部に蛇の目釉剥が残る。畳付の一部は露胎、離れ砂が付着する。17世紀の製品である。

ピット 2 ～ 7 ・ 18 ・ 21 ・ 33 ・ 43 ・ 46 ・ 47 ・ 49 埋土に近世堆積層である黒色シルトをブロック状に含む遺構群である。遺物は確認できていないが、近世層を巻き込むことから、それ以後の成立であることがわかる。概ね、調査区北半部に集中する。規模・形状は様々であるが、柱あたりをもつ遺構があることから、建物の柱穴であると推測できる。近接する遺構が切り合うため、時期差を伴う建て替えが行われたと考えられる。

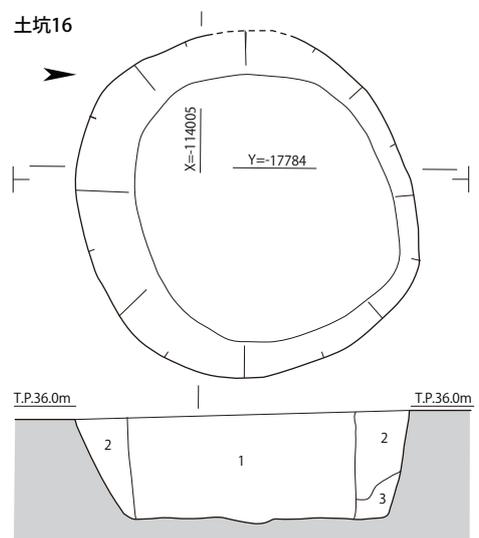
これらのピット群から建物を復原することは難しいが、概ね北東－南西方向に並列する傾向を捉



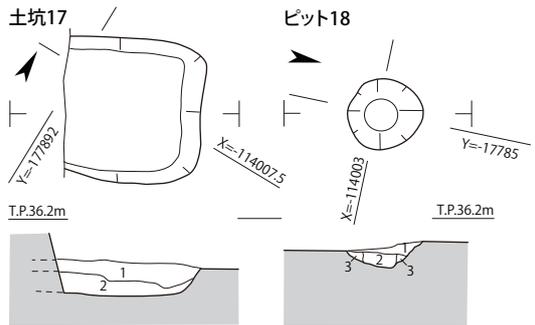
- 1) 10YR4/4 褐色シルトに 10YR3/1 黒褐色シルトブロック 20%程度入る しまり悪い
- 1) 10YR3/3 暗褐色シルト しまり悪い
- 2) 10YR3/3 暗褐色シルトブロックと 10YR4/4 褐色シルトブロックと 10YR3/1 黒褐色シルトブロックの混合層 炭化物・土器片入る しまり悪い
- 1) 10YR3/2 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック 5%程度入る 径1.0cm未満の礫微量入る しまり悪い
- 1) 10YR2/3 黒褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック 20%程度入る しまり悪い
- 2) 10YR3/4 暗褐色シルト しまり悪い
- 1) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに 10YR4/6 褐色シルトブロック 1%程度入る 径0.5cm未満の礫微量入る しまり悪い
- 2) 10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR3/1 黒褐色シルトブロック 20%程度入る しまり悪い



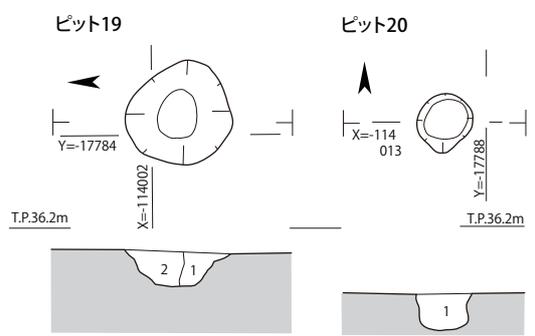
- 1) 10YR2/3 黒褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック 1%程度入る 径1.0cm未満の礫微量入る しまり悪い
- 2) 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 炭化物微量入る しまり悪い
- 1) 10YR3/4 暗褐色シルト 径0.5cm未満の礫微量入る しまり悪い
- 2) 10YR3/3 暗褐色細砂まじりシルト しまり悪い
- 3) 10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR4/4 褐色粘土質シルトブロック 30%程度入る 径0.5cm未満の礫微量入る しまり悪い
- 1) 10YR4/4 褐色シルト 径0.5cm未満の礫微量入る しまり悪い
- 2) 10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR2/1 黒色シルトブロック 10%程度入る しまり悪い



- 1) 10YR3/2 黒褐色粘土質シルトブロックの混合層 径1.0cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 2) 2.5Y5/3 黄褐色粘土質シルトブロックと 2.5Y4/1 黄灰色シルトブロックの混合層 陶磁器片入る ややしり悪い
- 3) 2.5Y5/4 黄褐色粘土質シルトブロックと 10YR3/3 暗褐色シルトブロックの混合層 ややしり良い



- 1) 10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR3/2 黒褐色シルトブロック 20%程度入る 径1.0cm未満の礫少量入る しまり悪い
- 2) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック 30%程度入る しまり悪い
- 1) 10YR2/2 黒褐色シルトと 10YR3/3 暗褐色シルトブロックの混合層 径0.5cm未満の礫微量入る ややしり良い
- 2) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 径0.5cm未満の礫微量入る しまり悪い
- 3) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 10YR4/4 褐色シルトブロック 30%程度入る 径0.5cm未満の礫微量入る しまり悪い



- 1) 10YR3/3 暗褐色シルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック 20%程度入る しまり悪い
- 2) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 径0.5cm未満の礫微量入る しまり悪い
- 1) 10YR3/4 暗褐色シルトに 10YR4/6 褐色シルトブロック 10%程度入る 径1.0cm未満の礫少量入る しまり悪い



図 51 遺構平面・断面図 (2)

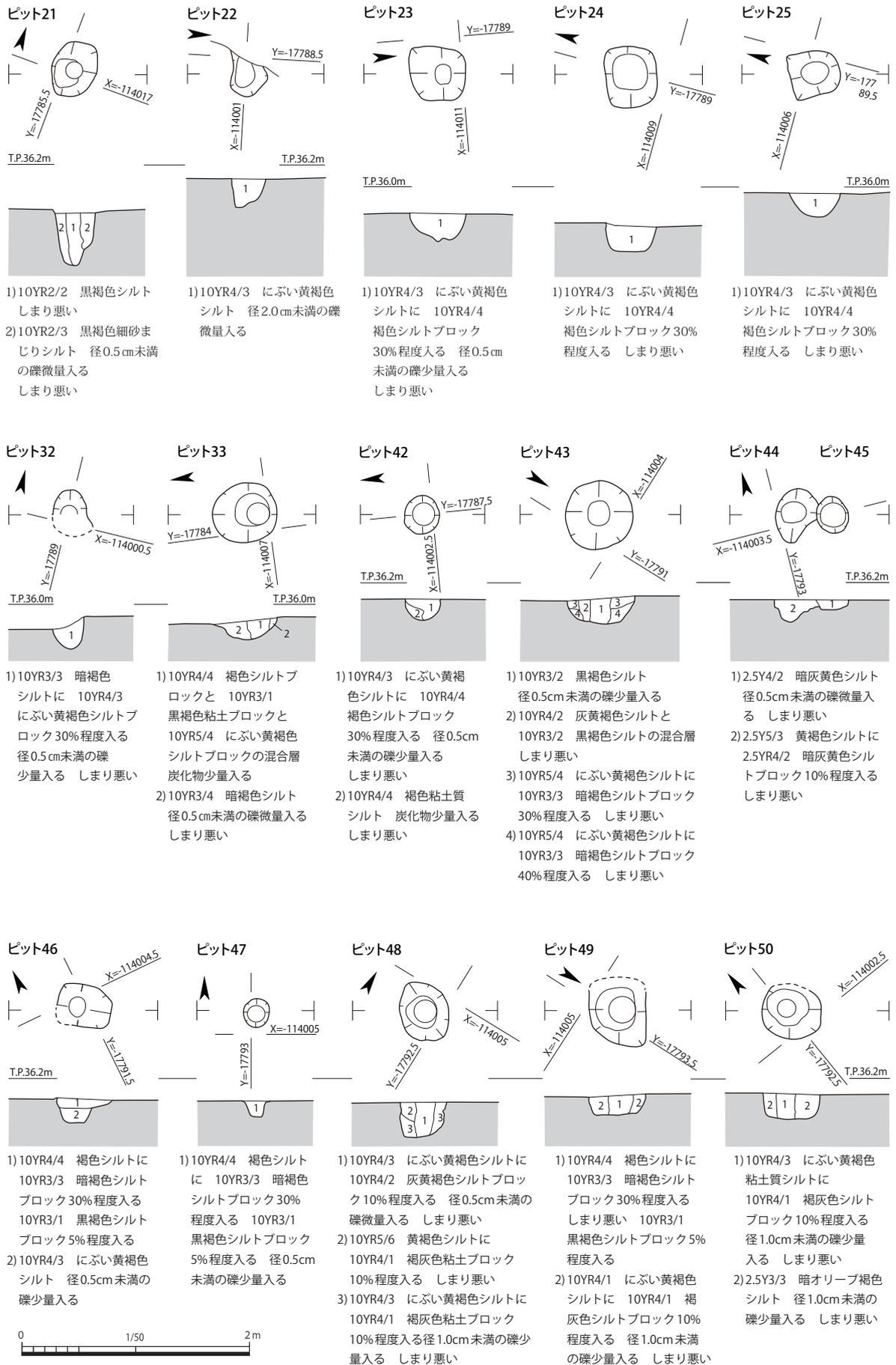


図 52 遺構平面断面図 (3)

えることができる。この方向軸は、川田道に接続する里道の主軸に合致する。

4 まとめ

以上、中臣遺跡の発掘調査成果について記述した。最後に、今回の調査成果である大溝（溝 10）の性格を考察し、まとめとしたい。

溝 10 は最大幅 2.6 m を測る大型遺構で、調査区を南北方向に貫くように検出された。既往の調査成果ではこれに連続する遺構は確認されておらず、その全体像は不明である。流水痕跡が認められないことから、給排水を目的とした水路とは考えにくい。このような遺構は、何らかの区画を示す溝として計画的に開削された可能性が考えられる。このため、当該地における古代末期の区画である条里地割を参照する。

図 53 は、大日本帝国陸地測量部作成地形図（明治 34 年）に前述した条里古図を反映させたものである。条里古図には、山科盆地から宇治川付近にいたるまでの条里地割と里ごとの名称、山地や川、主要街道、寺社の位置等が描かれている。図 53 は、山麓と平地の境界線のほか、現存する寺社の位置と街道の方向性、旧河道の位置を考慮して作図したものであるが、少なくとも今回の調査地（矢印部分）は栗栖里のほぼ中央に位置しており、条里地割のラインには相当しない。条里地割は一辺 109 m の小区画（坪）に分割されるが、その坪境ラインにも合わないようである。

また、調査区より 30 m 南へ隔てた第 70-1 次調査では、溝 10 の延長線上に調査区を設定しているが、これに類似する遺構はまったく検出されていない。このため、溝 10 は第 70-1 次調査区に至るまでのどこかで終息するか、屈曲して方向を変えらるゝと考えられる。そのいずれにしても条里地割に伴う区画溝としては考えにくい展開である。

一方、調査地周辺の調査事例を広く概観すると、複雑な地形に沿って遺構が散在する中、正方位を意識した遺構をいくつか見出すことができる。昭和 52 年度に調査地より 150 m 西へ隔てた地点で行われた第 9 次調査では、平安時代～鎌倉時代初頭の遺構面において、東西方向にのびる柵列が検出されている。また調査区より東へ 200 m 隔てた第 73 次調査では、平安時代の遺構面において東西方向の溝群が確認されている。いずれも大規模な遺構ではないが、地形に即した集落が展開された飛鳥時代までの集落とは一線を画するものとして認識できる。

第 9 次、第 73 次両調査では、鎌倉時代、室町時代と時代が下がるにつれて遺構の方位は徐々にずれていき、再び地形に即した方向軸が用いられるようになる。このため、正方位を意識した開発は、平安時代に行われた一時的な行為であったと考えられる。このことは、溝 10 が平安時代に掘削されたものの、その使用期間がごく短かったと思われる調査成果と基本的に相違しない。おそらく溝 10 の開削は、条里区画など恒久的に使用される遺構としてではなく、平安時代のある段階で一時的に行われた開発行為のひとつであったと考えられる。今回の調査ではその開削目的までを明らかにできなかったが、溝の周辺に杭列等の施設材が組まれていたと考えられることから、建物や敷地を区画する濠等であった可能性を挙げておきたい。

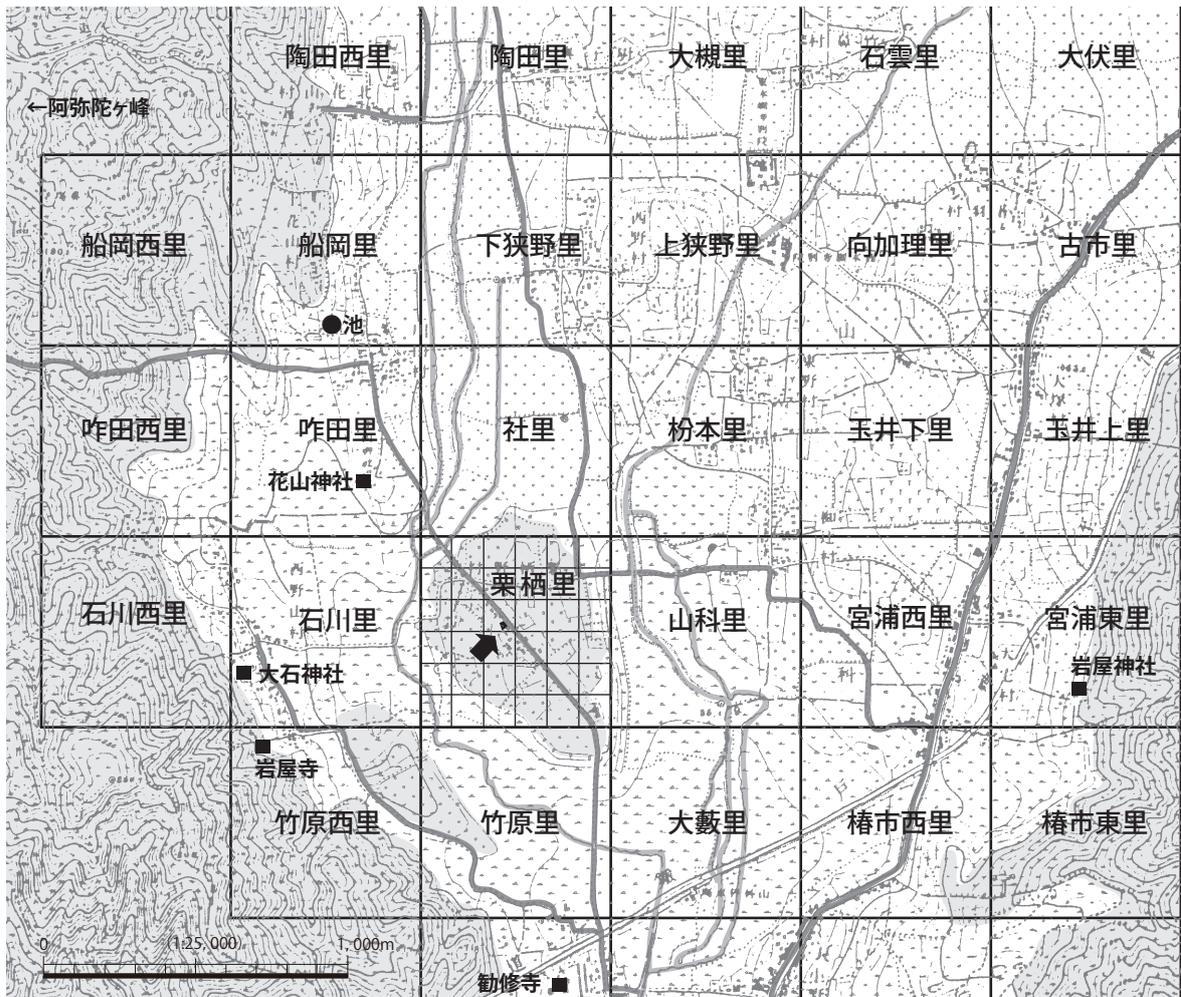


図 53 山科の条里復元図（1：25,000）

（黒須 亜希子）

引用・参考文献

- 音羽中学校育友会 1970 『山科誌 歴史編』
- 金田章裕 2003 「平安時代の山科—一条里と古道—」『掘る・読む・あるく 本願寺と山科二千年』法蔵館
- 吉川真司 2007 「近江京・平安京と山科」『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院』柳原出版
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1996 『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1997 『昭和7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2011 『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2011 『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2012 『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 京都市文化市民局文化部文化財保護課 2002 『京都市文化財ブックス第16集 遺跡から見た京都の歴史』

IV-5 上久世遺跡 No.103

1. はじめに

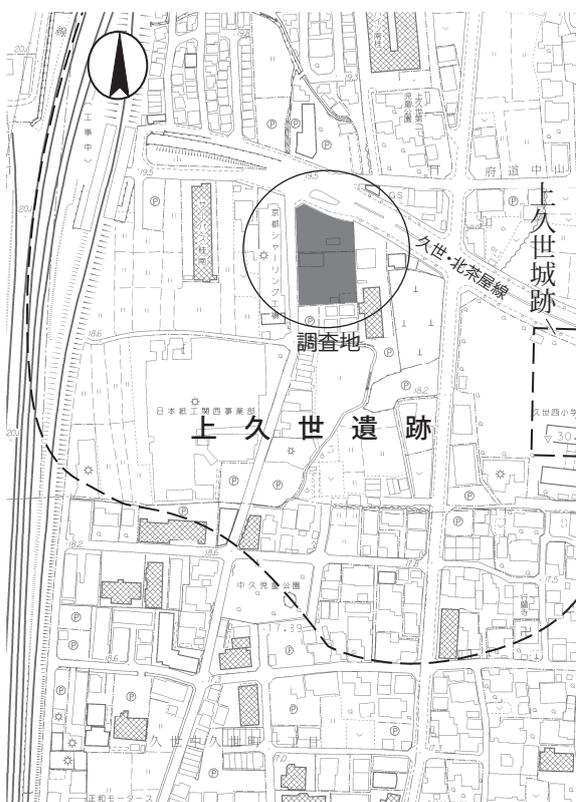


図54 調査位置図 (1 : 2,500)

本件は共同住宅新築に伴う試掘調査である。調査地は南区久世上久世町に所在し、上久世遺跡の中心部に位置する。

これまで同遺跡内では、発掘・試掘・詳細分布調査を含めると数多く行われており、その中で特筆すべき調査は6例^{1)・2)}である。弥生時代や古墳時代の竪穴建物、平安時代の建物や土壙墓などが数多く確認されている。しかし、東西道路(久世・北茶屋線)建設に伴う発掘調査の際、今回の対象地に近接する調査区のみ、溝や池状遺構が確認されており、当該地は竪穴建物が形成されている微高地に挟まれた谷筋にあたると思われる。

このため、周辺調査で確認されている遺構の広がりを確認することを主目的に調査を行った。

2. 遺構

建物予定地内に4箇所(1~4区)の調査区を設定し、調査を行った(図55)。

1区の層序は、現代盛土、耕作土、床土の下に、中近世の灰黄色粘質シルト(1)、黄褐色粘質シルト(2)、暗灰黄色粘土(3)と続き、GL-1.8mにて弥生土器を含む黄灰色細砂(4)、-1.9mで黄灰色細砂(5)の無遺物層に至る。1層上面では中近世の土坑状の遺構を確認したものの、遺物はなく詳細は不明である。2層以下、各層上面では遺構は確認できなかった。4層に遺物片が多く含まれており、堆積状況等から、流水堆積に伴い遺物が含まれていると考えられるが、明確な遺構としては確認できなかった。

2区の層序は、現代盛土、耕作土、床土の下に、灰オリーブ色粘質シルト(1)、にぶい黄色粘質シルト(2)、暗灰黄色

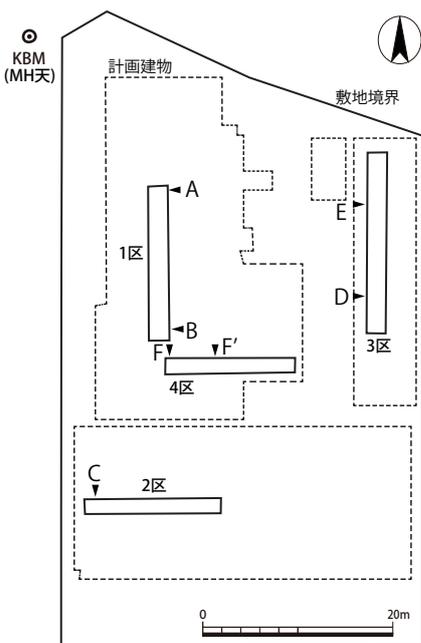


図55 調査区配置図 (1 : 800)

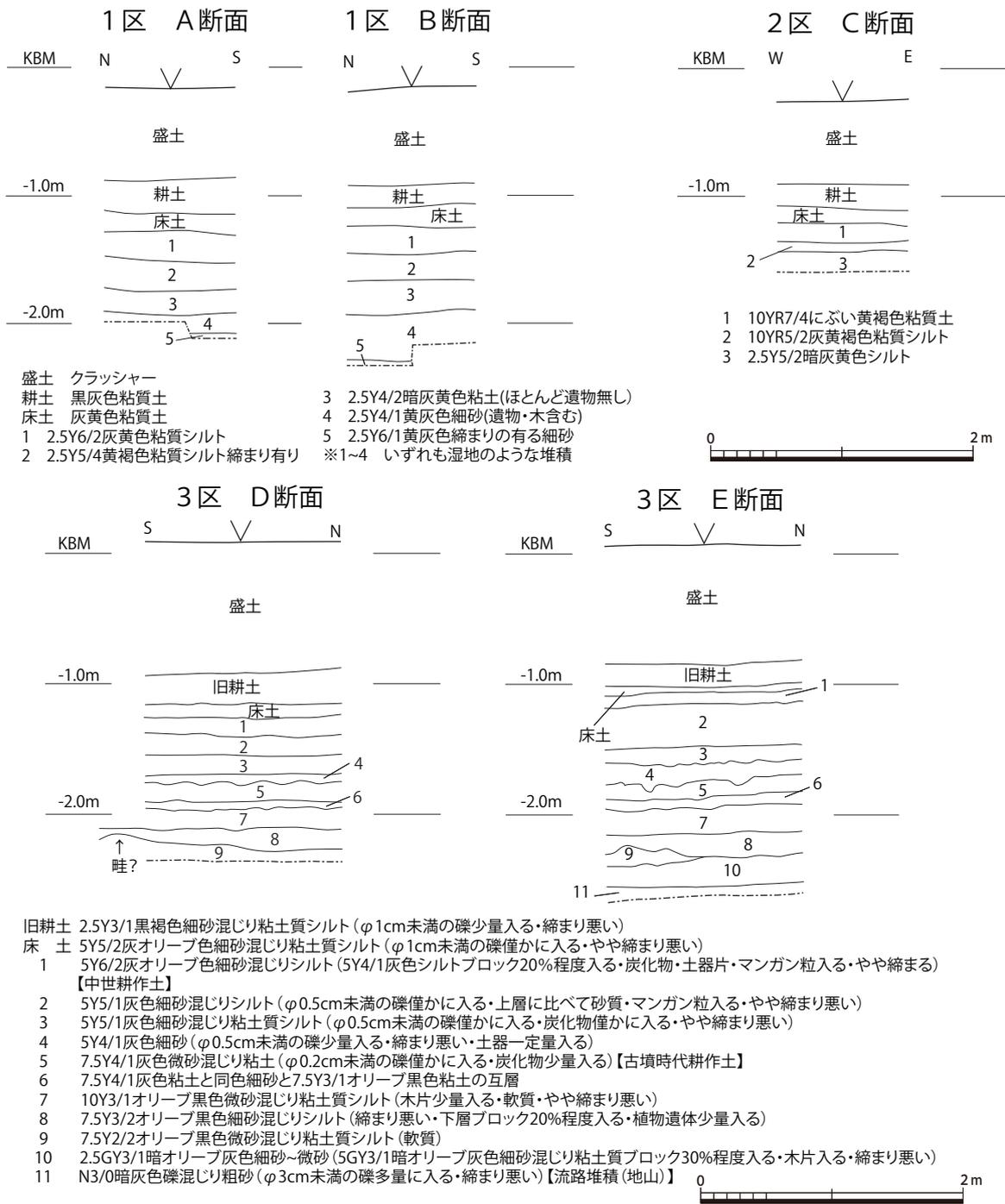


図56 1・2・3区断面図(1:50)

粘土(3)を挟み、GL-1.5mにて暗灰黄色シルト(6)の無遺物層に至る。2層上面では中近世と思われるピットと溝を確認したものの、遺物はなく詳細は不明である。2層以下、各層上面では遺構は確認できなかった。

3区の層序は、現代盛土、耕作土、床土の下に、中近世耕作土(1)や時期不明の包含層(2・3)を挟み、GL-1.8mにて水田堆積土(上:灰色細砂(4)、下:灰色微砂混じり粘土(5))、水田堆積土(上:灰色細砂(6)、下:オリブ黒色微砂混じり粘土(7))、-2.2mで弥生土器を含むオリブ黒色細砂(8~10)、-2.6mで暗灰色礫混じり粗砂(11)の地山に至る。

4区の層序は、現代盛土、耕作土、床土の下に、中近世耕作土や時期不明の包含層(2~5)を

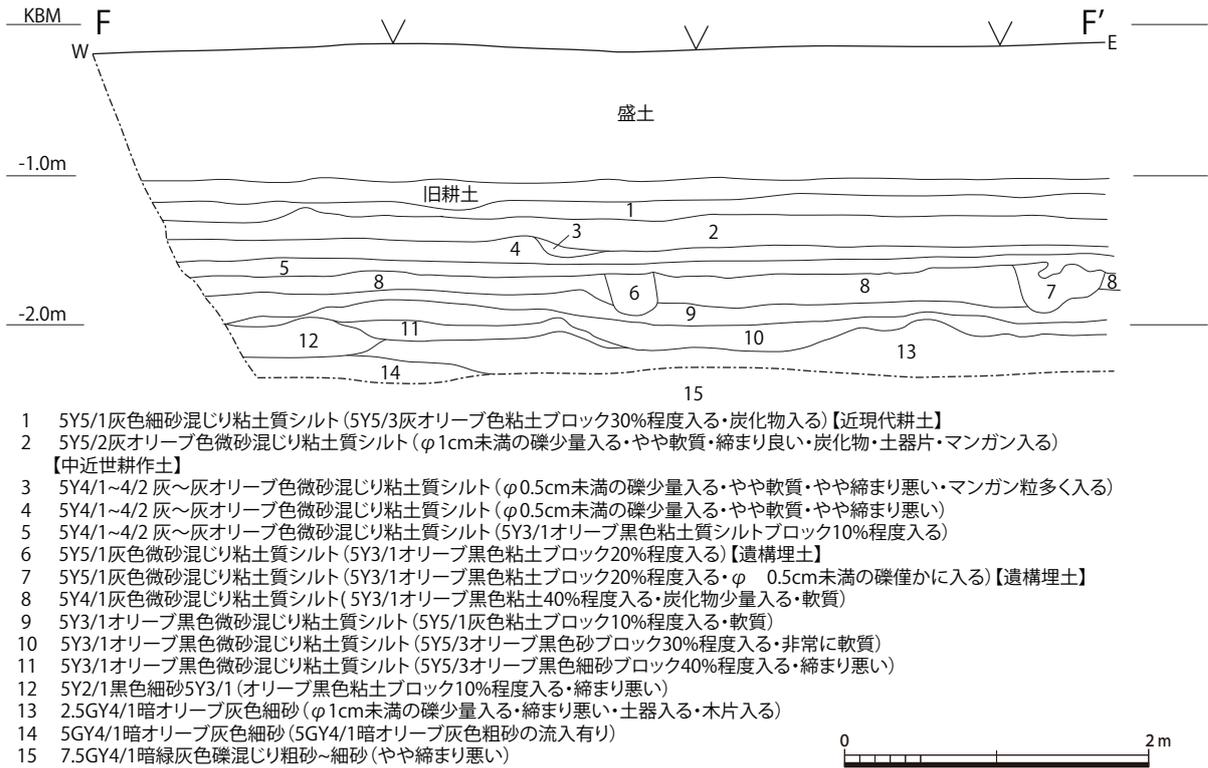


図57 4区断面図(1:50)

挟み、GL-1.5mにて灰色微砂混じり粘土(8:3区-5に対応?), -1.7mにてオリーブ黒色微砂混じり粘土(9~11:3区-7に対応), -1.9mで黒色細砂(12・13:3区-⑧~⑩に対応), -2.0mで暗オリーブ灰色(14)や暗緑灰色砂礫(15)に至る。4・8層上面では中近世と思われる溝を確認したものの、遺物はなく詳細は不明である。8層以下、各層上面では明確な遺構は確認できなかった。

3. 遺物

1~3は1区4層, 4は1区5層から出土した。

1~3は弥生土器である。1は受け口状口縁甕の口縁部である。2・3は壺の体部であり、2の外面には列点文が施される。4は土師器甕の口縁部であり、端部は丸く収める。1~4の器面はやや磨滅している。

5~7は水田堆積土と考えられる3区4層から出土した。5は土師器甕, 6は土師器壺の口縁部, 7は弥生土器蓋である。

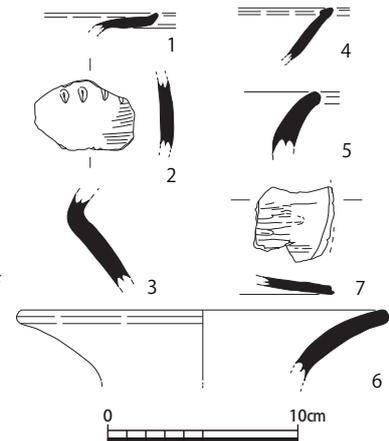


図58 出土遺物実測図(1:4)

4. まとめ

今回の調査では、3区で弥生時代もしくは古墳時代の水田と考えられる土層、その下位で弥生土器片を含む流路を確認した。4区では水田堆積層と考えられる土層を確認したものの、明確ではなく、また1・2区では湿地や流路などの水成堆積土を確認した。このことから、対象地は当初流路であったが、部分的に、弥生時代や古墳時代の近隣集落の生産域として活用され、中近世を通し

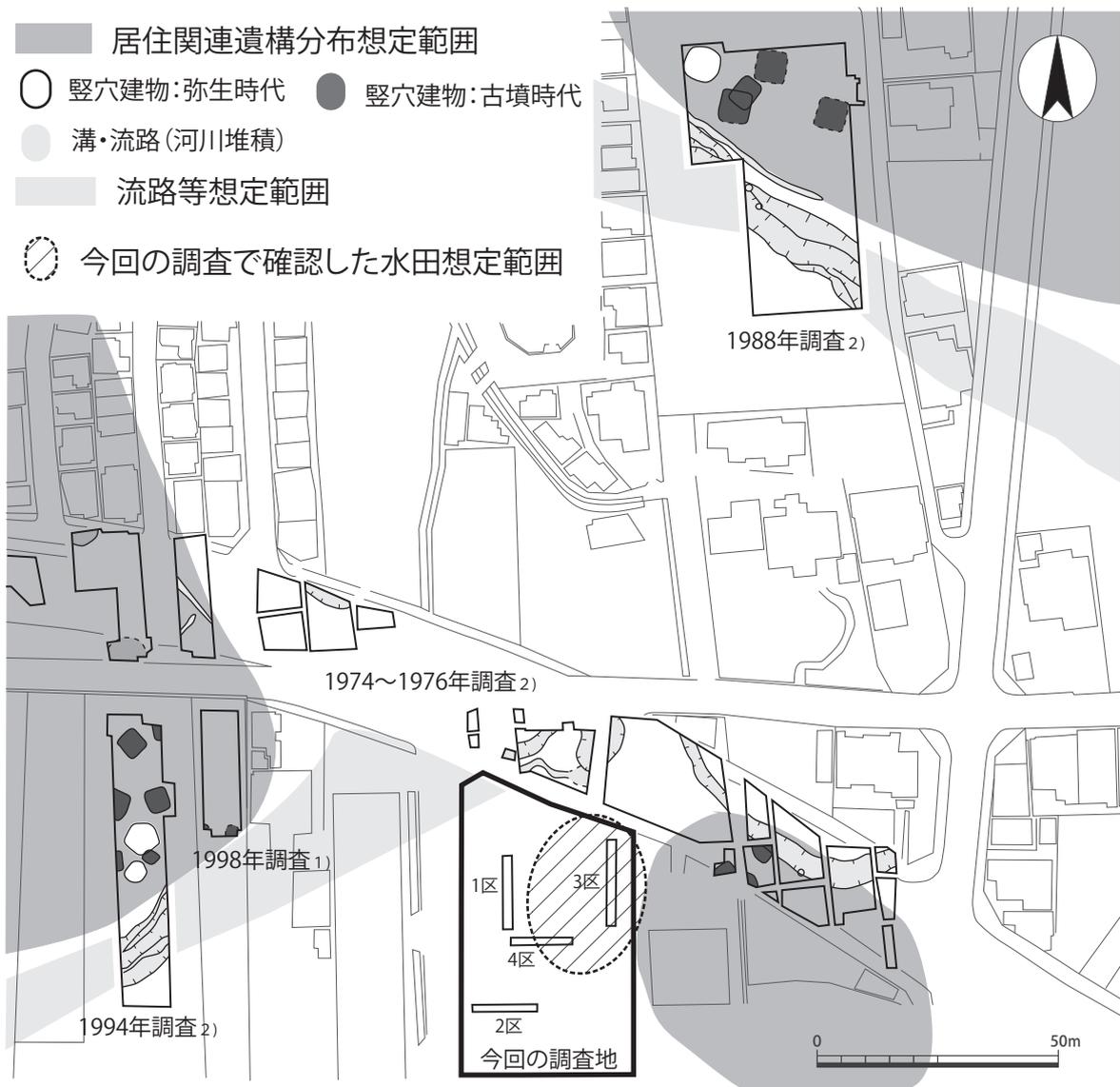


図59 近隣調査成果の模式図と今回の調査地（1：1500）

て、昭和初期まで耕作地として利用されていたと考えられる。

周辺調査成果（図59）を含めると、既存調査で確認されている対象地の西、北東、東の微高地上に展開していた遺構は今回の対象地までは及ばず、当初想定通り、谷筋にあたるということを追認した。また、この谷筋の一部には水田が営まれていたことを新たに確認した。なお今回確認した水田はこれまでの遺構の広がりから勘案すると、対象地の東に位置する微高地上に営まれた居住域に伴う可能性が高いと考えられる。これまで上久世遺跡内では居住関連遺構が主に確認されていたが、これらに伴う生産域を確認できたことは大きな成果であるといえる。（奥井 智子）

註

- 1) 京都市文化市民局 2007「2 上久世遺跡」『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』
- 2) 六勝寺研究会 1976『上久世遺跡発掘調査報告』,
 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996「上久世遺跡」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』,
 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1991「上久世遺跡」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』

IV -6 鳥羽離宮跡 No. 109

1 調査経過 (図 60・61)

調査地は、市営地下鉄竹田駅の南西に広がる住宅地内に位置しており、鳥羽離宮跡の東辺部にあたる。当該地において共同住宅新築工事が計画されたため、6月19日に試掘調査を実施した。

鳥羽離宮は、応徳3年(1086)に藤原季綱が白河天皇に鳥羽山荘を献上し、退位後の別業として鳥羽殿(南殿)を造営したことがはじまりとされる。その範囲は、城南宮を中心とした東西約1.3km、南北約1.1kmに及ぶと考えられており、現在の伏見区竹田・中島地区一带に相当する。

『扶桑略記』応徳3年10月条によると、離宮には南北8町(約860m)、東西6町(約650m)を測る園池が設けられ、その中に人工島が築かれたという。舟を浮かべて風流を極めたとする記述からは、当時の王朝社会の豪奢とともに、広大な離宮の規模を窺うことができる。

これまでの発掘調査成果より、離宮の園池は実際に東西900m、南北500m以上の規模をもっていたこと、池内には馬場殿を備える島(現在の城南宮)があり、池のほわりには南殿や田中殿、金剛心院などの建物が存在したことが明らかとされている。ただし、離宮の東辺部は旧鴨川の氾濫原に近いため、景観復原が困難であるとの認識が示されている。部分的に園池に伴うとみられる礫敷きや濠跡の報告もあるが、離宮存続時の遺構の発見は点的であり、面として捉えきれてはいない。

このため今回の調査では、離宮存続時の遺構面の広がりを確認することを目的とした。



図 60 調査位置図 (1 : 5,000)



図 61 調査区配置図 (1 : 400)

2 層序と遺構 (図 62)

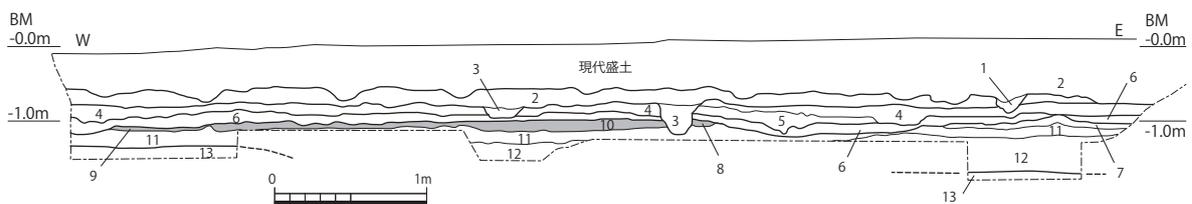
調査区は、敷地の北半部に存在する埋設管（ガス管）を避け、南半部に設定した。

調査の結果、GL-0.6 mまで現代盛土、-0.9 ~ 1.0 mまで近世包含層（18 世紀）を確認し（4・5 層）、その直下に水田耕作土と目される灰色微砂混じり粘土質シルト（6 層）を調査区全域において検出した。その下には -1.2 mまで土器を多量に含む中世後期包含層（14 ~ 15 世紀）があり（9・10 層）、さらに -1.6 mまでオリーブ黒色微砂混じり粘土質シルトが存在する（11・12 層）。これを除去した段階で、灰色粗砂を主体とする流路堆積（13 層）を確認した。この層はラミナを伴う流水堆積で細かい円礫を含んでおり、西から東へ向かって徐々に下がる様相にある。層内からは激しい湧水が認められた。

遺構検出は、中世後期の水田耕作土である 6 層の上面と、中世包含層である 10 層の除去面で試みたが、ともに足跡（ヒト）を検出したのみであり、これ以外の明確な遺構は確認できなかった。ただし、11・12 層は暗色化が顕著な粘土質シルトであること、また攪拌痕跡があり、炭化物や細かい土器片が含まれることから、中世後期に形成された水田耕作土である可能性が高い。すなわち当該地点では、中世後期以降は水田が営まれていたと考えることができる。またそれ以前には大規模な流路が通っていたと推測されることから、今回の調査では鳥羽離宮が営まれた平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺構面を確認することはできなかった。

3 遺 物 (図 63)

遺物は包含層より出土した。土器は総じて残存状態が良く、破片も大きい。1～6 はすべて土師器皿で、1 は図 62 - 9 層から、2～6 は図 62 - 11 層より出土した。1 は丸みのある器壁をもつ小型品で、口縁外面は 1 段ナデ、底部内面にはタテ方向のナデを施す。13 世紀の製品である。2・3 はへそ皿で、底部中央を盛り上げる。2 はナデにより口縁部を肥厚させる。3 は口縁端部内面に強いヨコナデを施すため、受口状に作られている。口縁端部には煤が付着する。2・3 ともに完形



- | | |
|--|--|
| 1) 5Y3/2 オリーブ黒色 微砂混じりシルト 炭化物少量入る しまり悪い | 8) 5Y3/1 オリーブ黒色 微砂混じり粘土質シルト |
| 2) 5Y3/2 オリーブ黒色 微砂混じり粘土質シルト | 径 2cm 未満の礫微量含む 土器・炭化物少量入る しまり良い |
| 径 2cm 未満の礫微量含む 土器片・植物遺体少量入る しまり悪い | 9) 5Y3/1 黒褐色粗砂混じりシルト 径 2cm 未満の礫少量含む |
| 3) 5Y4/2 灰色 粗砂混じり粘土質シルト 下位に竹製樋入る | 植物遺体・炭化物・土器片多量入る しまり悪い (15 世紀) |
| しまり悪い | 10) 2.5Y3/2 黒褐色 粗砂混じり粘土質シルト |
| 4) 2.5Y4/1 黄灰色 細砂混じり粘土質シルト | 植物遺体・土器片・炭化物多量入る (14 世紀) |
| 径 2cm 未満の礫少量入る 炭化物・染付片入る しまり悪い | 11) 5Y3/1 オリーブ黒色 微砂混じり粘土質シルト |
| 5) 5Y4/1 灰色 粗砂混じり粘土質シルトと | 径 1cm 未満の礫少量含む 炭化物・土器片少量入る |
| 10YR3/4 暗褐色 粗砂ブロックの混合層 下位に踏みあり | (14 世紀～15 世紀初頭) |
| 6) 5Y4/1 灰色 微砂混じり粘土質シルト | 12) 5Y3/1 オリーブ黒色 微砂混じり粘土質シルト しまり良い |
| 木片・土器・炭化物少量入る 軟質 (15 世紀 水田耕土) | 水田耕土 (14 世紀～15 世紀) |
| 7) 5Y3/1 黒褐色粗砂混じりシルト | 13) 7.5Y4/1 灰色 粗砂 径 2cm 未満の礫少量含む 湧水著しい |

図 62 調査区北壁断面図 (1 : 50)

で出土した。4は平たい底部と角度をもって立ち上がる器壁をもつ。口縁部外面には強い一段ナデを施す。14世紀の製品である。5はやや深みのある皿で、わずかであるが器壁内面に煤が付着する。15世紀の製品である。6は器高が低く、口縁部が外方に大きく開く。15世紀の製品である。

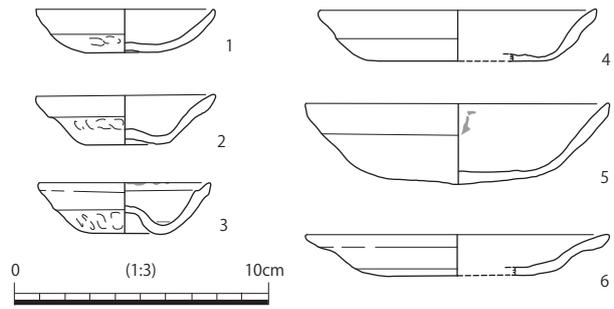


図 63 出土遺物実測図

4 まとめ

以上、鳥羽離宮跡の試掘調査成果を述べた。ここでは、今回の調査成果のほか、既往の成果を含めて整理し、鳥羽離宮跡東辺地域の環境復原をおこないたい。

図 64 には既往調査の位置と、地点ごとの柱状断面模式図を示した。このうち、鳥羽離宮が営まれた平安時代後期～鎌倉時代初頭の包含層が確認されているのは、③地点と⑥地点である。一見、点的な分布に見えるが、他の地点ではそれにかわる層序位置に中世包含層が存在する。つまり、③・⑥地点の平安時代後期～鎌倉時代初頭包含層は、中世の攪拌を免れた結果、残存するものと考えられる。特に、②・⑤地点の中世包含層には平安時代後期～鎌倉時代の遺物が一定以上含まれており、この点が理解される。すなわち、③・⑥地点より西側では、鳥羽離宮造営時の人的関与が高いと見ることができる。

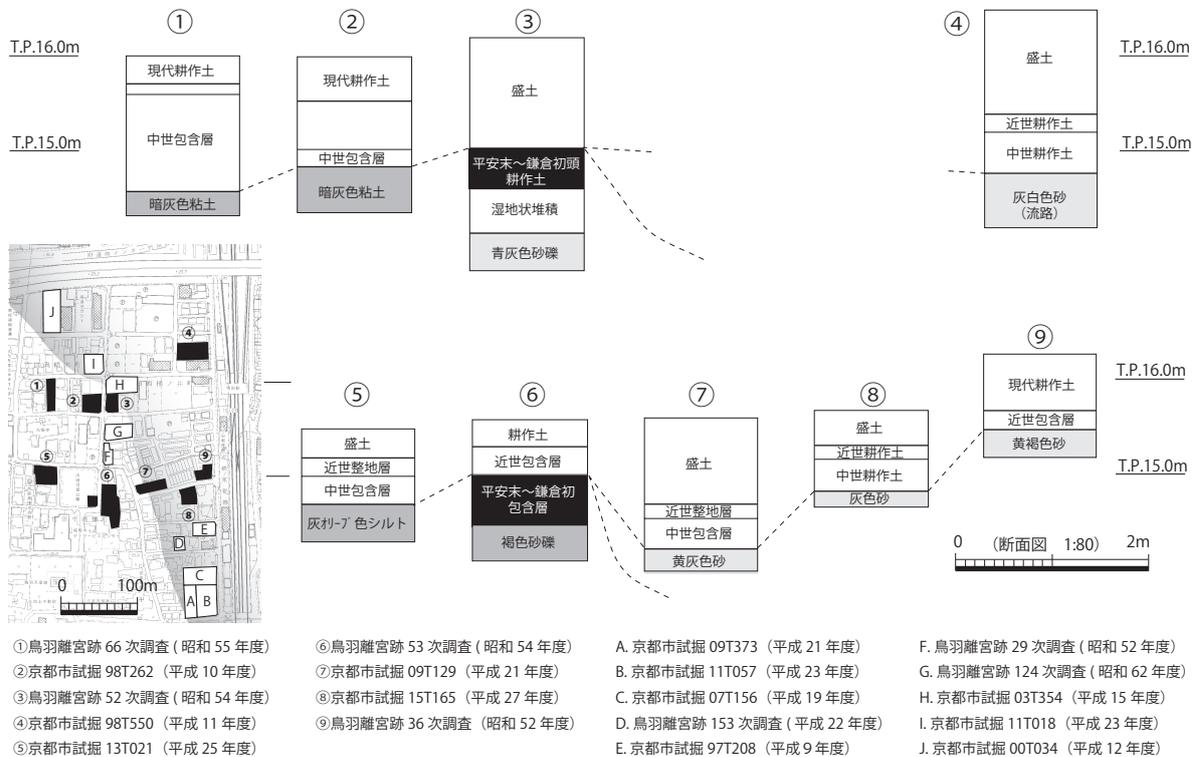


図 64 鳥羽離宮跡東辺部における各地点の柱状断面模式図

一方、③・⑥地点より東では、平安時代に遡る遺物の出土が寡少であり、中世以後の遺物が優勢である。また、中世包含層の直下には灰色粗砂～細砂を主体とする流水堆積が存在するなど、以西とは異なる様相を見せる。この砂層は、旧鴨川がもたらした川砂と考えられ、川の本体がある東へ近づくとつれて、その厚みを増していく。砂層の堆積範囲は図 64 平面図（アミカケ範囲）のとおりであり、当時の鴨川が調査地付近を北西から南東へ向かって流れていたことを示している。また、東へ向かって徐々に側方移動を重ねたものと推測される。

ただし、旧鴨川の側方移動と土壌の安定化については、地点によって大きな時期差がある。より下流に近い B・C 地点では、川砂の上で平安～鎌倉時代の礫敷きが検出されており、少なくとも鳥羽離宮の造営期にはすでに陸地化が進んでいたと考えられる。その一方、すぐ上流にあたる⑧地点（今回の調査地）では、川砂の上における耕土の形成が室町時代（14～15 世紀初頭）に下がる等、開発に遅れが生じている。つまり、旧鴨川の水流通は実際には細かく蛇行し、陸地化には時間差があったことが推測される。

かつて鳥羽離宮跡の東辺部は、旧鴨川の氾濫原に近いから、漠然と遺構の密度は希薄であると捉えられてきた。しかし、累積する発掘調査や試掘調査成果により、平安時代後期から室町時代に至るまでの流域範囲の推定は可能となりつつある。この知見は、鳥羽離宮の周辺部の土地利用を復原する上で、ひとつの視点になると考えられる。

（黒須 亜希子）

引用・参考文献

- 京都市文化市民局文化財保護課 2002 『京都市文化財ブックス第 16 集 遺跡から見た京都の歴史』
- 京都市文化市民局 1998 京都市内遺跡試掘調査概報 平成 9 年度
- 京都市文化市民局 1999 京都市内遺跡試掘調査概報 平成 10 年度
- 京都市文化市民局 2000 京都市内遺跡試掘調査概報 平成 11 年度
- 京都市文化市民局 2001 京都市内遺跡試掘調査概報 平成 12 年度
- 京都市文化市民局 2003 京都市内遺跡試掘調査概報 平成 15 年度
- 京都市文化市民局 2008 京都市内遺跡試掘調査報告 平成 19 年度
- 京都市文化市民局 2010 京都市内遺跡試掘調査報告 平成 21 年度
- 京都市文化市民局 2012 京都市内遺跡試掘調査報告 平成 23 年度
- 京都市文化市民局 2014 京都市内遺跡試掘調査報告 平成 25 年度
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2011 『昭和 52 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2011 『昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2012 『昭和 54 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』

IV-7 長岡京左京二条三坊八町・九町跡，鶏冠井遺跡 平成26年度No.119

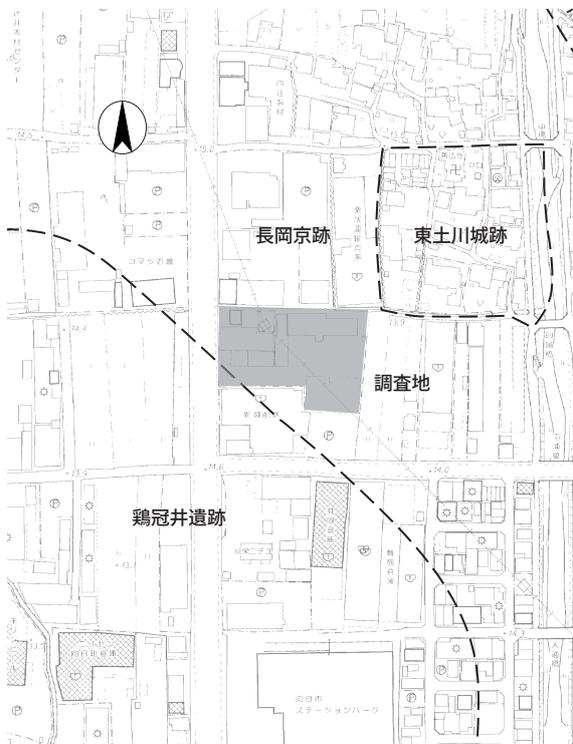


図65 調査位置図（1：5,000）

1. はじめに

調査地は南区久世東土川町地内であり，長岡京左京二条三坊八町・九町に比定されるとともに，鶏冠井遺跡に該当している。当地において，店舗建設が計画されたため，平成26年12月10日・11日に試掘調査を実施した。調査面積は102㎡である。保存協議が平成27年中まで続いたため，今年度の報告となる。

2. 層序と遺構（図67）

調査地内に一条大路南築地心の存在が推定されたため，その検出を目的に調査区を設定した。1区・2区は一条大路に直行するように南北方向に設定し，3区・4区は東西方向に設定した。基本層序は層厚1.2～1.3mの厚い現代盛土下で旧耕土，床土を検出し，GL-1.45m以下で基盤層を検出した。長岡京跡に関連する遺構はこの基盤層上面で検

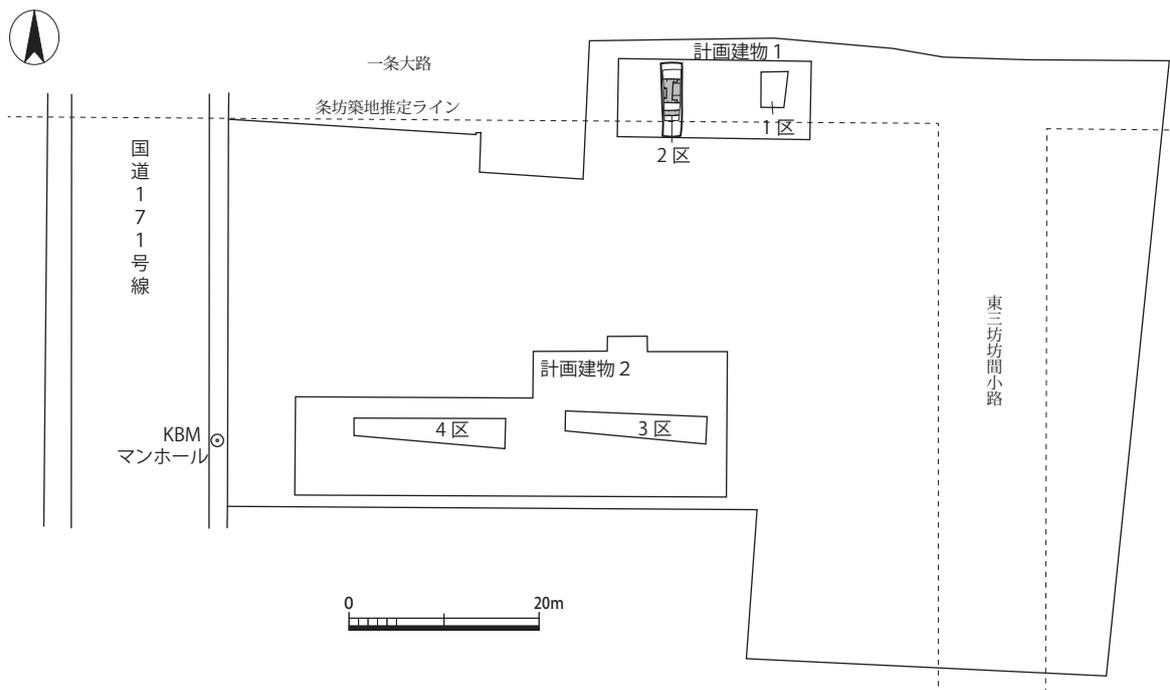


図66 調査区配置図（1：800）

出できる。

1区は大部分が攪乱を受けていたが、西壁の断面で溝状遺構の北肩を確認した(溝1)。ここから須恵器などが出土したため、溝の平面的な検出を目的に2区を設定した。ここでは北半で幅約2.5m、深さ約0.6mの溝を検出し(溝1)、南半で幅約0.55m、深さ約0.25mのやや細い溝を検出した(溝2)。溝1からは土器のほか、木製品や昆虫の羽などの有機質遺物が出土した。前者は1区で検出した溝の延長で、一条大路南側溝に比定できるが、溝2の性格は不明であり、遺物も出土していないため、時期不明と言わざるを得ない。築地に伴う雨落ち溝などの可能性がある。3区・4区は基本層序は1区・2区と同じだが、GL-1.9mまで掘削しても遺構・遺物ともに検出できず、耕作に伴う湿気抜きの溝を検出したにとどまる。

3. 遺物 (図68・69)

溝1から土器や瓦罫、有機物などが出土している。

1は土師器皿で口径15.6cm、ほぼ完形である。内面から外面上半はヨコナデ、外面下半から底部はヘラケズリで調整する。口縁端部は玉縁状に肥厚する。2は須恵器皿で口径15.8cm、底部は大部分が残存しているが、体部・口縁部の残存率は低く、全体では7割弱程度が残存している。内面お

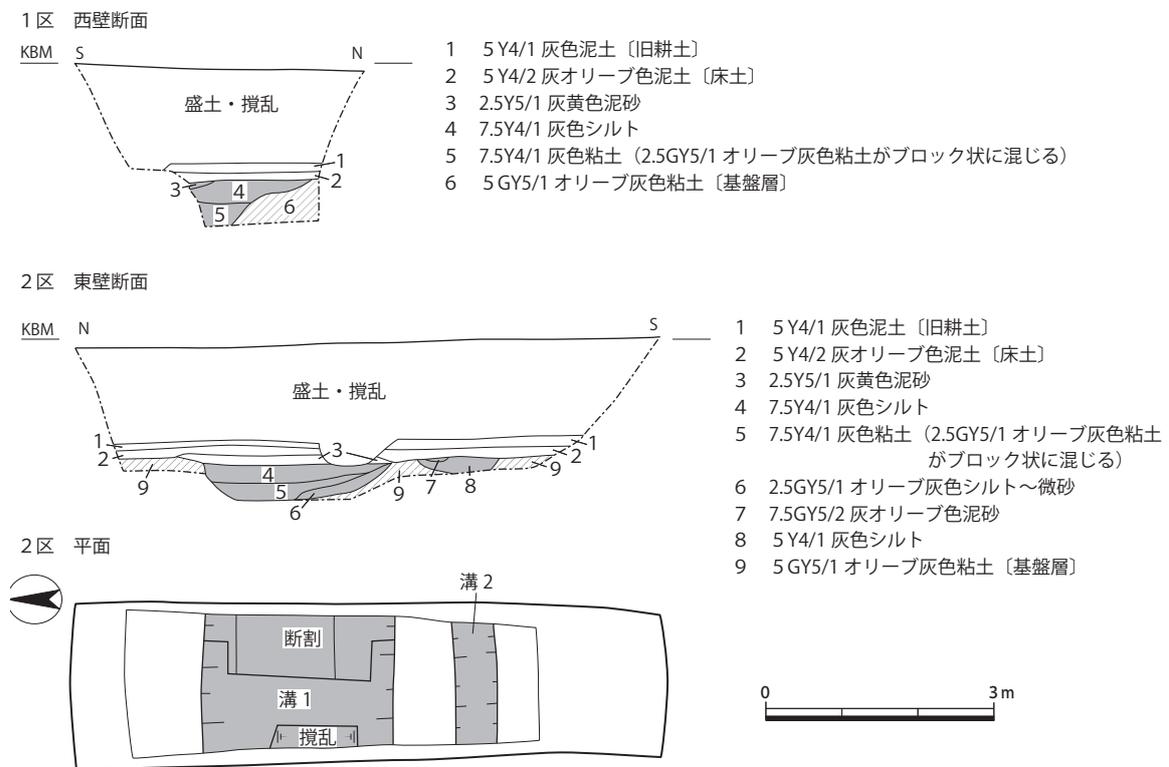


図67 1区断面図, 2区平・断面図 (1:100)

よび外面は回転ナデ調整，外面底部は回転ヘラ切りである。ともに京都I期中段階，8世紀末ごろに属する。3は磚であり，厚さ6.5～7.2cm，幅はおおよそ15.5cmである。4は丸瓦で9割程度残存する。内面には布目が残る。ほかに木片や昆虫の羽などの有機質遺物も出土している。

4. まとめ

宅地内では遺物・遺構ともに検出できず，土地利用を復元することはできない。しかし，溝1から磚が出土していることが注目される。溝1は一条大路南側溝に比定できるため，出土した遺物は南側の宅地である左京二条三坊九町もしくは南築地で用いたものである可能性が高い。磚が出土する遺跡は寺院などに限られ，左京二条三坊九町にその種の施設があった可能性もある。

なお，遺跡は設計変更の結果，地中保存されている。

(新田 和央)

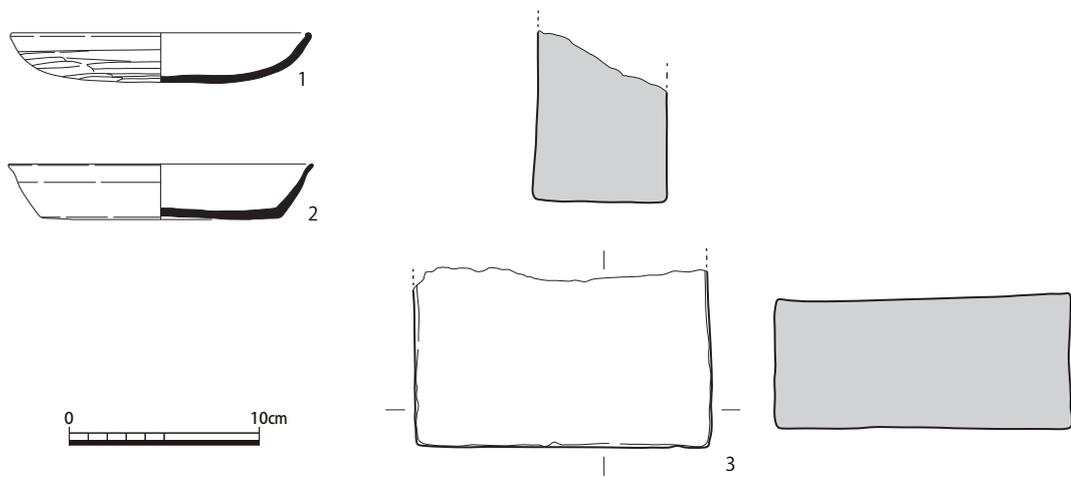


図68 出土遺物実測図1 (1:4)

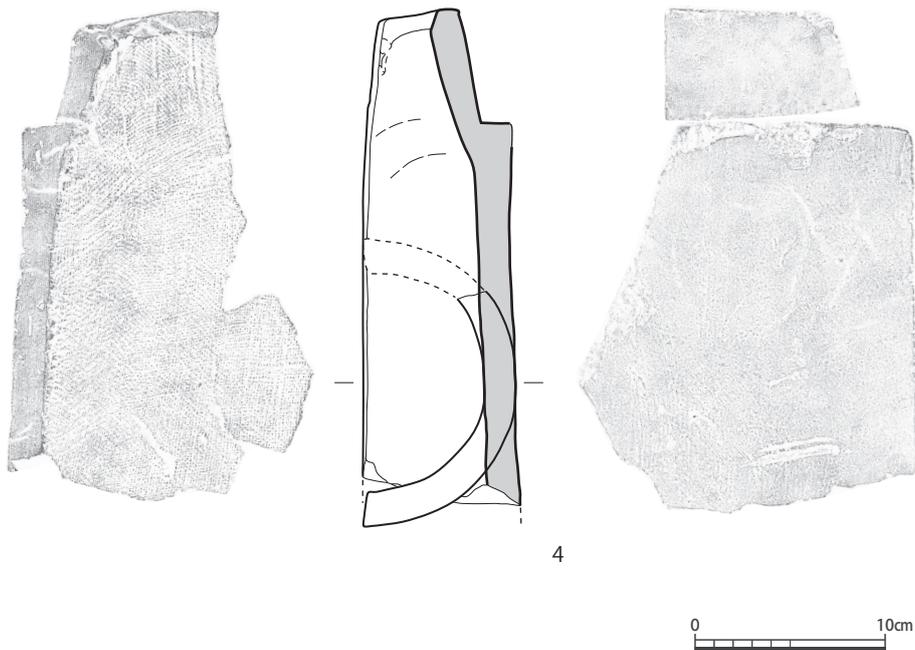


図69 出土遺物実測図2 (1:4)

IV-8 長岡京左京北辺二坊十四町跡 No. 111

1. はじめに

調査地は、JR東海道新幹線の高架の西側、寺戸川（西羽東師川）の北側に位置する耕作地（図70）である。当該地は、延暦3年（784）に桓武天皇が遷都した長岡京跡の北端部に位置していることから、宅地造成に先立ち試掘調査を実施することになった。

周辺の調査事例として、平成10年9月7日に京都市埋蔵文化財調査センターが西側隣接地で試掘調査を実施している¹⁾。この調査では、湿地状堆積や氾濫堆積などの河川由来の堆積を確認したのみであり、長岡京期の遺構を検出することはできていない。

今回の試掘調査は、西側で認められた河川由来の堆積の東側への展開と、長岡京期の遺構の有無を確認する目的で平成27年4月28日に実施した。調査は、造成地の専用道路部分に南北約30mの調査区を設定して行った。調査面積は97㎡である。

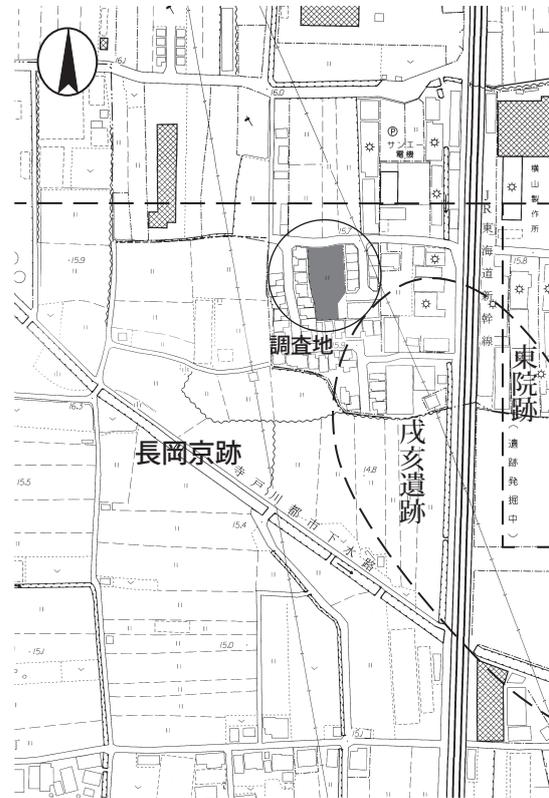


図70 調査位置図（1：5,000）

2. 層序

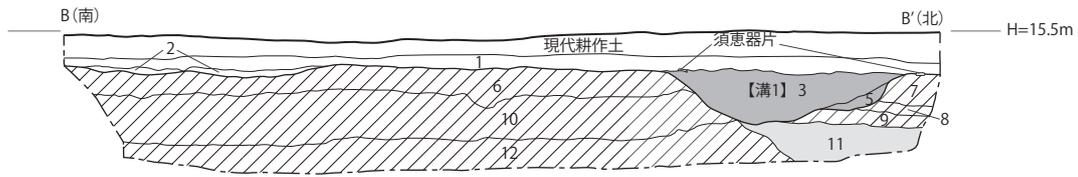
調査区の基本層序（図71・72）は、標高約15.5mで耕作土、15.35mで黄灰色微砂混じり泥砂の床土、15.2mで灰オリーブ色微砂混じり砂泥の基盤層となる。遺構は全てこの基盤層上面で検出した。基盤層を構成する地層は、河川由来の堆積が継続していたことを示しており、標高約14.8mの灰オリーブ色微砂混じりシルト層において、北東から南東に向かう細い流路跡を確認した。この流路跡には遺物は含まれておらず、人類が当該地で生活する以前のものとする。

なお、調査区北端から約11.7m以南で湿地状堆積が確認でき、南に向かって徐々に厚く堆積していく。

3. 遺構

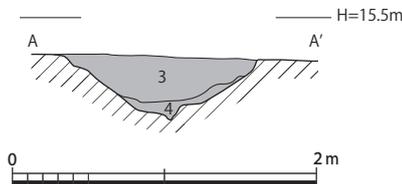
今回の調査では大型の溝跡の他、柱穴、土抗等11基の遺構を検出した（図73）。これらの遺構から時期の確定が可能な出土遺物はほとんどなく、切り合い関係から前後の状況を判断すると、溝1

調査区北西拡張部分西壁断面

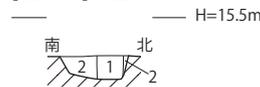


- 1) 2.5Y5/1 黄灰色微砂混じり泥砂 (2.5Y5/6 黄褐色粘土ブロック混じる, マンガン粒, 炭化物入る, やや軟質) 【床土】
- 2) 2.5Y5/1 黄灰色砂混じり泥砂 (2.5Y4/1 黄褐色粘土質シルトブロック混じる, マンガン粒, 炭化物入る, やや軟質)
- 3) 5Y4/2 灰オリーブ色微砂混じり泥砂 (5Y6/3 オリーブ黄色粘土ブロック混じる, 土器片, φ0.5cm未満の礫, 炭化物, マンガン粒少量含む)
- 4) 5Y4/2 灰オリーブ色微砂混じり泥砂 (土器片, 炭化物入, 地山ブロック混じる, しまり悪い)
- 5) 5Y5/2 灰オリーブ色細砂混じり泥砂 (5Y5/1 灰色粘土ブロック混じる, φ0.3cm未満の礫, マンガン粒僅かに入る, やや軟質)
- 6) 5Y5/3 灰オリーブ色微砂混じり砂泥 (5Y5/1 灰色粘土ブロック混じる, マンガン粒少量入る, やや軟質)
- 7) 5Y5/2 灰オリーブ色微砂混じり砂泥 (5Y5/1 灰色粘土ブロック混じる, φ0.5cm未満の礫僅かに入る, マンガン粒少々入る, やや軟質)
- 8) 5Y5/2 灰オリーブ色細砂混じりシルト (5Y4/1 灰色粘土ブロック少量混じる, φ0.3cm未満の礫僅かに入る, 軟質)
- 9) 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂混じりシルト (5Y4/1 灰色粘土ブロック少量混じる, φ1cm未満の礫僅かに入る, 軟質)
- 10) 5Y5/2 灰オリーブ色微砂混じりシルト (5Y4/1 灰色粘土ブロック少量混じる, 鉄分沈着, マンガン多量に入る, やや軟質)
- 11) 7.5Y4/2 灰オリーブ色細砂～粗砂 (φ1cm未満の礫入る, しまり悪い) 【旧流路埋土】
- 12) 5Y5/3 灰オリーブ色微砂混じりシルト (φ0.5cm未満の礫少量, マンガン粒入る, 鉄分沈着, 非常に軟質)

【溝1】断面



【柱穴2】断面



- 1) 10YR6/1 褐灰色泥砂 (10YR7/6 明黄褐色砂泥をブロック状に含む) 【柱当り】
- 2) 10YR7/1 灰白色砂泥【掘形埋土】

図71 調査区断面図 (1:50)

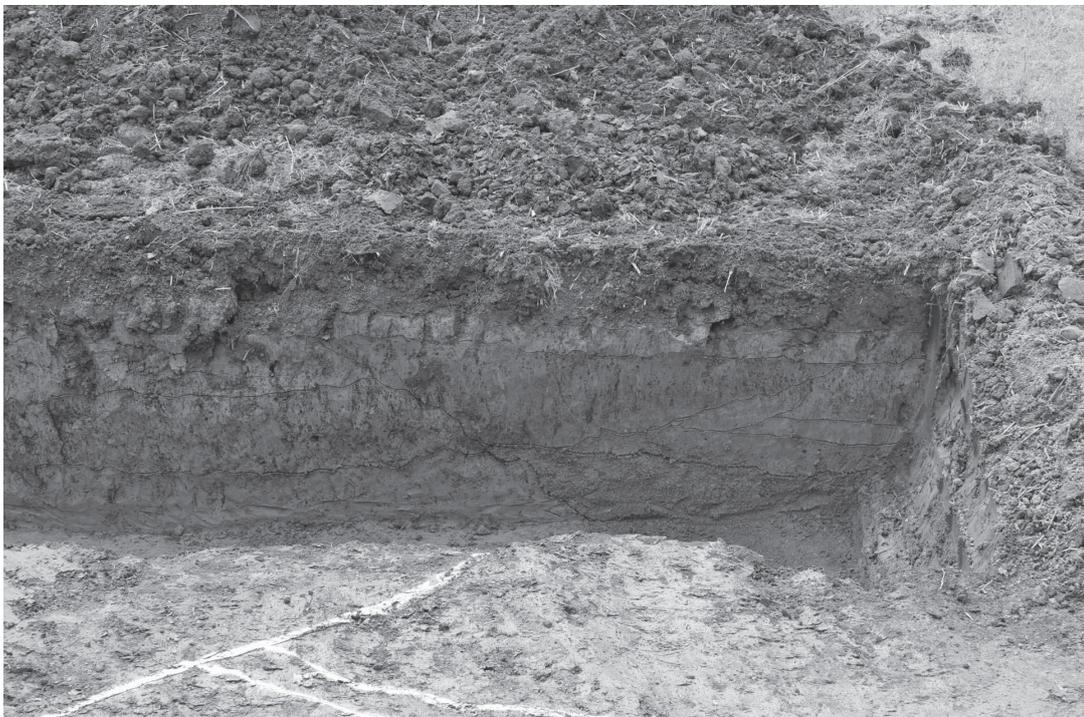


図72 調査区西端断割り状況 (東から)

に先行する土坑群と溝1よりも後出する柱穴群がある。

溝1（図71～73, 75）調査区の西拡張区の北西端から東拡張区の南東端に向けて溝跡を検出した。この溝は延長13.0m以上、幅1.6～2.0m、深さ0.3～0.4mである。断面は皿形で、埋土は概ね上下2層に分かれる。上層は灰オリーブ色微砂であり、土器片、炭化物を含む。下層も灰オリーブ色微砂であるが、マンガン粒が少量入り、上層に比べ軟質である。上層の出土遺物には、長岡京期の須恵器片だけでなく中世前半の瓦器片も含まれており、埋没時期は中世前半と考えられるものの、成立時期は不明である。

柱穴2（図71・73）調査区中央、溝1の南側、約1.3mで検出した。今回の調査では柱穴状の遺構を複数確認したが、唯一柱当りを確認した遺構である。南北0.44m、東西0.36mの楕円形で、中央北寄りに径0.18m、深さ0.15mの柱当りをもつ。柱当りの埋土は褐灰色泥砂、掘方の埋土は灰白色砂泥である。この柱穴2の北側に同規模の柱穴3と柱穴5があり、建物としてのまとまりは確認できないものの、同時期の遺構と考える。

4. 遺物

溝1出土の遺物を含め、今回の出土遺物は小片が多く、図化できた3点（図74）も法量を復元できる資料はない。

1は須恵器杯蓋の口縁部片である。2は須恵器高台部片であり、高台は底部から側壁へ変化する境界付近に貼り付けられている。3は須恵器高杯の脚部である。いずれも長岡京期のものと考えられ、基盤層直上で出土している。

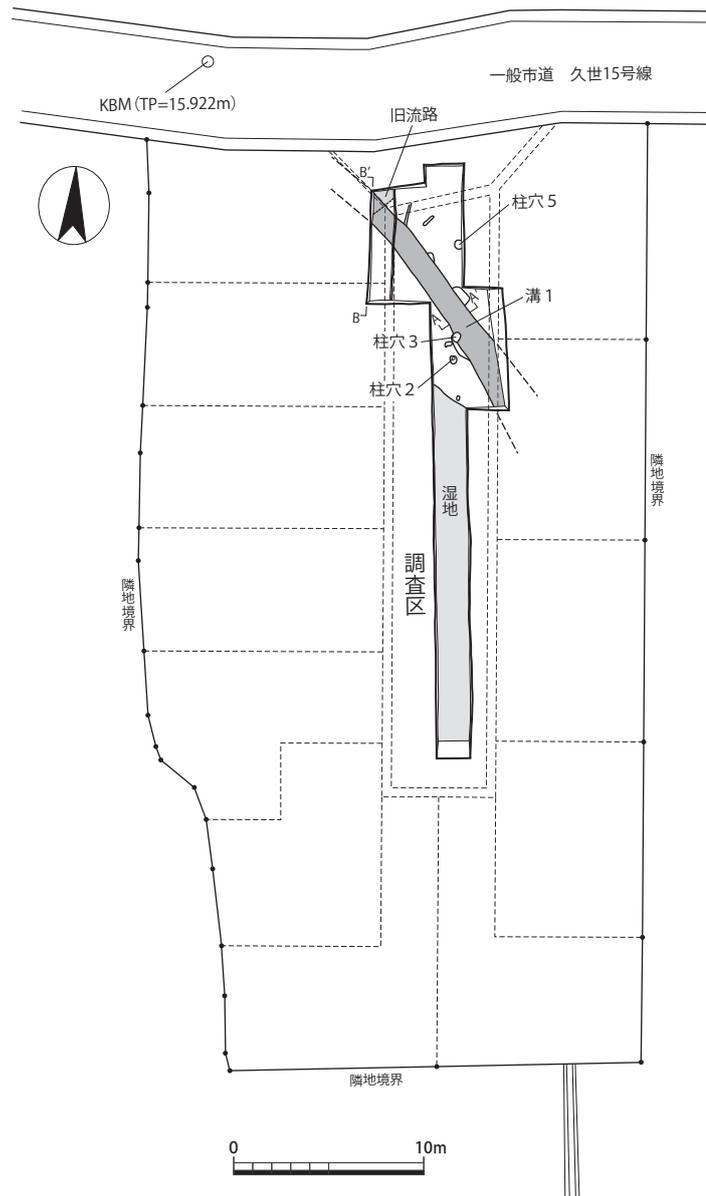


図73 調査区位置図（1：400）

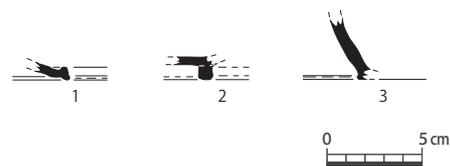


図74 出土土器実測図（1：4）



図75 溝1検出状況（南東から）

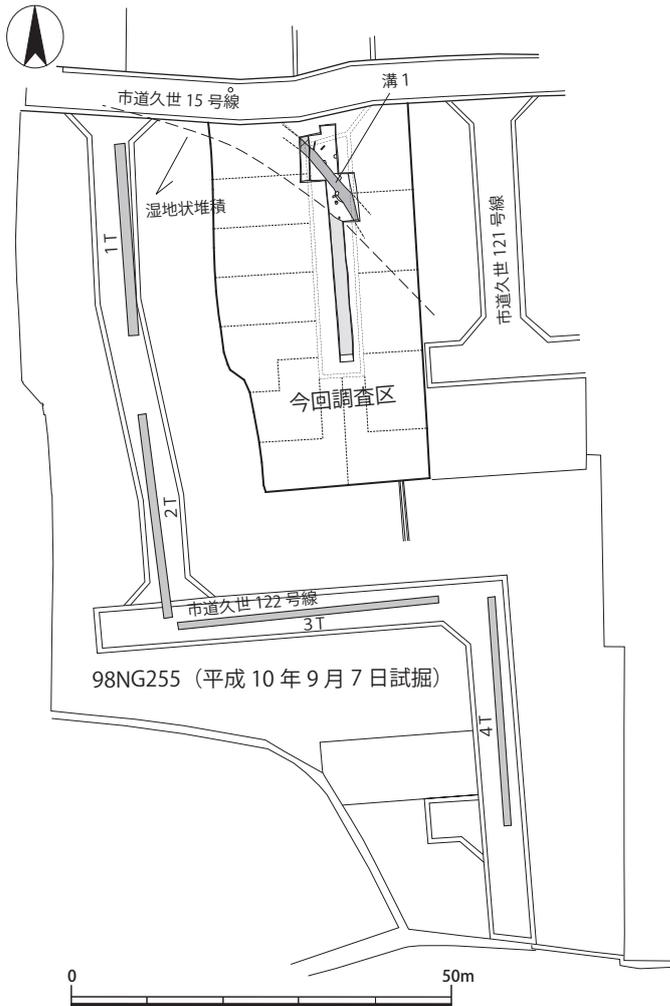


図76 周辺調査状況（1：1,000）

5. まとめ

西側隣接地の調査結果を加味して今回の調査成果を考えると（図76）、西側から当該地の南半にかけて湿地が広がると考える。今回検出した溝1は、この湿地に並行して北西から南東に走っている。溝1の成立時期は不明であるが、溝1の方向は南を流れる寺戸川の方と一致しており、古代から中世のある時期に区画溝として機能していた可能性がある。

また、この溝の北東方向に広がる畑地は微高地状となることから、集落があるとすれば溝1の北方向から北東方向に営まれた可能性が高い。（馬瀬 智光）

註

- 1) 京都市埋蔵文化財調査センター 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成10年度』の地点81（京都市文化市民局 1999年）。

VI 試掘調査一覧表

平成26年度1～3月

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
1	五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区綾小路通烏丸西入童侍者町160,161	3/23,24	各Tr.にて近世以前の遺構が良好に遺存していることを確認した。計画された内容では遺構は保存できないため、記録保存のための 発掘調査を指導 。	56㎡	14H457
2	九条四坊十一町・十四町跡・烏丸町遺跡・九条河原城跡	南区東九条南岩本町15-1他	2/18	1Tr.～4Tr.で氾濫堆積を確認。	56㎡	14H061

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
3	北辺四坊四町跡・史跡妙心寺境内	右京区花園寺ノ内町8-1	3/25	GL-0.3mで近世と思われる石組溝を確認。	15㎡	26N065
4	二条二坊四町跡	中京区西ノ京冷泉町135-2, 136-2, 138-1～3, 140の一部	2/2	GL-1.0mで西大宮川を検出したが、そのほか顕著な遺構や遺物がみられないため、発掘調査は不要。	99㎡	14H453
5	三条二坊十二町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京新建町3他	2/9,10	GL-0.7mで氾濫堆積, -1.4mで湿地堆積, -1.9mで地山を確認。	103㎡	14H172
6	三条三坊八町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京桑原町1	2/26	GL-0.7～0.8mで地山を検出。	26㎡	14H589
7	四条二坊十一町跡・壬生遺跡・御土居跡	中京区壬生淵田町8他	3/27	各Tr.にて御土居関連遺構が良好に遺存していることを確認した。 発掘調査を指導 。	43㎡	14H440
8	六条三坊二町跡・西院遺跡	右京区西院南寿町15-1～2, 17-1～3, 西院西寿町6-1, 31, 31-1	3/9	最も浅い所で, GL-1.3mで, 黄色シルト～浅黄色砂質土の地山を確認。本文12ページ。	15㎡	14H481
9	六条三坊五町跡	右京区西院溝崎町4-1他7筆, 西院西溝崎町42他9筆	1/7	GL-0.8mで安定した地層を確認したが, 遺構, 遺物は検出されなかった。	77㎡	14H421
10	八条三坊十六町跡	右京区西京極佃田町10, 10-3, 11-4, 40の一部	2/4	GL-2.0mで砂礫の地山。	24㎡	14H477
11	九条一坊十二町跡・史跡 西寺跡	南区唐橋西寺町67	3/30	GL-0.2mで西寺に伴う整地層を確認。	14㎡	26N081

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
12	史跡名勝嵐山	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町64	1/19	GL-0.1mで区画溝, 土間遺構を検出。	15㎡	26N026

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
13	下鴨城跡	左京区下鴨泉川町60	3/9,10	集石遺構や溝状遺構を検出したことから, 発掘調査を指導 。	210㎡	14S596

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
14	岡崎遺跡・法勝寺跡	左京区岡崎南御所町6,7	01/19～23	本文23ページ。GL-0.7mで中世～近世の遺構群を検出。	50㎡	14R184
15	尊勝寺跡・岡崎遺跡	左京区岡崎最勝寺町6-4～6	3/26	尊勝寺跡および二条大路末に関連すると考えられる整地層を, GL-0.7mで検出した。 発掘調査を指導 。	11㎡	14R464

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
16	寺町旧城	中京区新烏丸通二条上る橋柳町164, 166	1/15	寺町旧域にかかわる顕著な遺構や遺物はみられなかったため、発掘調査は不要。	26㎡	14S494
17	法観寺旧境内	東山区清水二丁目204-2	1/16	GL-2.5mまで近現代盛土を確認。	7㎡	14S426

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
18	伏見城・桃山古墳群(永井久太郎古墳)	伏見区桃山町永井久太郎68	1/27,28	伏見城期の造成土以外の、顕著な遺構、遺物は確認できなかった。今回は地中埋設物の調査であるため、追加調査は行わない。ただし、今回の調査は諸所の制約下で実施しているため、不明な点も多い。そのため、将来的に当該地で建物建築を含む地形変更を伴う工事に際しては、計画に合わせて調査を実施する。	86㎡	14F524
19	伏見城跡・指月城跡	伏見区桃山町泰長老176-6	3/2,3	伏見城期の造成土と石垣を確認した。記録保存の 発掘調査を指導。平成27年度詳細分布調査報告書を参照。	50㎡	14F529
20	伏見城跡	伏見区桃山筑前台町27-4他	3/6	敷地のほぼ全域においてGL-0.4mで伏見城期と考えられる造成土を検出した。 発掘調査を指導。	59㎡	14F328
21	伏見城跡	伏見区深草大亀谷万帖敷町202-8, 329-2の各一部, 202-5, 202-9	1/13	GL-0.7mで地山を検出。地形に合わせた伏見城期の造成を確認。	22㎡	14F156
22	伏見城跡	伏見区桃山町泰長老179-1, 常盤町33-1	1/30	計画範囲内において、伏見城期に伴う造成土以外の顕著な遺構は存在しない。なお、石垣の裏込めと考えられる石材を敷地西側の境界付近で確認。	27㎡	14F193
23	伏見城跡	伏見区紺屋町181, 183, 196-4, 196-7	3/31	遺構面は土取穴で削平を受ける。	39㎡	14F624

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
24	鳥羽離宮跡	伏見区竹田浄菩提院町36	3/4	GL-1.3mで近衛天皇陵の堀を検出した。なお、 遺構は地中に保存されている。	23㎡	14T576
25	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区竹田西内畑町63	3/12	GL-1.0mで中世遺物包含層及び土坑を検出した。なお、 遺構は地中に保存されている。	21㎡	14T580

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
26	長岡京左京一条三坊八・九町跡・宮ノ脇遺跡・戌亥遺跡	南区久世殿城町328	3/16,17	掘削底のGL-3.8mまで攪乱。	312㎡	14NG486
27	長岡京跡・淀城跡	伏見区淀木津町他地先	3/17~20	GL-2.8m付近で土坑と溝、護岸の石垣を確認。	230㎡	14NG534

平成27年度4月～12月

平安宮地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
28	内蔵寮跡	上京区革堂前之町101, 五番町183	4/8	大部分が近・現代攪乱で壊されていたが一部で土坑を確認。	51㎡	14K622
29	一条大路跡	上京区一条通千本東入伊勢殿構町273-1～4	5/22	GL-1.9mでオリブ褐色礫混じりシルトの地山。顕著な遺構、遺物なし。	22㎡	14K360
30	内裏跡(登華殿・弘徽殿)・聚楽遺跡	上京区出水通土屋町東入東神明町290-1～2	6/9	GL-0.5mで聚楽第外堀の肩口、-0.8mで鎌倉時代の整地層、-1.0mで平安時代の石組遺構。平安時代の石組遺構は内裏登華殿及び弘徽殿に関連する遺構の可能性が高い。 発掘調査を指導。発掘調査後、遺構保存。	39㎡	15K114
31	治部省跡	中京区西ノ京内畑町3の一部	8/4	GL-0.7mで灰白色砂礫の地山。遺構、遺物なし。	21㎡	15K236
32	大蔵省跡	上京区千本通一条下る西側西中筋町9, 9-2～5	6/22	GL-1.2mまで近世～中世遺物包含層、以下地山。	11㎡	15K134
33	大蔵庁跡	上京区七本松通仁和寺街道上一番町107の一部	11/30	1Tr.GL-0.2mまで公園造成土、-0.6mまで近世造成土、以下地山。東溝1条検出。	33㎡	15K409
34	大蔵省跡	上京区仁和寺街道七本松東入一番町102-1	12/10	GL-1.6mで黄褐色砂礫の地山。遺構、遺物なし。	11㎡	15K444

平安京左京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
35	三条二坊九町跡・堀川御池遺跡	中京区二条油小路町284他	11/16	GL-1.5mで近世包含層、-1.7mで褐色シルトの地山。	23㎡	15H426
36	三条二坊九町跡・堀川御池遺跡	中京区堀川通二条下る土橋町14-1	12/14	江戸時代に地山まで大きく削平を受けていたため遺構、遺物は確認できなかった。	23㎡	15H371
37	三条二坊十六町跡・妙顕寺城跡	中京区小川通二条下る古城町367-3～7の各一部, 364, 367	12/22	GL-1.5mでオリブ褐色粗砂の地山。一部鎌倉時代の包含層を認めるが、顕著な遺構、遺物は確認できなかった。部分的に江戸時代前期以前の遺構、遺物が認められる。	23㎡	15H364
38	四条一坊十五町跡・旧本能寺の構え跡	中京区六角通大宮西入三条大宮町242他	7/17	GL-0.9mで土坑墓、-1.2mで中世～平安時代にかけての遺物包含層を確認。	26㎡	14H661
39	四条二坊十二町跡	下京区四条通堀川東入柏屋町5	10/22	GL-1.0～1.5mの現代盛土の下、厚さ0.1～0.2mの近世包含層上面とGL-1.2～1.5mの黄褐色粘質シルトや暗灰黄色砂礫の地山上面で遺構を検出。十二町宅地内に平安時代の土坑とピット、室町時代から江戸時代の土坑や溝が確認できた。	70㎡	15H335
40	四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区郭巨山町11	6/19	GL-0.8mで地山。地山直上で中世～平安時代の遺構を確認。 発掘調査を指導。	38㎡	15H099
41	四条四坊二町跡	中京区蛸薬師通東洞院東入泉正寺町327他	6/10,11	GL-0.6～0.9mで室町時代、-0.9～1.1mで平安後期～鎌倉時代の遺構面を確認し、四条坊門小路の路面及び北側溝を確認。本文3ページ。	93㎡	15H101
42	四条四坊十六町跡	中京区三条通御幸町西入弁慶石町51	10/28	GL-1.5mで安土桃山時代の整地層。茶陶に少量の出土のみ。	29㎡	15H369
43	五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区高辻通堀川東入西高辻町602	6/5	GL-1.4m以下で平安時代後期の整地層や中世の包含層、柱穴、地業の可能性のある土層を確認。	29㎡	15H052
44	五条三坊七町跡、烏丸綾小路遺跡	下京区室町通仏光寺上る白樂天町523-1, 524, 524-1	5/14, 6/8	各調査区で安土桃山時代以下、複数の遺構面が良好に残ることを確認した。 発掘調査を指導。	60㎡	15H009
45	六条二坊十四町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区油小路通五条下る中金仏町202, 203, 205, 206	11/18	近世、中世、平安時代後期の各遺構面及び包含層を確認した。遺構面では、溝、ピット、土坑などを稠密に検出した。 発掘調査を指導。	75㎡	15H346
46	七条二坊十六町跡	下京区旧花屋町通西洞院西入山川町312	12/21	平安京左京七条二坊十六町の内溝を一部検出。GL-1.0mで平安時代後期の整地層、-0.9～1.5mで地山に至る。	46㎡	15H313

47	七条三坊五町・六町跡, 東本願寺前古墓群	下京区烏丸通七条上る常葉町754他	5/11	1区.GL-2.0mでオリブ褐色シルトの近世包含層を一部確認。2区.GL-2.0mまでレンガを含み, 以下GL-2.6mまで黄褐色の砂礫層, 掘削限界のGL-3.0mまで黄褐色粗砂〜シルト。	45㎡	15H062
48	八条一坊七町跡	下京区観喜寺町15他	9/28,29	現代盛土以下砂礫層。	105㎡	15H109
49	八条二坊十五町跡	下京区北不動堂町565-3他, 南町567-9他	7/27〜29	GL-1.5mで溝やピットを検出。遺構密度は低いが, 遺構面は良好に遺存。	103㎡	15H091
50	八条四坊三町跡・御土居跡	下京区東洞院通七条下る東塩小路町847他	7/13・14	1Tr.GL-0.7mで中世整地層。2Tr.GL-0.8mで中世遺物包含層を検出。また, 八条坊門小路南側溝確認。	33㎡	15H008
51	九条一坊八町跡	南区壬生通八条西入東寺町588	10/13	GL-0.6〜0.8mで, 暗灰黄色シルト〜黒色粘土の有機物を含む近世の水成堆積(2層), GL-0.8〜1.3mで, 褐色砂礫の地山(3層)に至る。顕著な遺構, 遺物なし。	33㎡	15H307

平安京右京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
52	一条四坊十町跡・史跡妙心寺境内	右京区花園妙心寺町65	8/31	GL-0.2〜0.8mで地山を確認。地山上面において中世後期〜近世の整地跡を確認した。	8㎡	27N027
53	二条三坊十五町跡	右京区花園春日町8	8/25	GL-0.8〜1.3mでにぶい黄褐色粘質土や砂礫の地山上面で平安時代の溝と柱穴群を確認。 発掘調査を指導。	27㎡	15H248
54	三条一坊一町跡・壬生遺跡	中京区西ノ京星池町206〜207	6/17	GL-0.3mで礫混じりの堆積層を確認。	25㎡	15H136
55	三条二坊六町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京南原町58他5筆	6/2,3	GL-1.3〜1.8mで湿地状堆積を確認。この湿地状堆積から平安時代中期の遺物を確認。本文9ページ。	142㎡	15H024
56	四条一坊三町跡	中京区壬生花井町3の一部, 3-3〜4	4/6	敷地東部でGL-1.4mで遺物包含層を確認。	45㎡	14H599
57	四条三坊十三町跡, 山ノ内遺跡, 西院城跡	右京区西院小米町29, 30	8/21	GL-1.0mで時期不明の土坑6基と南北方向の流路を検出。	46㎡	15H243
58	六条二坊一町跡	中京区壬生東高田町1-2	4/21	平安時代から中世に遡る建物跡や溝跡が良好に残存していた。 発掘調査を指導。	38㎡	14H595
59	六条二坊三町跡・西大宮大路	下京区西七条赤社町28〜30	12/8	顕著な遺構, 遺物なし。	63㎡	15H221
60	六条四坊二町跡・西京極遺跡	右京区西院清水町161-1	8/27	1Tr.GL-0.7mで明黄褐色シルトの地山。地山上面にて堅穴建物, 溝, 土坑等を確認。 設計変更を指導。	35㎡	15H149
61	六条四坊七町跡・西京極遺跡	右京区西院月双町121	7/24	GL-1.1mで明黄褐色シルトの地山。地山上面で堅穴建物3棟を含む多数の遺構が成立。 発掘調査を指導。	34㎡	15H141
62	七条一坊十町跡・衣田町遺跡	下京区西七条東八反田町33	4/13〜15	敷地の南西部でのみ, GL-0.3mで遺構を確認。南西部については 発掘調査を指導。 それ以外の範囲は, すでに削平されていた。	288㎡	14H462
63	七条一坊十一町跡	下京区西七条御領町67-2〜3, 68-1〜2	9/3	GL-1.0〜1.3mにおいて流路堆積と考えられる砂礫層を確認。	10㎡	15H178
64	七条三坊四町跡	下京区西七条北月読町65-2	7/10	GL-1.2〜1.8mで, 遺物包含層を3層確認。最上層は平安時代後期〜中世の遺物を含む。	18㎡	15H153
65	七条四坊十町跡	右京区西京極東池田町7	6/30	GL-1.4mで灰色砂泥の地山。顕著な遺構, 遺物なし。	23㎡	15H124
66	八条三坊七町跡	下京区御所ノ内西町71-1	12/24, 25	木組遺構の一部と八条坊門小路北側溝を確認した。 発掘調査を指導。	63㎡	15H404
67	九条二坊十四町跡	南区吉祥院西ノ庄門口町14	4/22	GL-0.8m以下, 湿地状堆積, -2.0m以下氾濫堆積で, 平安時代の遺構, 遺物なし。	19㎡	14H506

太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
68	嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡	右京区嵯峨天龍寺今堀町11-5	4/1	GL-0.6mで室町時代整地層, -1.0mで明黄褐色シルトの地山。奈良～室町時代の遺構を確認したが、遺構面の大半は削平を受ける。本文15ページ。	13㎡	12S132
69	嵯峨遺跡	右京区嵯峨天龍寺若宮町25-1,25-3～4,25-6～7,29-9	11/26	GL-1.5～1.6m黄褐色シルトの地山上面で、室町時代の溝、土坑、柱穴などを確認、 発掘調査を指導 。(敷地西半についてはH28年1月に試掘)	157㎡	15S246
70	観空寺跡	右京区嵯峨観空寺久保殿町13～15, 15-1, 16-3, 36	4/2	GL-0.2mにて黄褐色砂礫の地山。顕著な遺構、遺物なし。	21㎡	14S585
71	太秦馬塚町遺跡	右京区太秦青木ケ原町7-2	4/27	GL-0.6mまで現代盛土, 現代耕作土, -1.0mまで黒褐色細砂混シルト, -1.3mまで黄褐色細砂混粘土質シルト, 以下オリブ褐色砂礫を確認。	41㎡	15S012
72	一ノ井遺跡	右京区太秦垣内町3-22・75・81・82	5/29	GL-0.6mで地山である黄褐色系のシルト～砂礫を確認。この地山直上で中世の土坑等を確認。	45㎡	15S045
73	名勝大沢池附名古曾滝跡・史跡大覚寺御所	右京区北嵯峨名古曾町12	7/16	GL-0.2mで地山を検出。	29㎡	27N004
74	嵯峨遺跡	右京区嵯峨天龍寺若宮町20-71, 21-1, 33	7/21	GL-0.3～0.4mにて時期不明包含層, -0.5mで灰黄褐色砂礫～シルトの地山, 包含層, 地山上面で室町時代の溝, 土坑, ピットを確認。 発掘調査を指導 。	55㎡	15S055
75	草木町遺跡	右京区太秦京ノ道町27-1～2	8/10	GL-0.3mで室町時代の瓦溜と土坑・ピットを確認。調査区東端の土坑で鎌倉時代の多量の土師器を確認。	48㎡	15S208
76	史跡仁和寺御所跡	右京区御室大内33	10/2	大半が攪乱。GL-0.5m以下で中世以前の整地層。	12㎡	27N040

洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
77	八幡古墳群	左京区岩倉幡枝町2450	8/17	GL-3.1mまで盛土のみ。	21㎡	15S084
78	岩倉中在地遺跡	左京区岩倉村松町62, 63, 65-2	8/3	GL-0.3mで明黄褐色シルトの地山。顕著な遺構、遺物なし。	42㎡	14S634
79	下鴨城跡	左京区下鴨泉川町60	9/14	下鴨城跡に伴う遺構、遺物は確認できなかった。	20㎡	14S596
80	御土居跡	北区紫野北花ノ坊町31他	7/23	1・2Tr.GL-0.5～1.0mで、3Tr.GL-0.1mで御土居盛土を確認。 発掘調査を指導 。	29㎡	15S058
81	北野遺跡	北区北野東紅梅町4	7/1,2	2面の遺構面を確認。飛鳥時代の落ち込み、時期不明の土坑、ピットが展開する。 発掘調査を指導 。	237㎡	15S183
82	上京遺跡	上京区烏丸通鞍馬口下る東入上御霊中町290他	5/12, 11/9, 12/1	GL-0.7～0.8mで中世整地層を確認。中世の遺構面が良好に残存することから、一部 発掘調査を指導 。	115㎡	15S073
83	上京遺跡	上京区武者小路通小川東入西無車小路町599, 601-1他	5/18	2Tr.でGL-0.5m以下、地山に至るまで室町時代の各遺構面が良好に残る。 発掘調査を指導 。	64㎡	14S584
84	上京遺跡	上京区観世町115	10/19	近・現代盛土及び攪乱の下に近代包含層を挟み、GL-1.5mで地山である黄褐色粘土質シルトに至る。地山上面で南北溝1条、土坑1基を確認。しかし大半が攪乱を受けており、遺構はほとんど確認できなかった。	46㎡	15S227
85	上京遺跡	上京区大宮通寺ノ内1丁下る西入伊佐町212-2他	11/10, 11	GL-0.7～1.2m第1遺構面上にて16世紀後半以降の大型土坑, -1.8m第3遺構面上にて15世紀前半の溝を確認。	36㎡	15S324

北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
86	法勝寺跡, 岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町123-4の一部, 123-5~6	5/13, 7/31	敷地南半ではGL-1.3m以上まで解体攪乱。敷地北半ではGL-0.5mで平安時代の整地土を確認。	50㎡	15R074
87	法勝寺跡・岡崎遺跡	左京区岡崎法勝寺町114-3	8/24	GL-2.2mで灰白色粗砂の白川砂の地山を確認。遺構, 遺物なし。	13㎡	15R235
88	白河街区跡	左京区聖護院東町16-8	8/5	盛土直下GL-0.35mで白川砂。時期不明の土坑を数基検出。	21㎡	15S087

洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
89	寺町旧城	下京区河原町通松原上る二丁目富永町344	6/29	平安時代後期以降, 近世に至るまで土地利用が活発に行われてることを確認した。GL-1.0m以下, 平安~近世初頭までの遺構面を複数確認。 発掘調査を指導。	28㎡	14S582
90	塚本古墳	東山区本町十六丁目305	11/20	盛土直下において地山面を確認したが, 塚本古墳に関わる顕著な遺構, 遺物は認められなかった。	11㎡	15S390
91	中臣遺跡	山科区東野舞台町63-2, 67-3, 69-7	10/6	近現代盛土以下, 近世耕土層と河川堆積を確認。	17㎡	15N303
92	中臣遺跡	山科区栗栖野華ノ木町11, 12	7/3	GL-0.2~0.5mでオリブ褐色礫混じり砂泥の地山。地山上面にて多数の土坑, 柱穴, ビット, 溝を確認。 発掘調査を指導。 本文34ページ。	49㎡	15N112
93	山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町32-104	5/7	GL-0.3mで暗褐色細砂混じりのシルト層を検出。	1㎡	15S047
94	山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町14	9/7	GL-1.0mでにぶい黄褐色粘質シルトを確認。遺構, 遺物なし。	26㎡	15S174
95	山科本願寺跡(寺内町遺跡)・左義長町遺跡	山科区西野離宮町40他13筆, 西野山階町2他15筆	6/24,25	GL-0.8mで南北14m以上・幅約1mの溝を確認。焼土と炭を含んでおり, 出土した土器等から山科本願寺跡に伴う遺構と考えられる。遺構面が良好に遺存していることから, 計画範囲の北西部については 発掘調査を指導。 それ以外の箇所に関しては, 平成27年度詳細分布調査報告書を参照。	77㎡	14S612
96	山科本願寺跡(寺内町遺跡)・左義長町遺跡	山科区西野離宮町40他13筆, 山階町2他15筆	10/5	GL-0.7mで礫を多量に含む落ち込みを確認した。土塁の南東隅付近にあたり, 南西部については 取扱協議中。	41㎡	15S293

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
97	醍醐廃寺	伏見区醍醐御霊ヶ下町33-4他4筆	4/10	GL-1.3mから2.0mまで現代盛土。3Tr. ではGL-1.3mで現代耕作土層を確認。	57㎡	14S397
98	伏見城跡	伏見区山崎町343	5/20	1Tr. GL-2.0mまで近世包含層, 2Tr. GL-0.8mにて幕末の火災層。顕著な遺構, 遺物なし。	95㎡	15F078
99	伏見城跡・桃山古墳群(永井久太郎古墳)	伏見区桃山町島津14-25他	9/1	GL-0.3~0.7mにおいて, 桃山時代の整地層とその上面に成立する遺構群を検出した。 発掘調査を指導。	60㎡	15F154
100	伏見城跡	伏見区桃山町立売44-1	9/11	調査区の南端で伏見城期にさかのぼる町家と武家屋敷を区切る段差を確認。これ以外の伏見城期に伴う遺構, 遺物は確認できず, 江戸時代後期以降にこの段差が削平され, 造成し直されていることがあきらかとなった。	51㎡	15F212
101	伏見城跡	伏見区竹中町609	10/26, 11/13	盛土以下, 近世整地層を複数確認。GL-1.1~1.2mで明黄褐色砂礫の地山。伏見城期の遺構面は確認できず。	28㎡	15F358

南・桂地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
102	上久世遺跡	南区久世上久世町71-5, 79	5/27	GL-1.8m前後で奈良時代の土器を含む氾濫堆積。	38㎡	14S625
103	上久世遺跡	南区久世上久世町360	7/13,14	弥生時代, 古墳時代の水田, その下層に弥生時代の流路を確認。本文48ページ。	102㎡	15S169
104	上久世遺跡	南区久世上久世町404	11/4	GL-0.3~0.5mまで中近世耕作土, 以下砂礫(地山)を確認した。出土遺物は寡少, 明確な遺構は確認できなかった。	60㎡	15S382
105	上久世遺跡	南区久世上久世町199-1他	12/17	明確な遺構は確認できなかった。地層, 地形から中世以前は流路であった可能性が高い。	41㎡	15S285
106	檜原遺跡	西京区檜原岡南ノ庄1-2, 3-1, 檜原大亀谷19-2~3	9/10	盛土の下に無遺物層を確認。遺構, 遺物なし。	13㎡	15S159
107	大藪遺跡・中久世遺跡	南区久世大藪町179-1, 180-1, 181~184	10/7	旧耕土直下のGL-0.2mにおいて地山を掘り込む溝を確認。遺構, 遺物は希薄であるが遺構面が良好に遺存。	76㎡	15S288

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
108	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区竹田浄菩提院町34, 35	5/26	顕著な遺構や遺物を確認できなかった。	15㎡	15T050
109	鳥羽離宮跡	伏見区竹田中内畑町116-1	9/2	GL-1.0mまで近世包含層(18世紀), GL-1.2mまで遺物を多量に含む中世後期(14~15世紀)包含層, GL-1.6mまで湿地状堆積を確認。以下, 灰色粗砂を主体とする流路堆積(湧水層)が存在する。本文52ページ。	25㎡	15T165
110	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区中島北ノ口23~25	9/17	GL-1.0mで, 鳥羽離宮期に陸部であったと思われる面を確認。	67㎡	14T244

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
111	長岡京左京北辺二坊十四町跡	南区久世殿城町313-5	4/28	GL-0.3mで灰オリブ色砂泥の地山。調査区北半で, 北西から南東に直線に伸びる幅1.5~2.0m, 深さ約0.4mの溝を確認。本文59ページ。	97㎡	14NG586
112	長岡京跡	伏見区納所南城堀1-2・14-1他, 納所薬師堂13他	5/25	GL-1.0~1.8mまで近世の遺物を含む褐灰~黄灰色細砂が堆積。	16㎡	14NG645
113	長岡京左京五条三坊九町跡	伏見区羽東師菱川町262-7他	8/11	GL-0.2mで中世包含層, -0.5mで灰黄褐色~黄灰色微砂の地山を確認。	74㎡	15NG113
114	長岡京左京五条三坊十六町跡	伏見区羽東師菱川町287-4, 288-4	8/28	GL-1.3~1.4mで黄灰色粘質土の地山。顕著な遺構, 遺物なし。	13㎡	15NG173
115	長岡京跡・淀城跡	伏見区淀木津町地先	9/24,25	1Tr.GL-1.6mで盛土, 3Tr.GL-1.1mで盛土を確認。盛土は細砂が主体でブロック状に粘土が混じる。	93㎡	15NG220
116	長岡京跡・水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内	伏見区淀大下津町他地先	12/3	GL-0.5mで湿地堆積。	37㎡	15NG105

表2 遺物概要表

	Aランク点数	内訳	Bランク箱数	Cランク箱数	出土箱数合計
点数及び箱数	115点 (4箱)	弥生土器5点, 土師器58点, 須恵器7点, 陶磁器18点, 瓦器4点, 瓦17点, 石製品1点, 銭貨2点, 金属製品1点, 土製品2点	3箱	29箱	36箱

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀大輔・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2F							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京 四条四坊二町跡	京都市中京区 蛸薬師通東洞院 泉正寺町327他	26100	1	35度 00分 45秒	135度 45分 29秒	2015/6/11	93㎡	共同住宅
平安京右京三条 二坊六町跡・ 西ノ京遺跡	京都市中京区 南原町57-1,58,59, 86-186-3,87	26100	1 461	35度 00分 36秒	135度 44分 01秒	2015/6/2,3 11/20-30 12/1	69㎡	体育館建設
平安京右京六条 三坊二町跡・ 西院遺跡	京都市右京区 西院南寿町15-1他4筆, 西院西寿町6-1他2筆	26100	1 930	34度 59分 47秒	135度 43分 44秒	2015/3/9	15㎡	宗教施設
嵯峨遺跡・ 嵯峨北堀町遺跡	京都市右京区 嵯峨天龍寺今堀町 11-5	26100	937 903	35度 01分 01秒	135度 40分 57秒	2015/4/1	13㎡	宅地造成
白河街区跡・ 岡崎遺跡・ 東光寺跡	京都市左京区 岡崎天王町 27, 15-3, 15-5	26100	417 418 414	35度 00分 59秒	135度 47分 18秒	2014/10/31	72㎡	店舗
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 四条四坊二町跡	都城跡	平安時代	溝・柱穴・土坑など	土師器・須恵器・白磁・瓦		四条坊門小路北側溝を検出		
平安京右京三条 二坊六町跡・ 西ノ京遺跡	都城跡 散布地	平安時代 弥生～古墳時代	柱穴・土坑	土師器・須恵器・緑釉陶器 灰釉陶器・平瓦		須恵器杯は転用硯か		
平安京右京六条 三坊二町跡・ 西院遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 弥生時代	溝	土師器・須恵器		「小径」の側溝と 考えられる溝2条を検出		
嵯峨遺跡・ 嵯峨北堀町遺跡	寺院跡 集落跡	鎌倉～室町時代 奈良時代	土坑・溝・整地層	土師器・須恵器				
白河街区跡・ 岡崎遺跡・ 東光寺跡	寺院跡 集落跡	弥生時代 平安～鎌倉時代	落込み・石列	土師器・瓦				

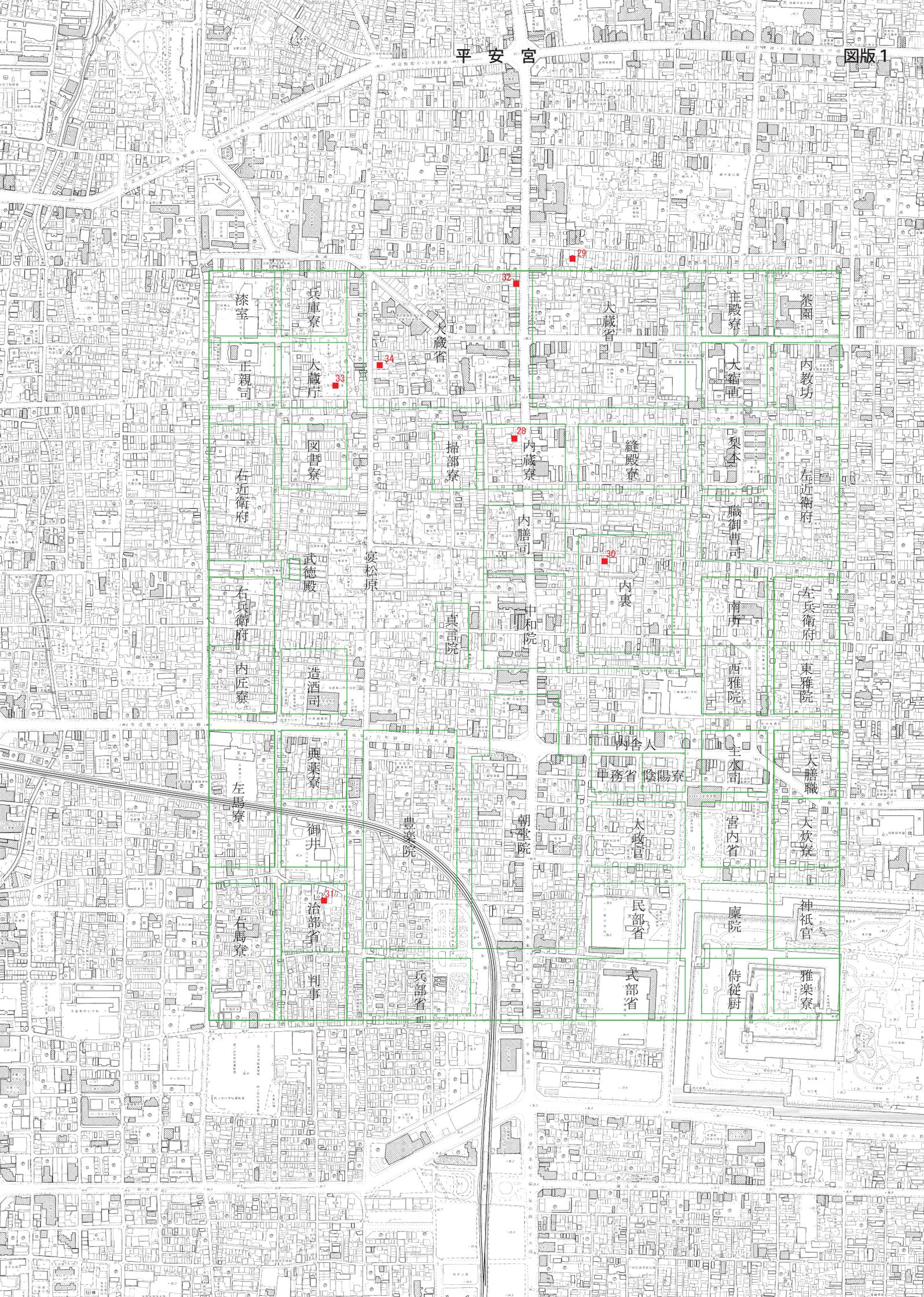
報 告 書 抄 録

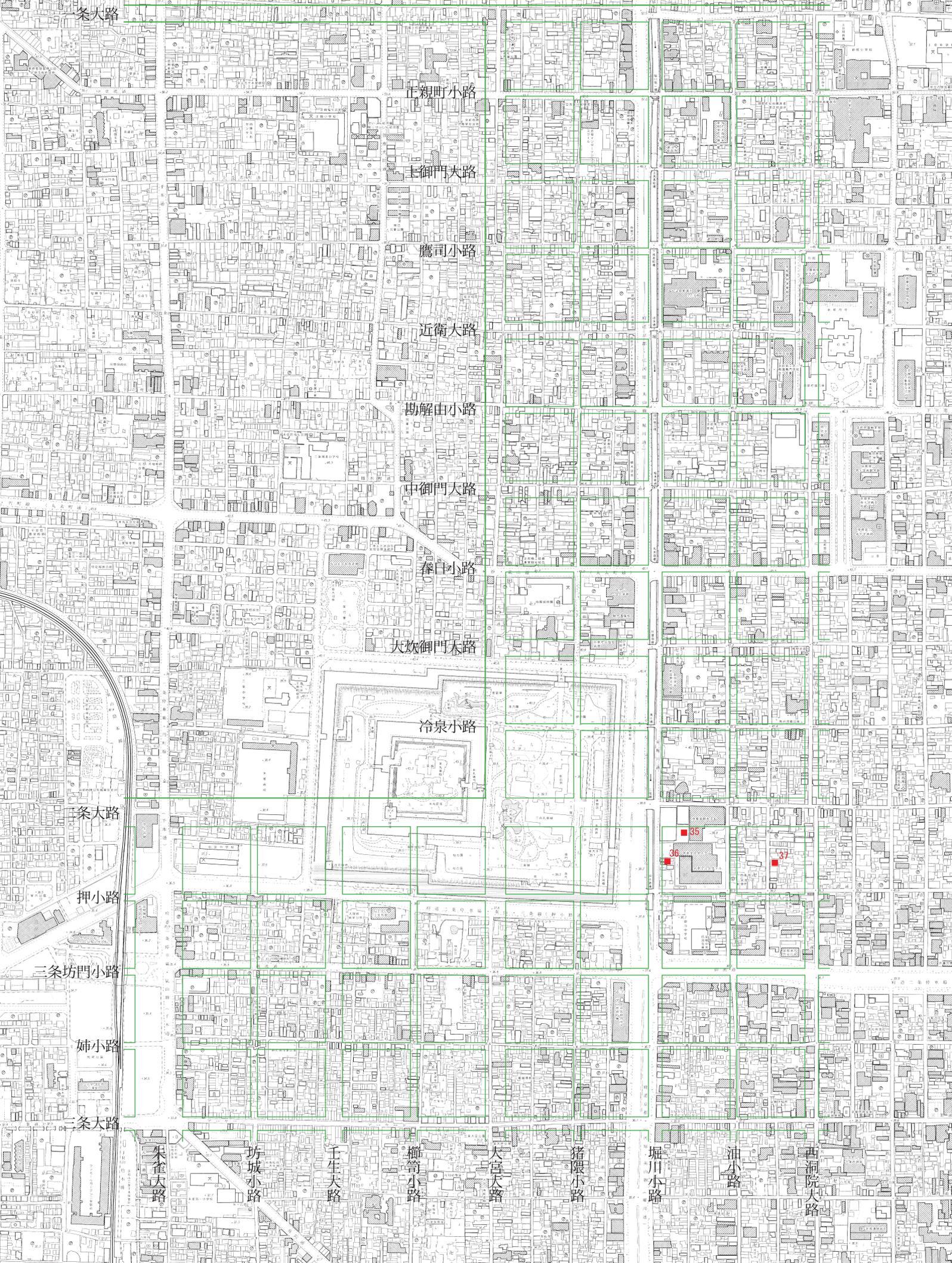
ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・堀 大輔・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地 Y・J・Kビル2F							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おかざきいせき 岡崎遺跡・ はつしようじあ 法勝寺跡	きょうとしさきょう 京都市左京区 おかざきみなみこしよまち 岡崎南御所町6,7	26100	417-01 418	35度 00分 55秒	135度 47分 08秒	2015/1/19～ 23	47㎡	共同住宅
なかとみいせき 中臣遺跡	きょうとしやましなく 京都市山科区 くさずのはなのきちよ 栗栖野華ノ木町11,12	26100	632	34度 58分 19秒	135度 48分 18秒	2015/7/3, 7/21～8/7	187㎡	高齢者住宅
かみくせいせき 上久世遺跡	きょうとしうみなみく 京都市南区 くげかみくげちよう 久世上久世町360	26100	761	34度 57分 50秒	135度 42分 44秒	2015/7/13,14	52㎡	共同住宅
とばりきゅうあ 鳥羽離宮跡・ とばりせき 鳥羽遺跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 たけだなかうちはたちよう 竹田中内畑町116-1	26100	1166 1167	34度 57分 13秒	135度 45分 19秒	2015/9/2	25㎡	共同住宅
ながおかきょうさきょうじよう 長岡京左京二条 さんぽうはつちようきゅうちようあ 三坊八・九町跡・ かいでいせき 鶏冠井遺跡	きょうとしみなみく 京都市南区 くげひがしつちかわちよう 久世東土川町180-5 他11筆	26100	3 461	34度 56分 44秒	135度 42分 57秒	2014/12/10,11	101㎡	店舗
ながおかきょうさきょうほうへん 長岡京左京北辺 にほうしゅうふんちようあ 二坊十四町跡	きょうとしみなみく 京都市南区 くげほしのしろちよう 久世殿城町313-5	26100	3	34度 57分 25秒	135度 42分 55秒	2015/4/28	97㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岡崎遺跡・ 法勝寺跡	寺院跡 集落跡	平安～室町時代	溝・土坑	土師器・須恵器・瓦器・瓦類		白河街区に関連する 溝を検出		
中臣遺跡	集落跡	縄文～室町時代	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器・瓦器・土製品 施釉陶器・灰釉陶器・磁器 平瓦・砥石・馬歯・煙管・銭貨		南北にのびる平安時代の 大溝を検出		
上久世遺跡	集落跡	弥生～古墳時代	水田	弥生土器				
鳥羽離宮跡・ 鳥羽遺跡	離宮跡 集落跡	鎌倉～室町時代		土師器・須恵器・黒色土器 瓦器・陶器・磁器				
長岡京左京二条 三坊八・九町跡・ 鶏冠井遺跡	都城跡 集落跡	平安時代	溝	土師器・須恵器・瓦		長岡京一条大路南側溝と 考えられる遺構を検出		
長岡京左京北辺 二坊十四町跡	都城跡	平安～鎌倉時代	溝・土坑・柱穴	土師器・須恵器・瓦器		北西から南東に延びる 区画溝を検出		

図 版

凡 例

- 平成 27 年 1 ～ 3 月 試掘調査地点
- 平成 27 年 4 ～ 12 月 試掘調査地点





一条大路

正親町小路

上御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

三条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

三条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

大宮大路

猪隈小路

堀川小路

油小路

西洞院大路

35

36

37

平安京左京北辺～三条三・四坊

図版3

条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

条大路

押小路

三条坊門小路

堀小路

条大路

西洞院大路

町屋小路

室町小路

烏丸小路

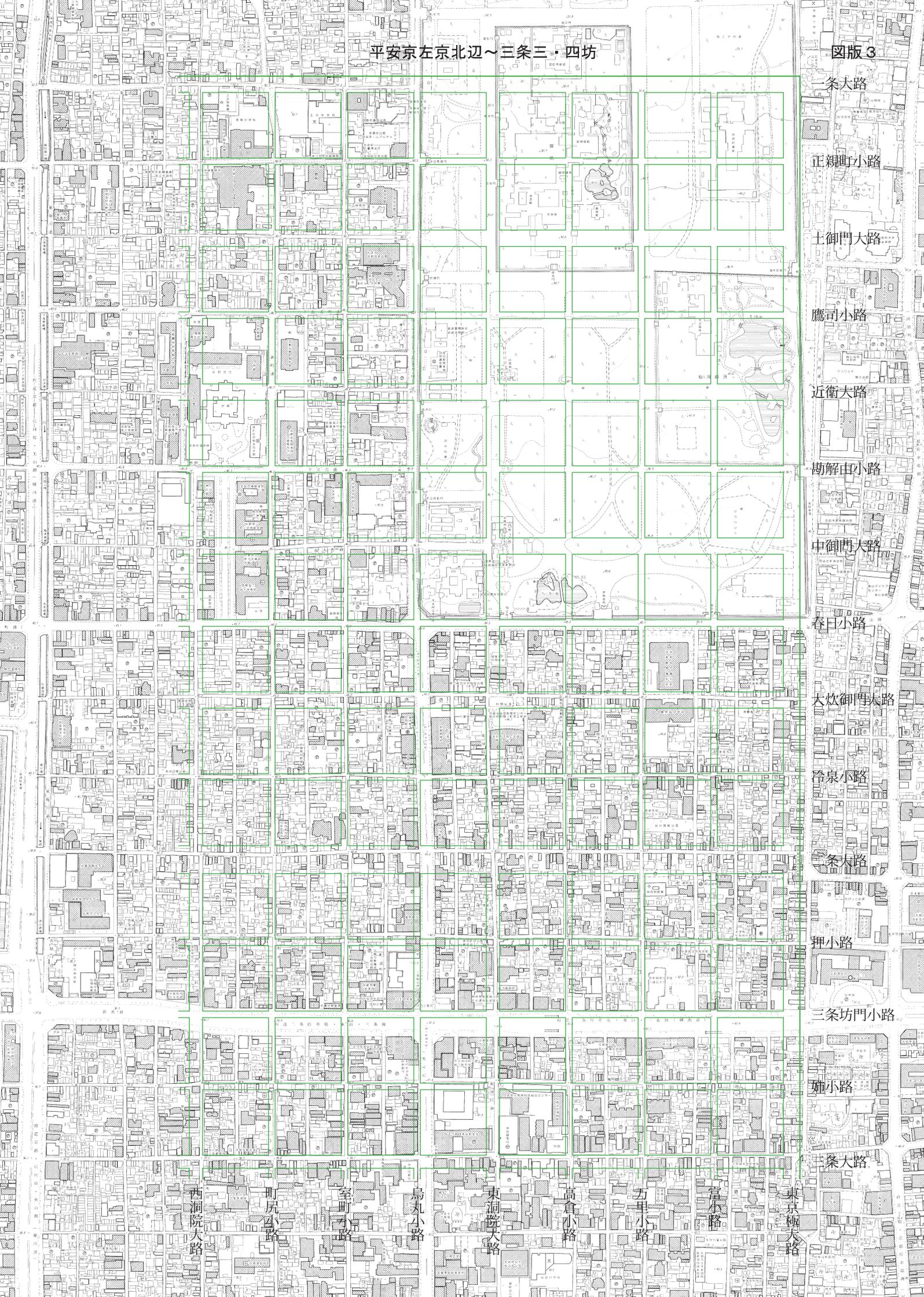
東洞院大路

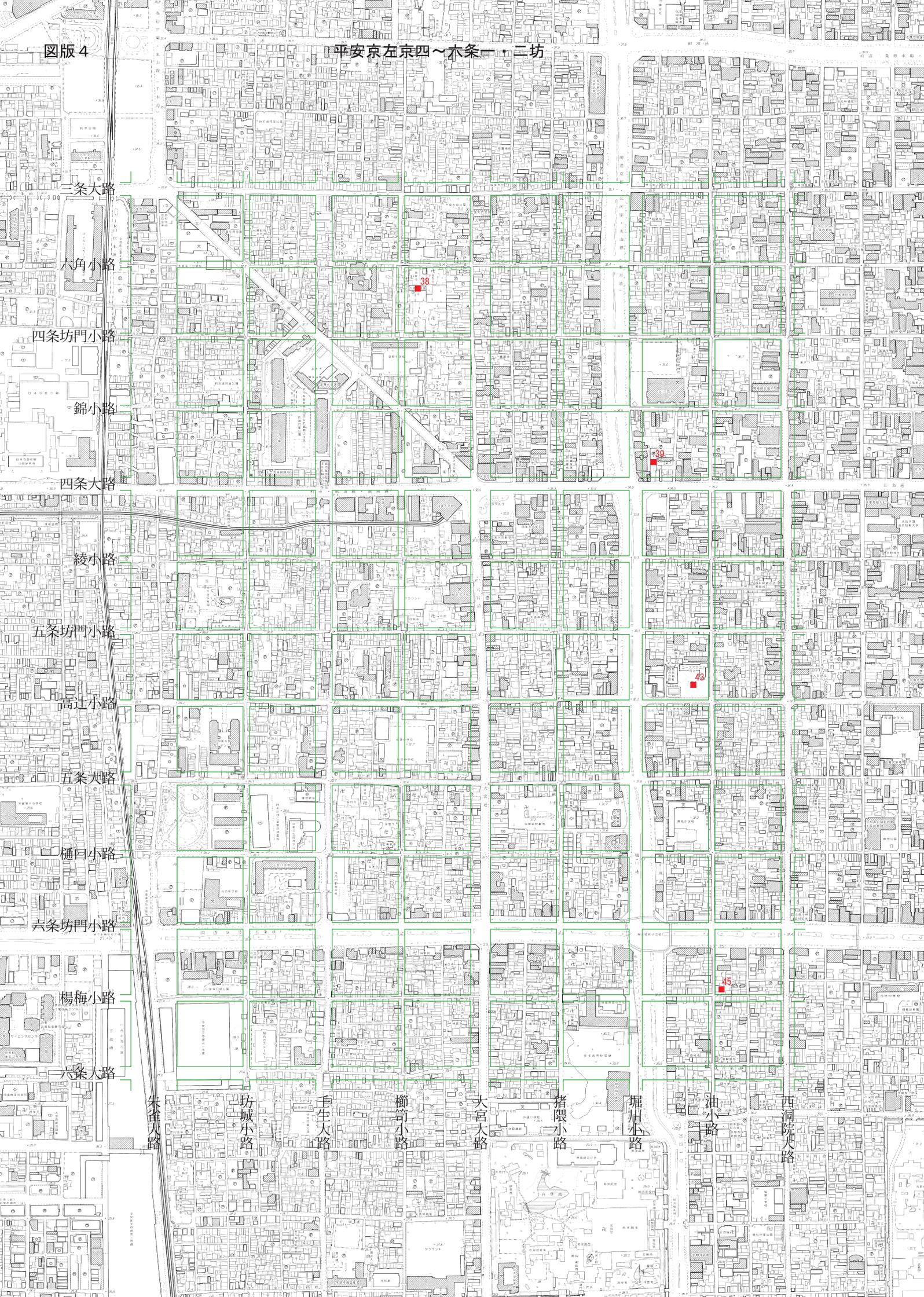
高倉小路

五里小路

富本路

東京極大路





三条大路

六角小路

四坊門小路

錦小路

四坊大路

綾小路

五坊門小路

高辻小路

五坊大路

樋口小路

六坊門小路

楊梅小路

六坊大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛司小路

大宮大路

猪隈小路

堀州小路

油小路

西河院大路

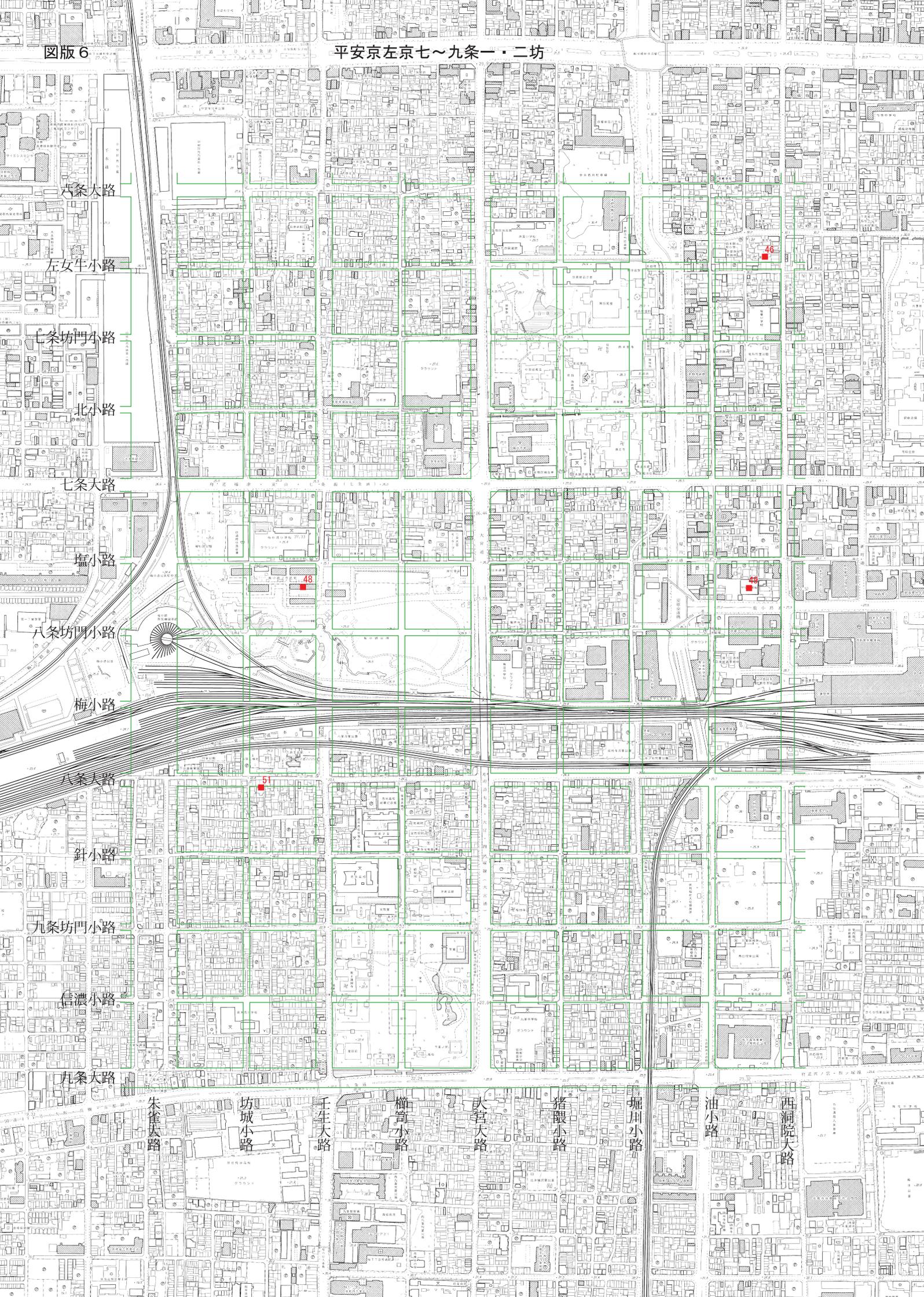
38

39

42

45





六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

大宮大路

猪鬣小路

堀川小路

油小路

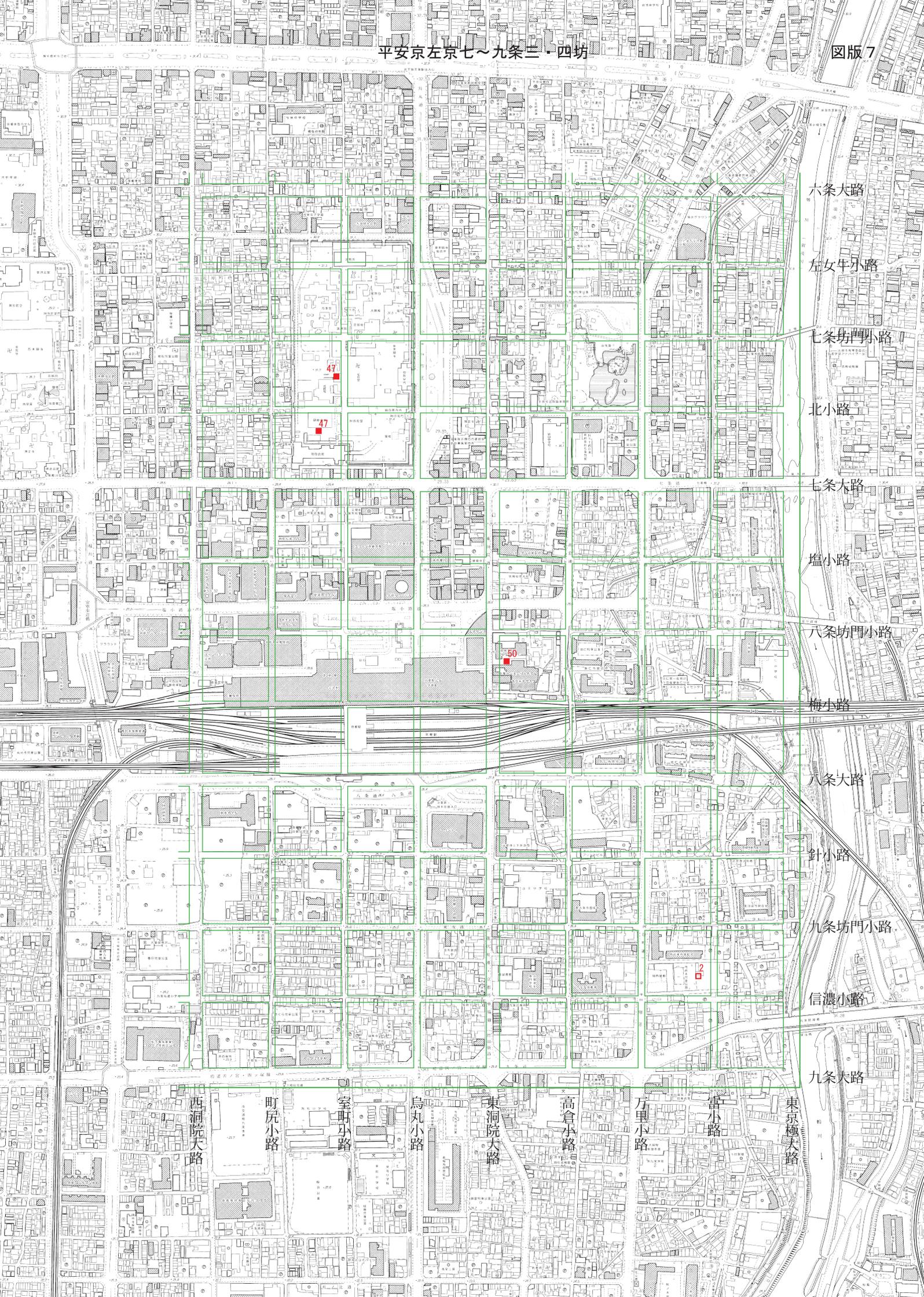
西洞院大路

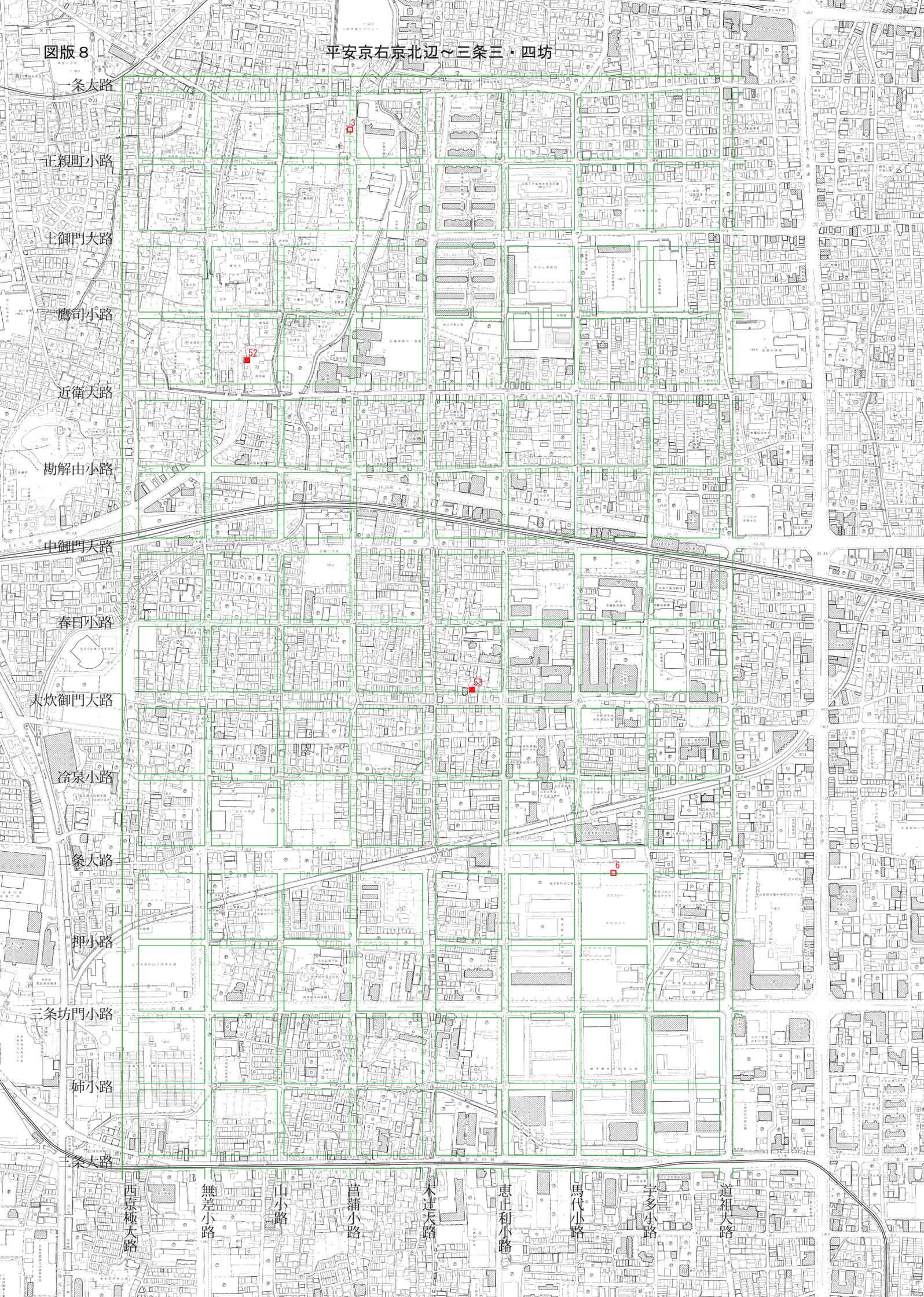
48

51

46

43





条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

太炊御門大路

冷泉小路

条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

条大路

西京極大路

無差小路

山小路

菖蒲小路

木辻大路

恵止利小路

馬代小路

宇多小路

道祖大路

条大路

正親町小路

上御門大路

鷹司小路

近衛大路

勘解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

条大路

押小路

三条坊門小路

姉小路

三条大路

道祖大路

野寺小路

西堀小路

西朝負小路

西大宮大路

西櫛宮小路

皇嘉門大路

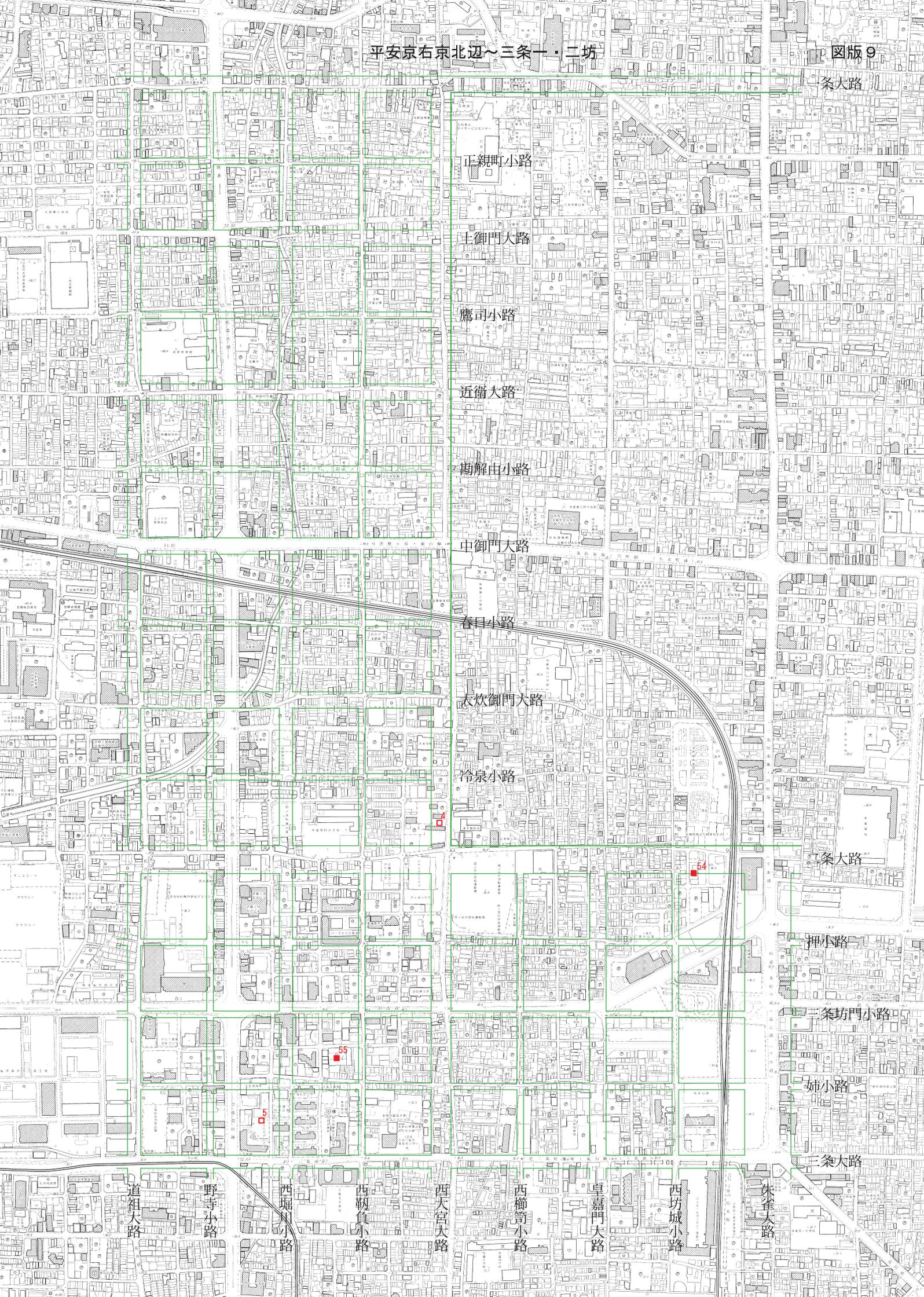
西坊城小路

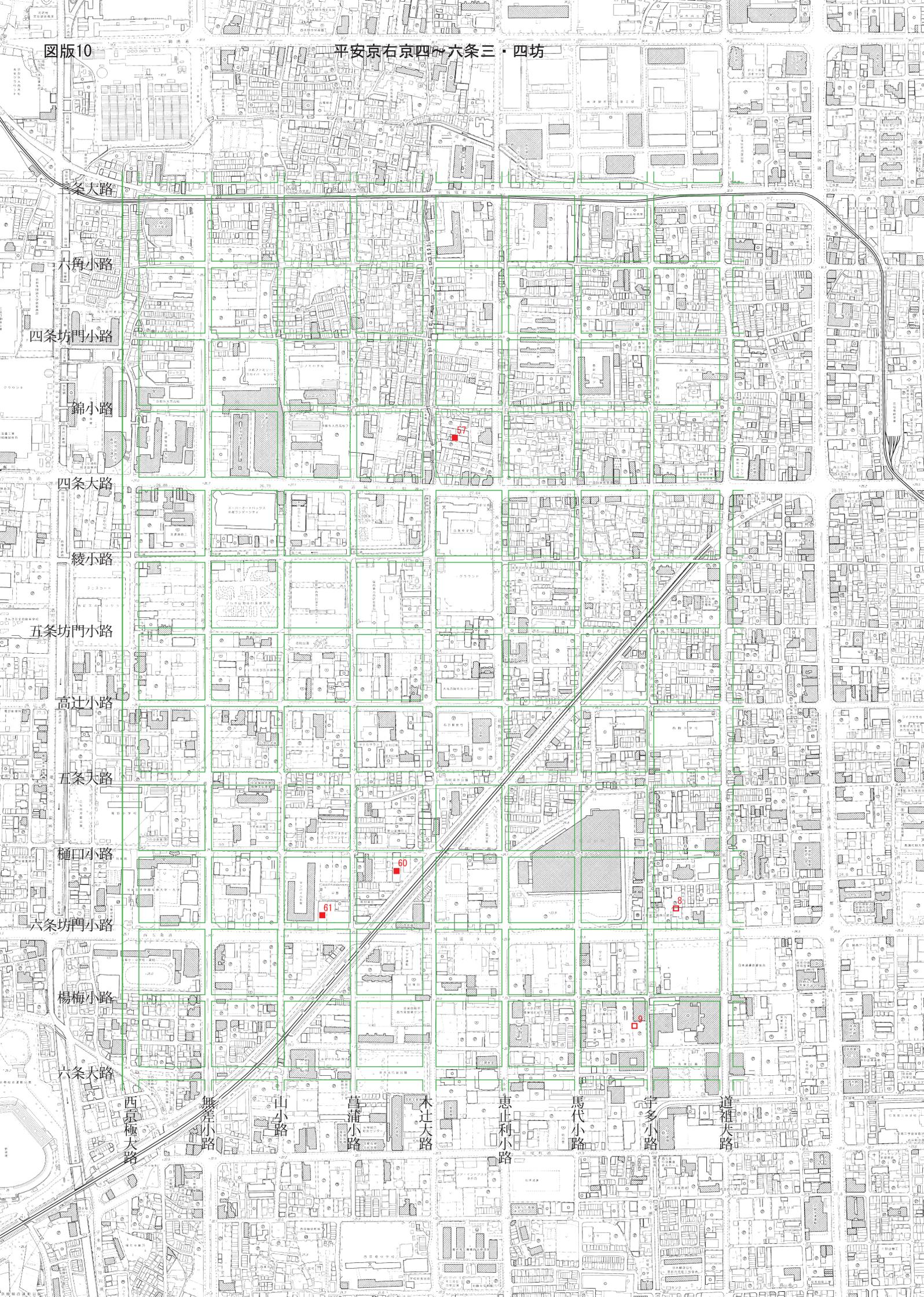
朱雀大路

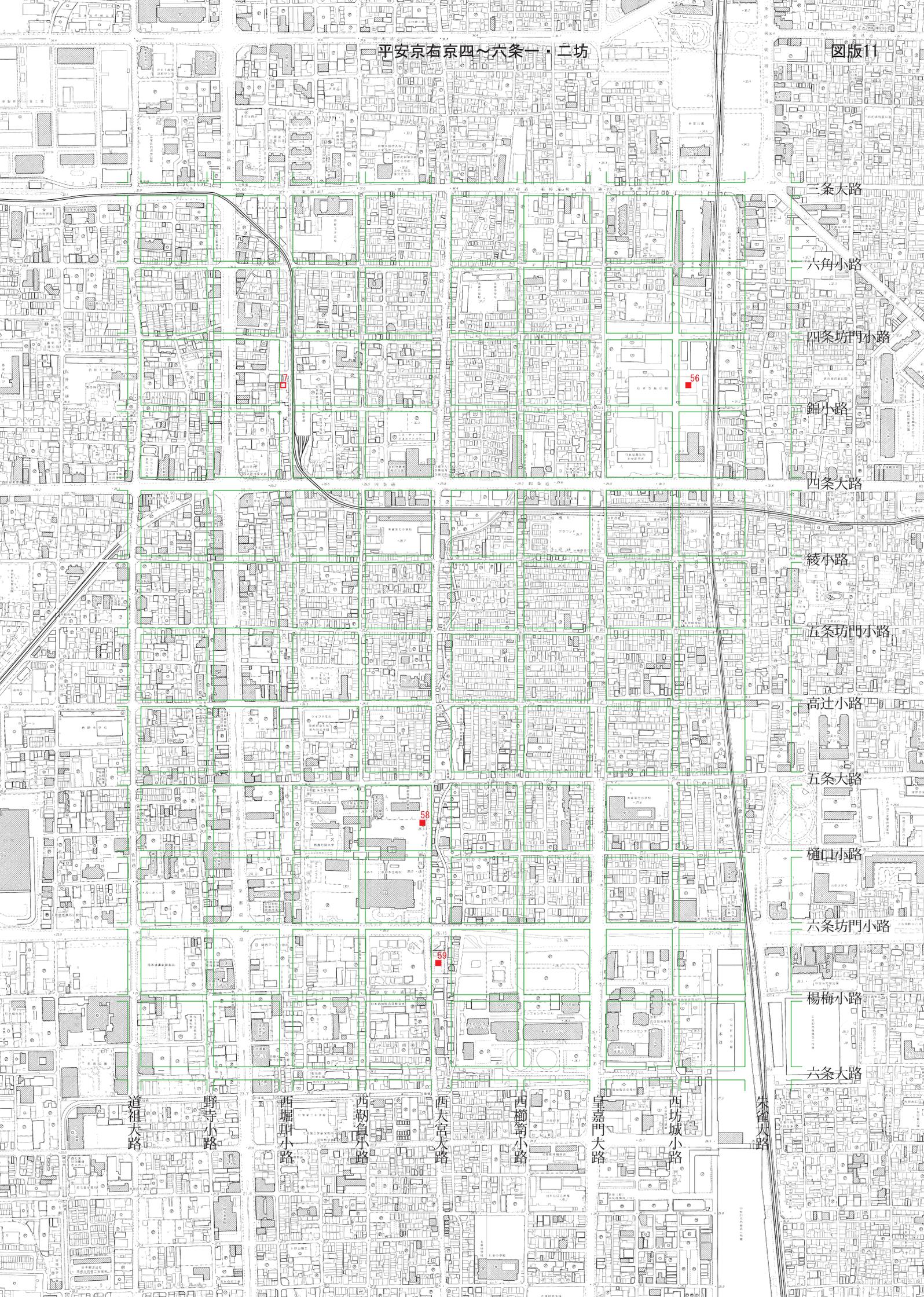
54

55

5







二条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

楊梅小路

六条大路

道祖大路

野寺小路

西堀針小路

西朝負小路

西大宮大路

西櫛筒小路

皇嘉門大路

西坊城小路

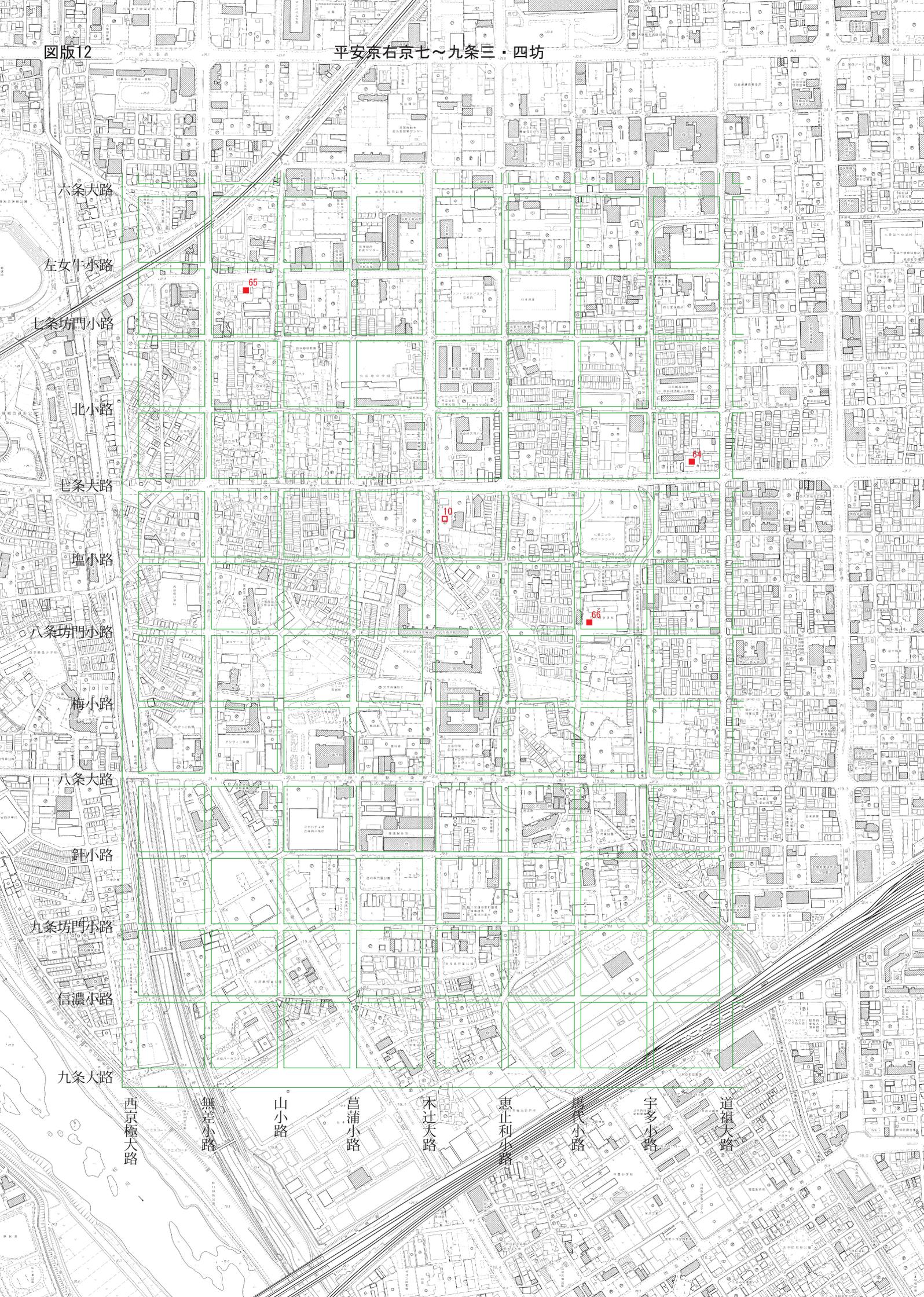
朱雀大路

57

56

58

59



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

塩小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西京極大路

無差小路

山小路

菖浦小路

木辻大路

恵止利小路

馬代小路

宇多小路

道祖大路

65

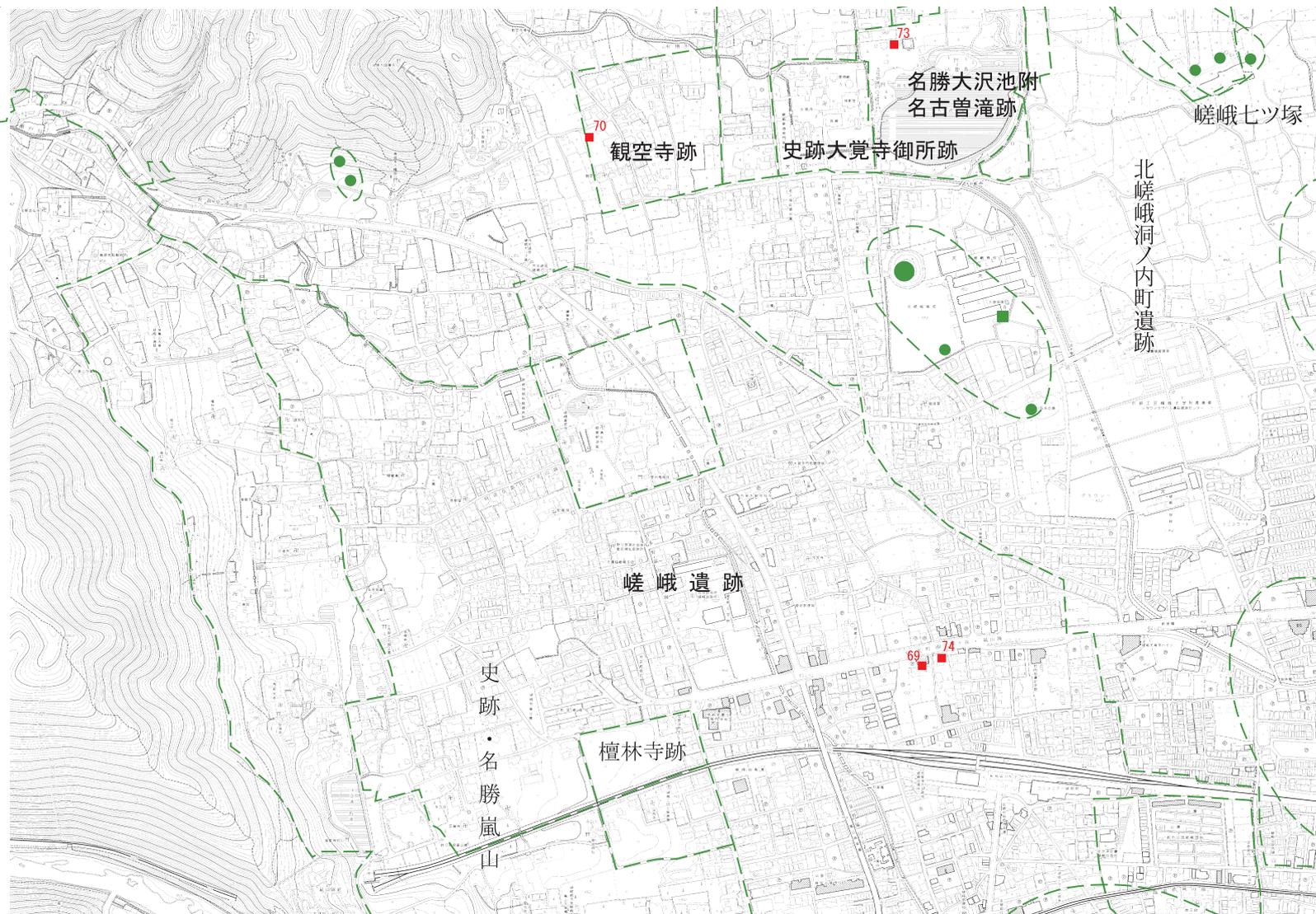
64

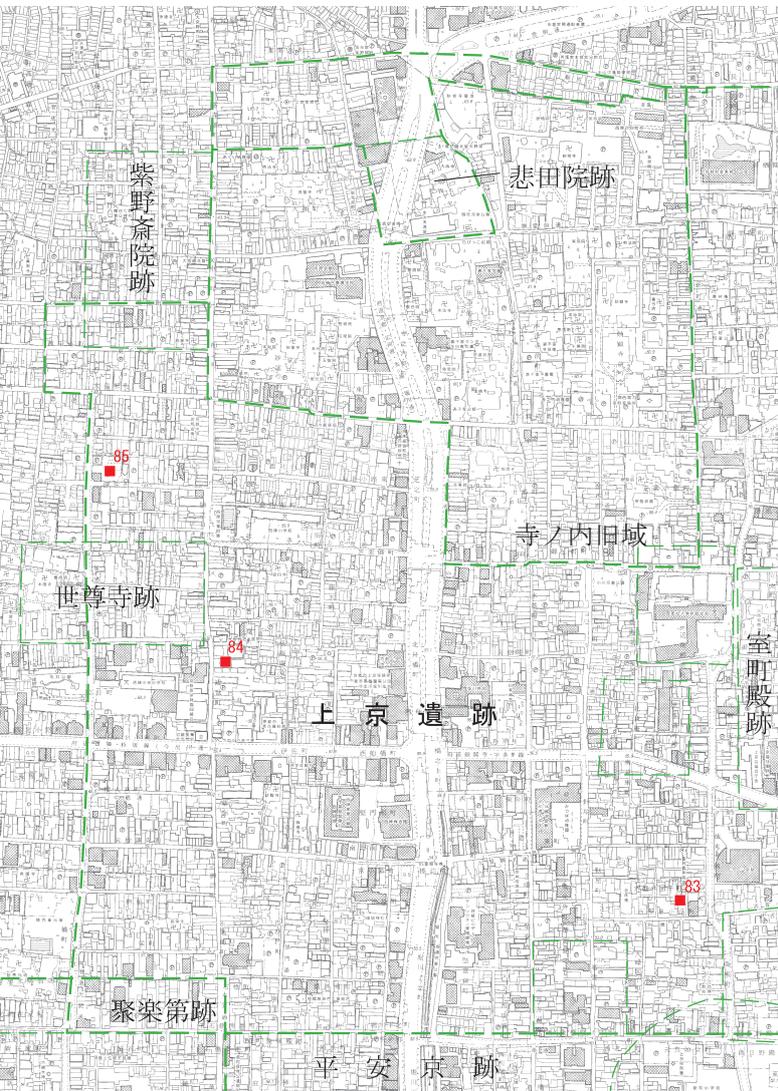
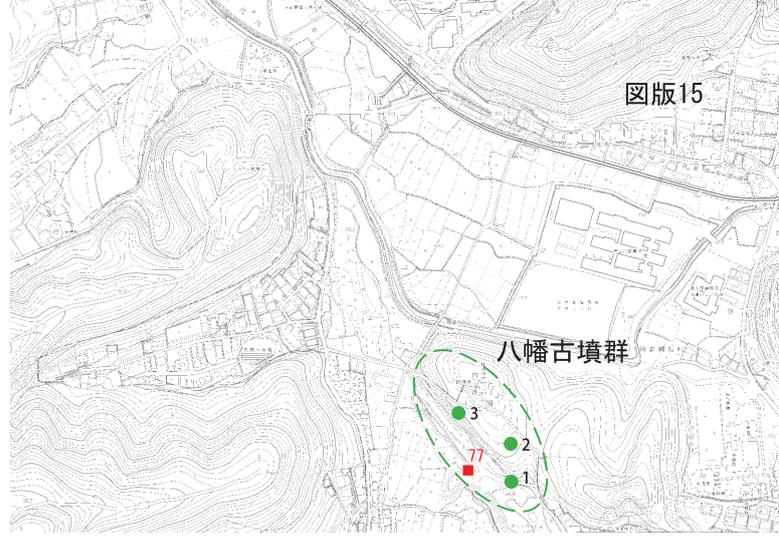
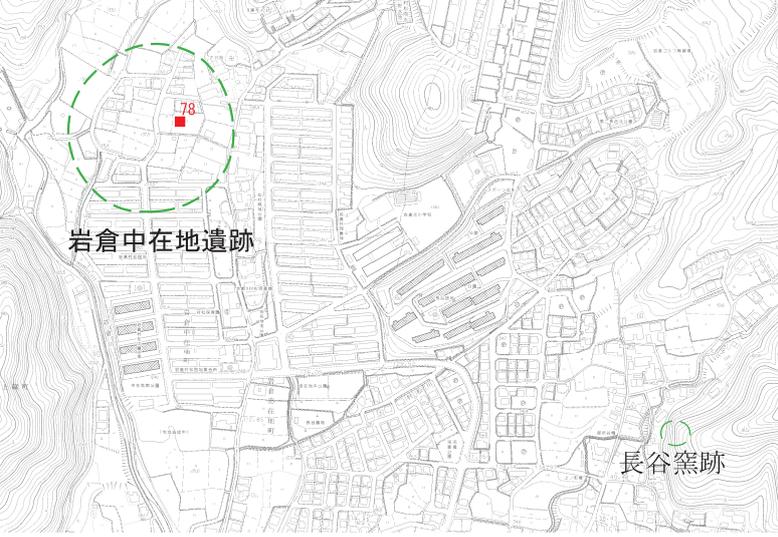
10

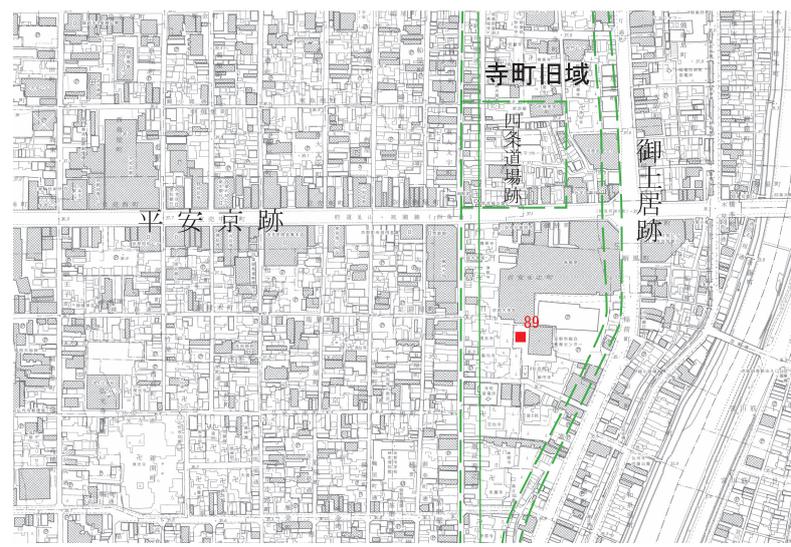
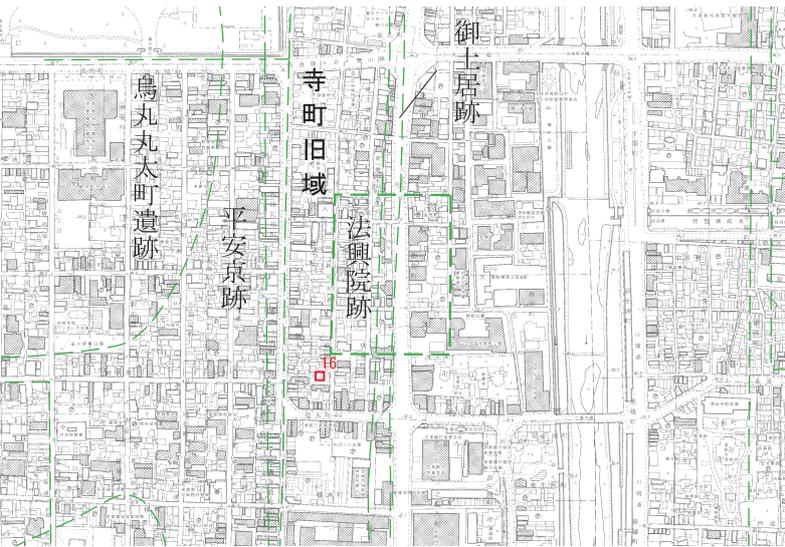
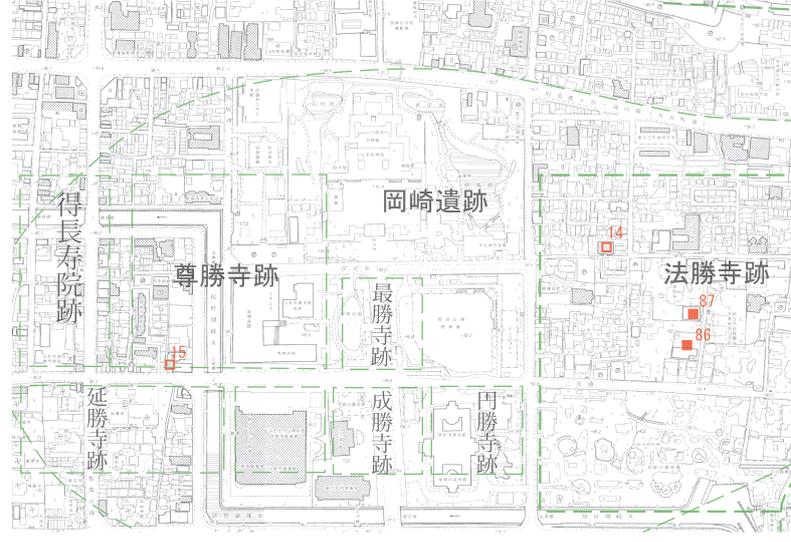
66

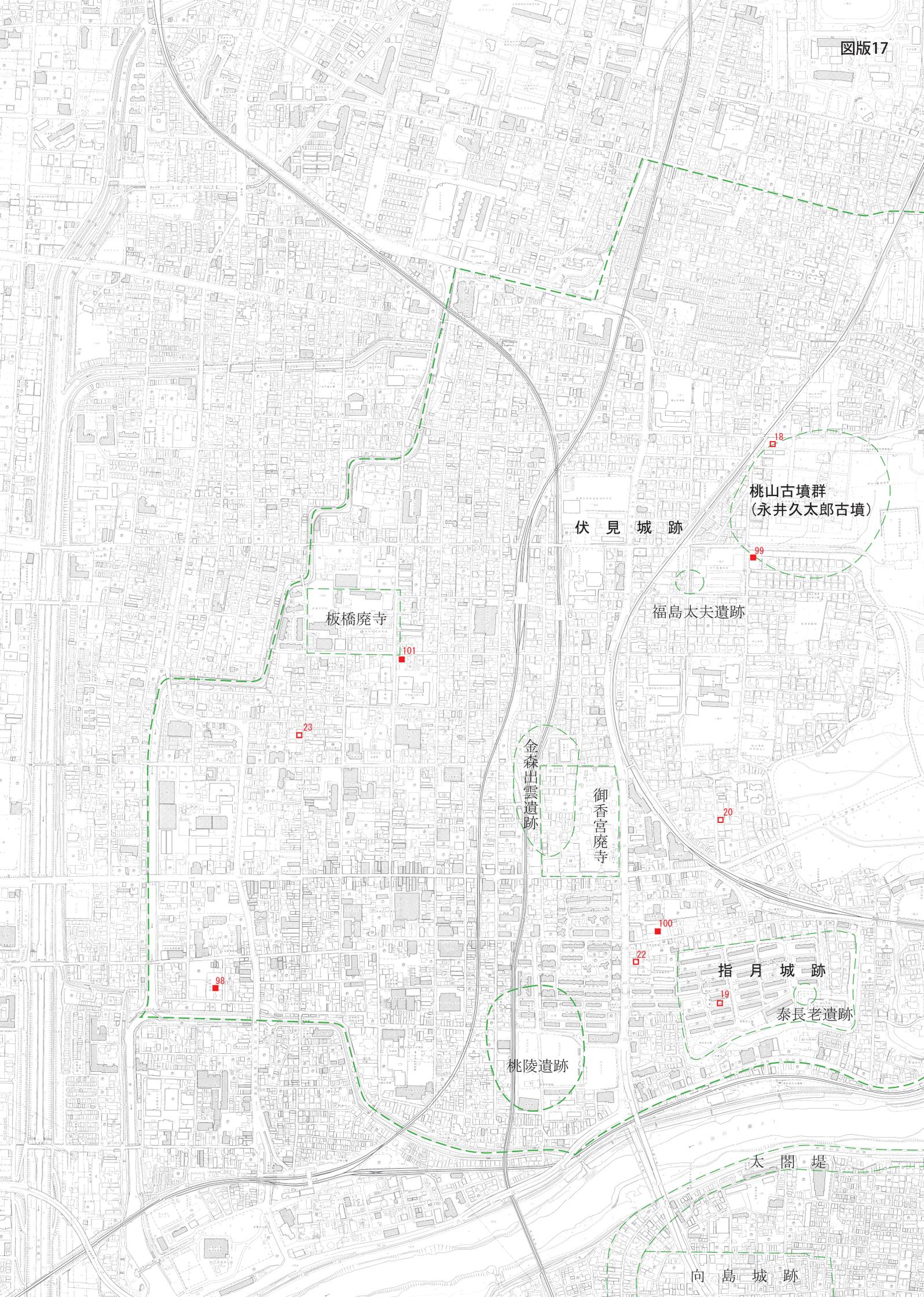


図版14









桃山古墳群
(永井久太郎古墳)

伏見城跡

板橋廃寺

福島太夫遺跡

金森出雲遺跡

御香宮廃寺

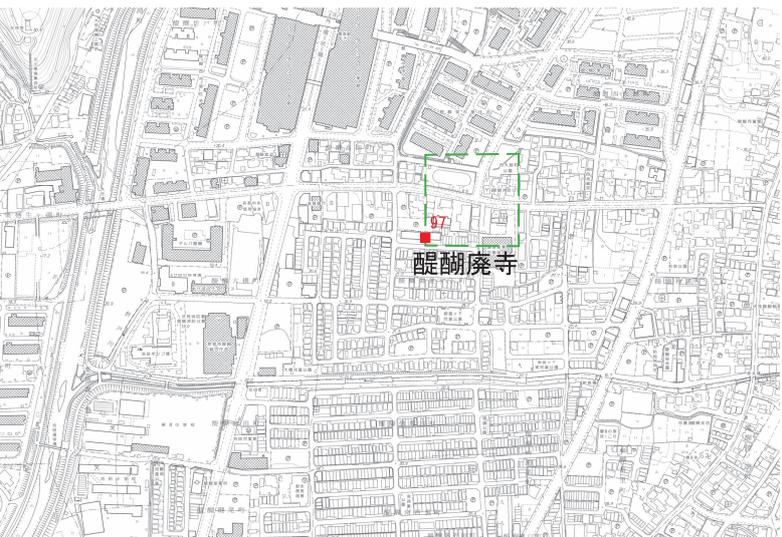
指月城跡

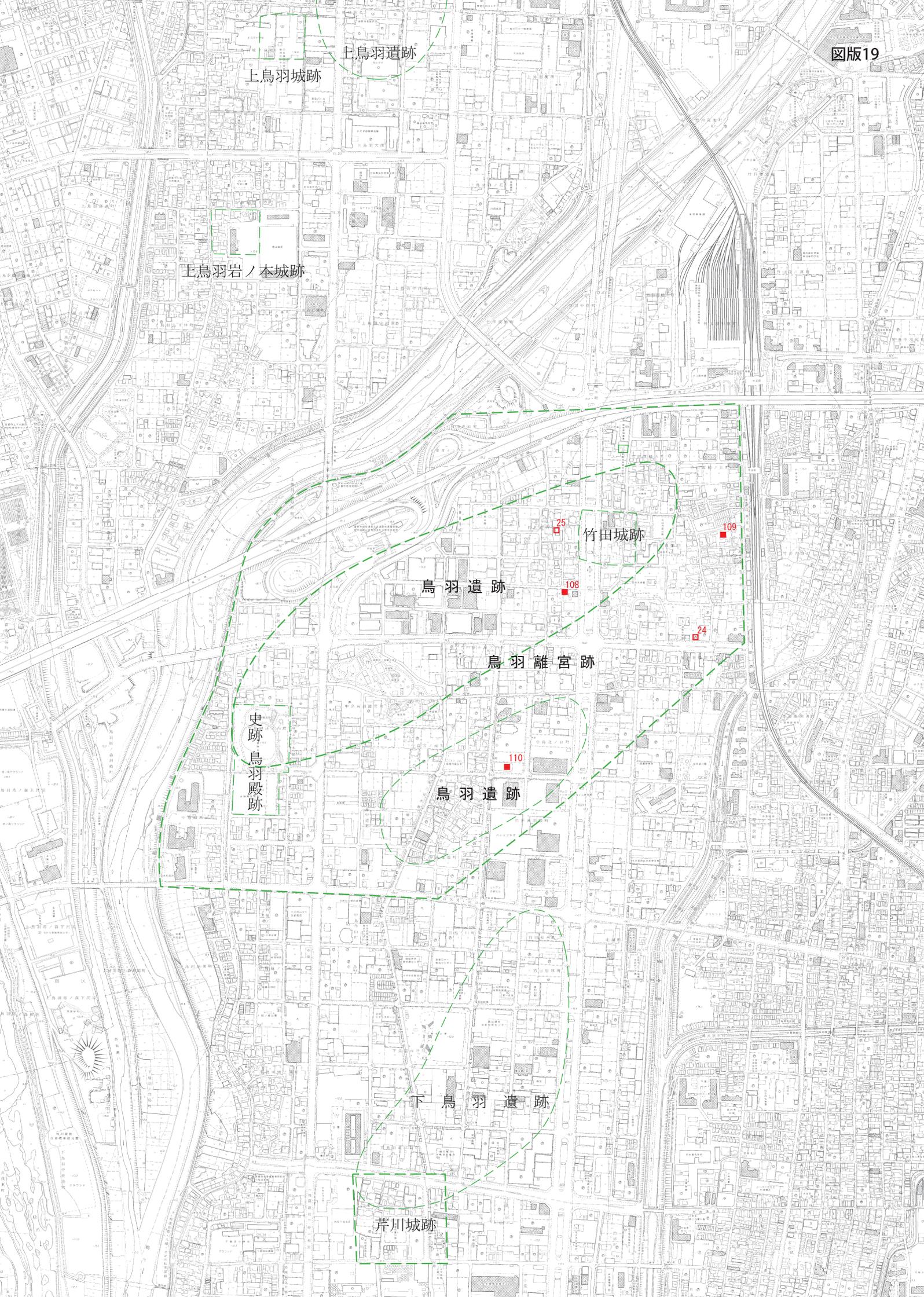
泰長老遺跡

桃陵遺跡

大閘堤

向島城跡





上鳥羽遺跡

上鳥羽城跡

上鳥羽岩ノ本城跡

竹田城跡

鳥羽遺跡

鳥羽離宮跡

史跡
鳥羽殿跡

鳥羽遺跡

下鳥羽遺跡

芹川城跡

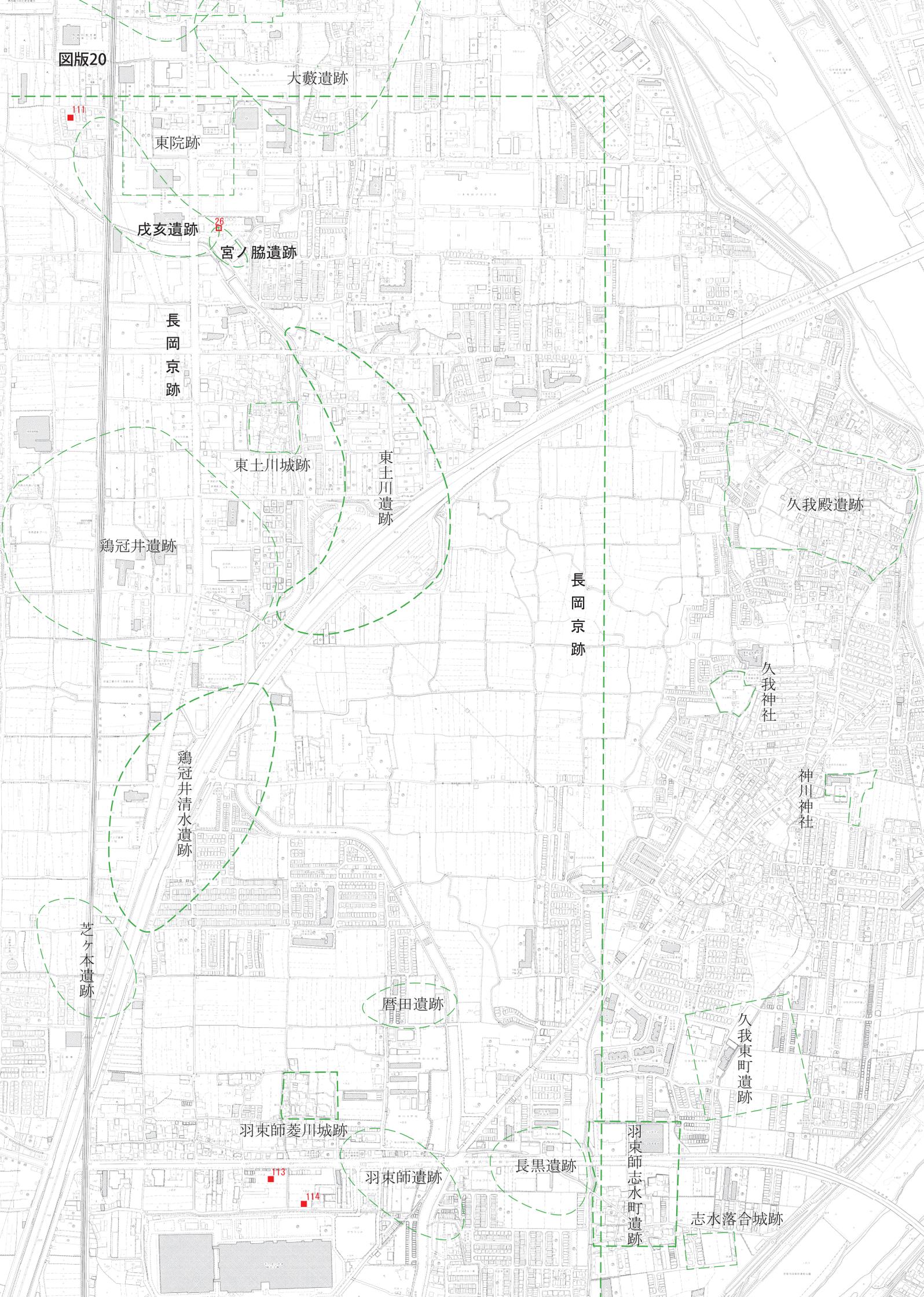
25

109

108

24

110



大藪遺跡

東院跡

戊亥遺跡

宮ノ脇遺跡

長岡京跡

東土川城跡

東土川遺跡

久我殿遺跡

鶏冠井遺跡

長岡京跡

久我神社

神川神社

鶏冠井清水遺跡

芝ノ本遺跡

曆田遺跡

久我東町遺跡

羽束師菱川城跡

羽束師遺跡

長黒遺跡

羽束師志水町遺跡

志水落合城跡

113

114

111

26

京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度

発行日 2016年3月31日
発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住所 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地
Y・J・Kビル2階
TEL. (075) 366-1498
印刷 洛東印刷株式会社
TEL. (075) 501-1010

